

第5章 遺物

第1節 小矢戸地区の遺物

1 弥生土器・土師器他（第61～70図、図版第30～39）

ここでは須恵器・中世陶磁器以外の縄文土器から弥生土器、古式土師器、そして古代の土師器と土製品について説明する。縄文土器を除くと、弥生土器は後期、古代の土師器については、隣接する遺跡での出土例や調査事例の多い福井平野との比較でその所属時期を明確にすることができる。時期の区分において大きな問題があったのは、本遺跡で出土している須恵器と同時期と考えられる土師器、つまり口縁端部が内面肥厚する典型的な「布留甕」がなくなった5世紀代から、古代に典型的な長胴甕が出現する以前の7世紀代までの土師器である。特に奥越盆地での様相が不明であり、今回の出土状況からも明確ではない。前後の時代との比較などからこの時期のものではないかと考えられる土器を可能性があるものと推定した。

図化した土器で最も多いのがSR 04・05・06から出土した土器である。SR 04では堆積状況から上下二層に分けられているが、図化した土器からは明確に分けることはできなかった。しかし、SR 04下層と同じ面で確認されたSR 05・06から古代の土器はなく、古墳時代に下る可能性がある土器が1点あるだけで、その他は弥生時代後期の土器であり、SR 04下層も同様な状況であったと考えられる。

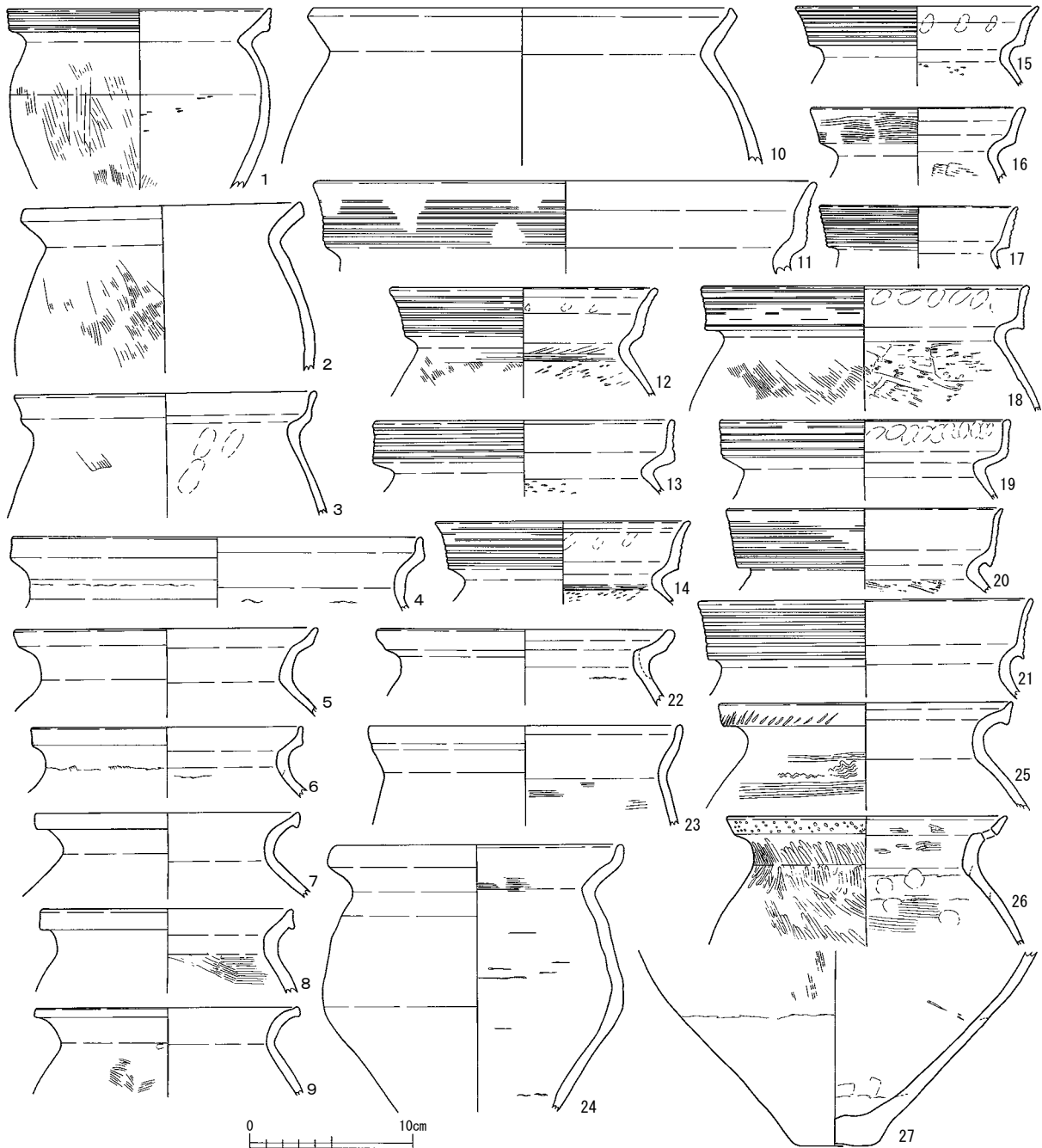
以下、最も点数が多い弥生時代後期の土器（一部には古墳時代初頭の古式土師器となる可能性があるものも含む）、そして問題の古墳時代の土師器、古代の土師器、さらに縄文土器と弥生土器でも中期と判断した土器の4つに区分して説明する。

弥生土器は後期のものがほとんどで、中期と判断して図化したものは2点（218・219）である。後期の弥生土器は福井県嶺北地方で、従来から用いられている当該期の土器編年で石川県加賀地方の「漆町編年」に沿って判断すると、古墳時代初期から前期初頭のものではなく、前期の指標となる口縁内面が肥厚する典型的な「布留甕」も見当たらない。つまり本県嶺北地方で、調査事例の多い弥生時代最終末から古墳時代前期初頭と、弥生時代から古墳時代へと連続する時期の土器とは異なる。

弥生土器についてはこの時期の通例に従い、甕型土器（以下については「型土器」を省略）・壺・高坏・器台・鉢に分類して提示した。

甕は頸部の形状が「く」の字、もしくは丸く屈曲し、口縁に面を有する広い意味での「く」の字甕と、北陸南西部のこの時期の主体となる有段口縁の二者がほとんどを占める。ここで「く」の字甕としたのは、畿内を中心に分布する甕、または古墳時代初頭を中心に当地方でも多くが存在するものではなく、口縁端部に面を有するもの（2・7～10）である。頸部の屈曲も丸く、当地方で古墳時代初頭の遺跡で出土するものとは明らかに異なる。端部の面が斜めとなるもの（2・10）は中期の甕の系譜を引き、擬凹線が施文されるなど、こののち有段口縁へと変化するタイプと考える。端部の面が直立するもの（7～9）は、端部の上下に小さくつまみ出す。むしろ北陸南西部では出土が限られる能登地方などの北陸北西部に多い、通称「能登型甕」と呼ばれるものに形態に近い。口縁の立ち上がりの幅がやや広く、擬凹線を施文するもの（1）は有段口縁との折衷とするか、有段口縁として発達する以前ものとするかは、判断できない。典型的な有段口縁として図化したものは、口縁帯が幅広になり、擬凹線文が5本以上と多くなったもの（11～21）11点である。有段口縁の特徴の一つである口縁内面の連続指頭圧痕が残るも

のは5点（12・14・15・18・19）と比率が低い。月影式最終形態に特徴的な、口縁の先端が先細りして小さく外反するものは5点（11・12・14・15・20）ある。擬凹線が施文されない無文の有段口縁は7点（3～6・22～24）ある。ここでは無文の有段口縁としたが、いずれも口縁帯の立ち上がりが小さく、形状だけではのちに述べる受口状の口縁と区別がしがたい。底部を欠き、胴部下半まで図化できたもの（24）は、胴部の器形から受口状口縁とするべきかもしれない。また頸部の屈曲が弱く、口縁の立ち上がりが小さいもの（23）は、古代の長胴甕である可能性があるが、胎土や色調から弥生土器の可能性が高いとして、こちらに含めた。甕でも近江地方で主体となる受口状口縁（26）、もしくはその影響が強いと考えられるもの（25）が2点ある。前者は立ち上がった口縁外面に刺突列点を施文し同種の口縁としては典型的なものであるが、胴部上半に施文はない。後者は口縁にヘラで刺突し列点とするが、受口状



第61図 弥生土器・土師器他（1）（縮尺1/4）

口縁に典型的な口縁下端の屈曲部に加えるのではなく、その上の口縁帯の下半に加える。この刺突位置の特徴は受口状口縁よりも、有段口縁に加えられるものである。しかし胴部上半の施文は有段口縁にはない櫛描直線文の間に波状文を施文する受口状口縁に特徴的なものである。受口状口縁の甕は、最近の調査で隣接する岐阜県美濃西部を中心に主体的なものであることがわかり、本遺跡に近い犬山遺跡でも多数出土している。甕の底部と判断したもの(27)は、内面のケズリが不明瞭で、底部外面がやや上げ底になることから、受口状口縁の甕のものであろう。

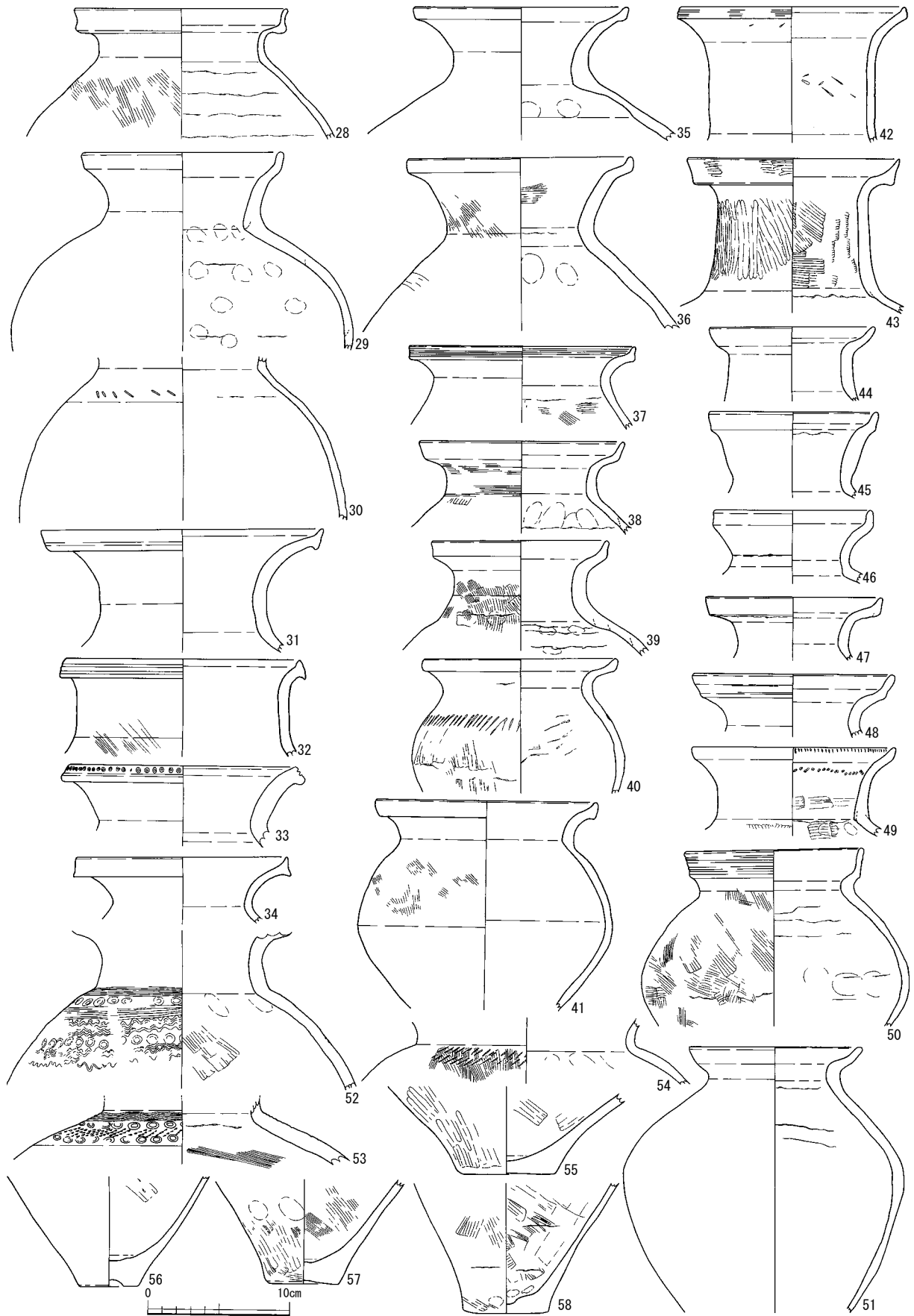
壺は、口縁が有段になるものと、有段にならずに外反してそのまま口縁端部となる単(純)口縁とも呼称されるものの、大きく2種類に分類できる。この2種類ともに特徴的なのが、胴部から口縁部の間の頸部が伸びないで胴部からすぐに屈曲して口縁部になるものと、頸部が伸びてから口縁部になるもの、その頸部の伸びが短くややあまいな中間のもの3タイプがあることである。このように大きく2つに分類できるが、その個体差が大きく、破片や底部も含めると甕(27点)の倍以上になる63点(28～90)を図化したこともあり、すべてについて説明することはできない。

有段口縁の壺は23点あり、口縁部がない胴部破片3点(52～54)も一部残された頸部から有段になると判断した。ここではひとまとめに有段口縁としたが、本遺跡の地理的な位置から、北陸地方で主体となるもの(仮りに「北陸系」と呼称する)に加えて、近江の受口状のもの(仮りに「近江系」と呼称する)、さらに有段口縁であるが立ち上がり小さくつまみ出す程度のものである。これには加飾がほとんどないものの、尾張を中心とした東海地方に特徴的な壺と考えられる(仮りに「尾張系」と呼称する)。「北陸系」の有段口縁は図化した点数も多いが、これには2つのタイプがある。甕に擬凹線を施文する月影式の壺を代表するタイプである。図化できたのは1点(50)だけであるが、頸部が伸びないで胴部からすぐに屈曲して有段口縁となる。胴部も大きく球形に近くなる。胴部から頸部が伸びて有段口縁となるものは8点(42～49)ある。長く直線に頸部が伸びるもの(42～44)から、頸部の伸びが直線ではなく斜めでやや短めのもの(46～48)に分けることができるが、その長さとともに有段の形状にもばらつきがあり、その中間的なもの(45・49)もある。このタイプは月影式より前の法仏式に類例が多いもので、ここでは胴部まで復元できたものはないが、嶺北地方の他の遺跡では大きく胴部が張らない長胴になる事例が多い。甕同様に口縁部に擬凹線を施文するものは5点(31・32・37・42・50)と、その数は甕の半数にも満たない。「近江系」の有段、つまり受口状口縁の壺は5点(28・29・38・39・51)ある。頸部が若干伸びてから口縁部となる。本来は最大径が胴部の中程に位置し、球形の胴部となるもの(28・29)と考えられるが、長胴で胴部の最大径が上に位置するもの(51)が1点だけある。近江系の特徴である口縁帯への刺突列点文などは確認されていないが、直線と波状の櫛描文のある破片(81)が1点だけ図化することができた。最後の「尾張系」としたものが5点(31・33～36)ある。この壺の存在が、北陸でありながら奥越盆地にある本遺跡の特徴となる。尾張では口縁部、胴部ともに様々な加飾が見られるが、本遺跡では1条の凹線を加えるか(31)、円形竹管文を巡らす(33)の2点である。口径とほぼ同じような頸部の太いもの(32)は、北陸に若干の類例がある。

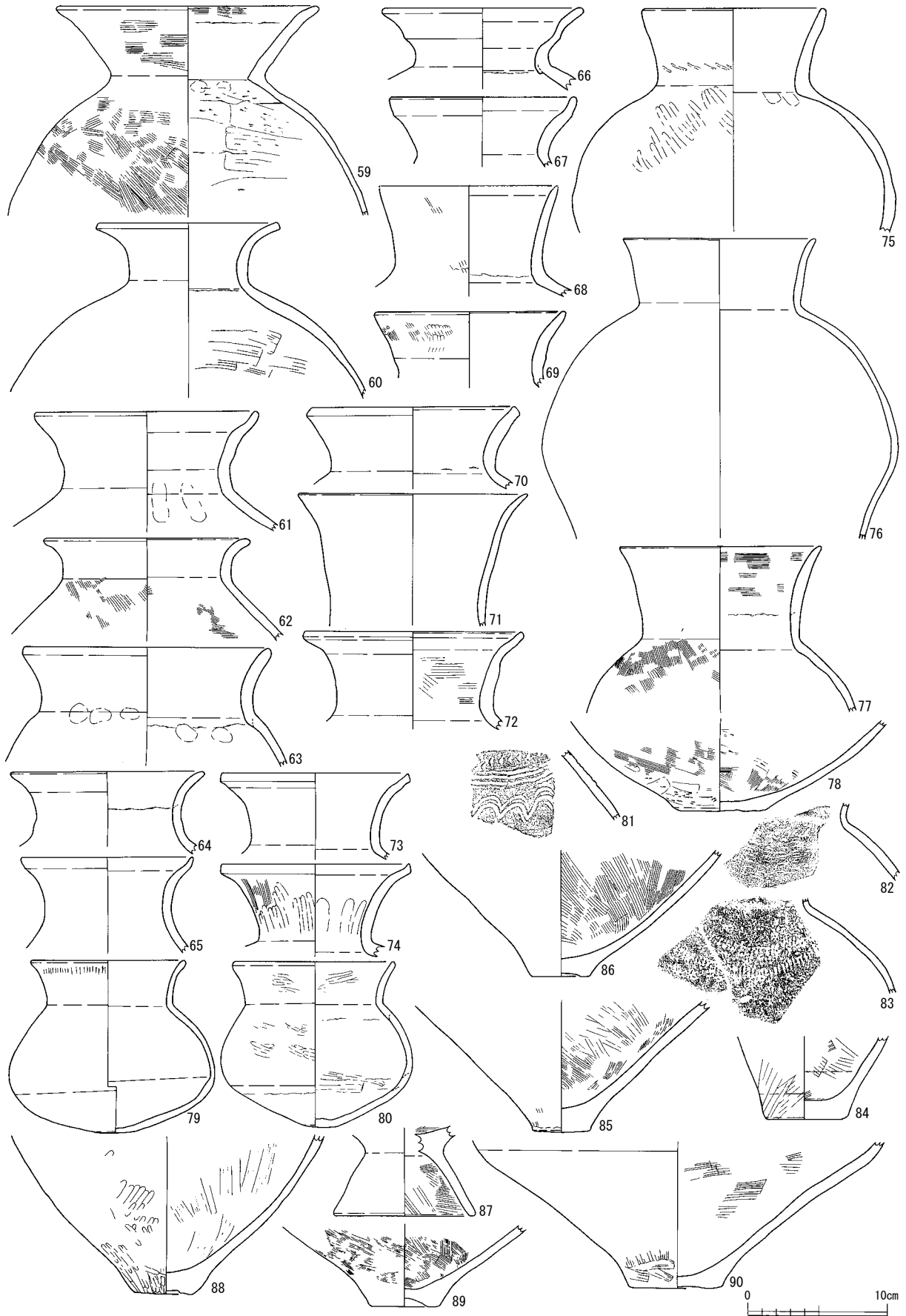
単(純)口縁の壺で、頸部が長く伸びるタイプは、弥生時代後期の法仏式に主体となる長胴のものと考えられ、口径に対して頸部があまり小さくすぼまらないものである。この壺には、口縁が全く変化しないで、そのまま端部となるもの(68・69・71・77)が基本と考えているが、外面に面を有するもの(70・73)、外面の端面を僅かに摘み上げるもの(74)、さらに有段口縁を僅かに意識したもの(61・72)から、明らかに有段とするもの(65・67)まであり、そのバリエーションは多い。頸部が長くならない単純口

縁の胴部は、大きく張る球形になるもの(59～62・75・76)が基本と考えているが、このような壺が出現するのは、弥生時代でも最終末からむしろ古墳時代前期にかけて多くなる。また典型ではないが、二重口縁(60)もあり、先に触れた壺と合わせて、古墳時代前期にまで時期が新しくなる可能性も高い。この他に今回図化した壺の中で、これまで北陸地方ではあまり見かけることのなかった器形がある。丸みのある胴部から、小さく屈曲して立ち上がる短い口縁部がそのまま端部となるもので、同じような器形のものが2点(79・80)あり略完形である。法量もほぼ同じで、小さな平底であることも特徴である。これと同じような器形であるが、胴部下半がなく確定はできないが、前者の口径の1.5倍となる大型の壺(63)もあるようである。本来装飾性の高いとされる壺であるが、北陸地方でも越前などの南西部では、その傾向は指摘できない。これまで口縁部を中心に述べてきたが、ここでは壺の施文について触れておきたい。弥生時代後期を中心とする時期の壺への施文は、口縁部外面と肩部を中心とする胴部上半の2か所にほぼ限定される。口縁内面に刺突列点を施文するもの(49)などは非常に稀である。口縁部外面への施文は擬凹線が一般的だが、ここでは5点と少ない。また円形浮文や棒状浮文を貼り付けることはよく見られるが、ここでは円形浮文ではなく、円形竹管を施文するもの(33)が1点確認されたに過ぎない。棒状浮文を貼り付けるもの2点(99・101)は、口縁形態の分類についての説明とスペースの都合上で高坏・器台の図版とした。頸部以下を欠くが、おそらく壺の口縁であろう。2点とも口縁内面に羽状の刺突で綾杉を施文するが、口縁帯を垂下させるもの(99)と、口縁帯を立ち上げるもの(101)で、前者は頸部に近くなる内面が僅かに盛り上がることから、東海地方のパレススタイルの口縁部と考えられる。肩部を中心とする胴部上半への施文は、刺突列点文と楡描文の2種類である。刺突列点文はヘラ刺突を右上がりに列点に施文する北陸に典型的なもの(40)から、刺突が二段になるもの(54・83)や、横位の刺突の下に縦位の刺突を連ねるもの(82)などのように、本来の北陸では見られないものがある。一般的なものより太めで本数が少ない楡状工具による直線文の下に波状文を重ねるもの(81)は、近江の受口状口縁に特徴的である。この施文パターンに円形竹管文を加えたり(52)、直線文下の刺突列点文の上下に円形竹管文を加えるもの(53)などは、周辺地域でも例を見ない。

ここまで甕同様に壺も口縁部を中心に取り上げてきたが、壺の胴部下半から底部と推定される個体を12点(55～58・78・84～90)図化できた。甕の底部は1点しか図化できなかったが、壺は非常に多い。北陸では甕の胴部はケズリによって薄く仕上げられ、さらに被熱でもろくなり、復元できるほど残されてないのに対して、図化した壺の口縁部から判断すると、胴部はさほど薄くならないことも理由と考えられる。このように図化した底部は三つに分類できる。底径に比して胴部の立ち上がりが急で、長胴になると思われるもの(57・58)で、その立ち上がりが外反気味となる。これに対応する口縁は有段口縁(42～49)である。逆に底径に比して胴部の立ち上がりが大きく開き、胴部の最大径が下半になると想定されるもの(55・85・89・90)で、これも前者と同様に胴部への開きが外反気味となる。これに対応する口縁は有段口縁でも先に「尾張系」としたもの(35・36)である。胴部の最大径が下半に想定されるように、東海地方の弥生時代後期に特徴的な下膨れの器形である。最後に底部としては図化できなかったもので存在が想定されるのは、平底、もしくは突出する底部から大きく内湾気味に立ち上がり、円く球形の胴部となるものである。これにはいくつかの口縁と各地方のものがあるが、北陸の後期に典型的な有段口縁の壺のものである。本報告でも1点(50)しか図化できなかったのも、このような丸みのある胴部の有段口縁壺は少ないかもしれない。ここでは壺の有段口縁として分類したが、北陸南西部での典型とは言えないものが2点(40・41)ある。2点とも胴部下半まで復元できているので器形がほぼ



第62図 弥生土器・土師器他（2）（縮尺1/4）



第63図 弥生土器・土師器他（3）（縮尺1/4）

推定できる。口径に比して頸部もすぼまらなく胴部も長くない。つまり典型的な壺の器形ではなく、鉢の器形に近い。胴部から頸部への屈曲が明瞭で、外反した頸部から口縁が短く摘み上げるように立ち上がる。口縁部が立ち上がって伸びるような有段口縁ではなく、端部全体を摘み上げて上へ拡張するものである。1点(40)にはこの時期の北陸地方に多いヘラ刺突列点文がある。

壺か甕のどちらかに付くと考えられる脚台が1点ある(87)。この形状では鉢などに付くものではなく、福井平野部では「く」の字口縁甕に付く事例はあるが、奥越地方では初見である。

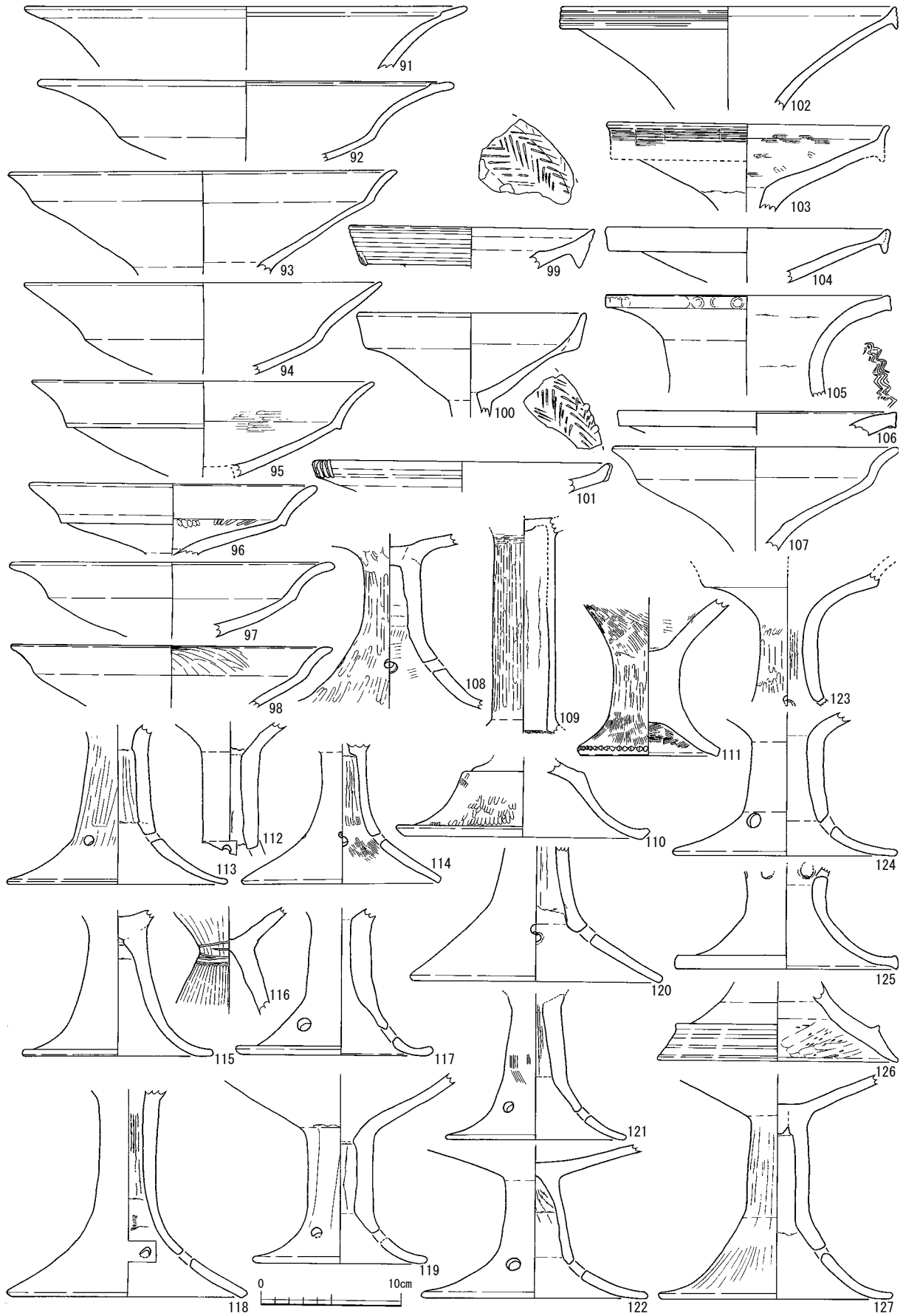
高坏と器台についても、上下、坏部・受部と脚部が接合して、全体がわかるものはない。しかし坏部と受部ともに北陸地方の典型的なものがほとんどであるため、上の部分の区分については問題がない。

高坏の坏部には、円い坏底部から屈曲して段を設けてから、大きく開き口縁部となるもの(91・92)と、「く」の字に屈曲して、そのまま開いて口縁部となるもの(93～98)がある。前者の口径は30cm近い大きなもので、口縁端部内面の肥厚が特徴である。後者は30cm近くなる大きな口径のもの(93)もあるが、多くは20cm前半代の口径で、中には20cm前後のこの時期の高坏としては小ぶりのもの(96)もある。また後者には坏底部がふさがらないもの(107)があるが、稀な存在と考えられる。

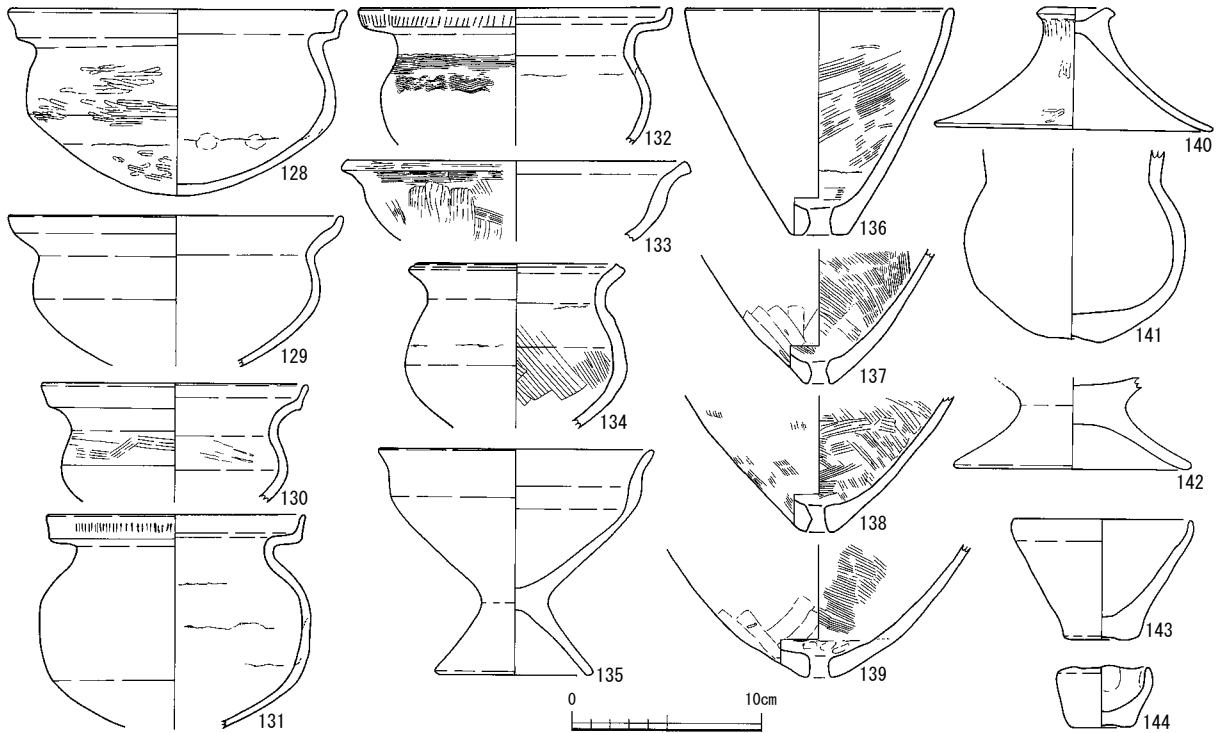
器台の受部も、口縁端面に面を設けるだけのもの(105・106)と、この面を上下に拡張させて幅広とするもの(100・102～104)の2タイプである。前者の端面には円形竹管を施文するもの(105)、内面に山形状に櫛描波状文を巡らせるもの(106)がある。後者には擬凹線を施文するもの(102・103)と、無文のもの(104)がある。さらに口縁帯を上へのみ拡張させるもの(100)などがあるが、口径が小さくこの時期の器台としては例外であろう。

高坏・器台の脚部は、15点を図化した。柱状の上半部から緩く屈曲して、「ハ」の字に開く無段のものが多いが、端部への広がりや柱状部の太さと比較して大きいもの(114・118・127)と、小さいもの(113・115・117・119・121)に分かれる傾向がある。同様な形状でも脚部の底径に比して、柱状部が太いものは器台の脚で、加飾される受部の2点(105・106)に付くものであろう。柱状部の上に孔が開くもの(125)と、下の屈曲部に孔が開くもの(124)がある。脚部には図化した多くの柱状部より短く中実となるもの(111)がある。脚の裾部が柱状部の太さから小さく開くもので、端部に小さな面を設けて、上端に刻目を巡らす。受部の底が深くなる中期まで遡る可能性がある。しかし周辺ではこの時期の類例がなく、北陸地方でも弥生時代中期の高坏は出土例も少なく、この脚部だけでは判断できない。また同様に坏部が深くなる脚部との接合部のみの破片がある(116)。これは中実ではなく、接合の器壁も薄い。この接合部に沈線を巡らす。北陸の弥生時代後期の高坏として典型的なものに棒状の長い脚のもの(109)がある。下半まではなかったが、有段で端部が小さく跳ね上がるもの(110)であろう。棒状の脚でもやや短いもの(112)や、脚の端部を幅広として擬凹線を施文する有段のもの(126)は、器台であろう。

鉢も甕や壺と同様に有段口縁と単(純)口縁があり、これに加えて北陸の弥生時代後期に特徴的な砲弾型の器形の有孔鉢と呼称するものがある。有段口縁の鉢には、福井の平野部で多い擬凹線を施文するものは図化できなかった。いずれも無文(128～130)か、有段の外面に刺突列点を巡らせる近江系と考えられるもの(131・132)である。櫛描直線文と櫛描波状文を巡らせるもの(132)は、口縁端部に平坦面を設ける近江系として典型的である。単(純)口縁の鉢は頸部が「く」の字に屈曲して、口縁端部に幅の狭い面を設けるもの(133・134・141)である。口縁が頸部よりもさらに大きく開き、扁平の胴部となるもの(133)と、胴部が扁平とならないで丸い胴部のもの(134・141)である。有孔鉢は略完形として図化できたのは1点だけだが、最大の特徴である有孔の底部は3点を図化した。略完形のもの(136)



第64図 弥生土器・土師器他（4）（縮尺1/4）



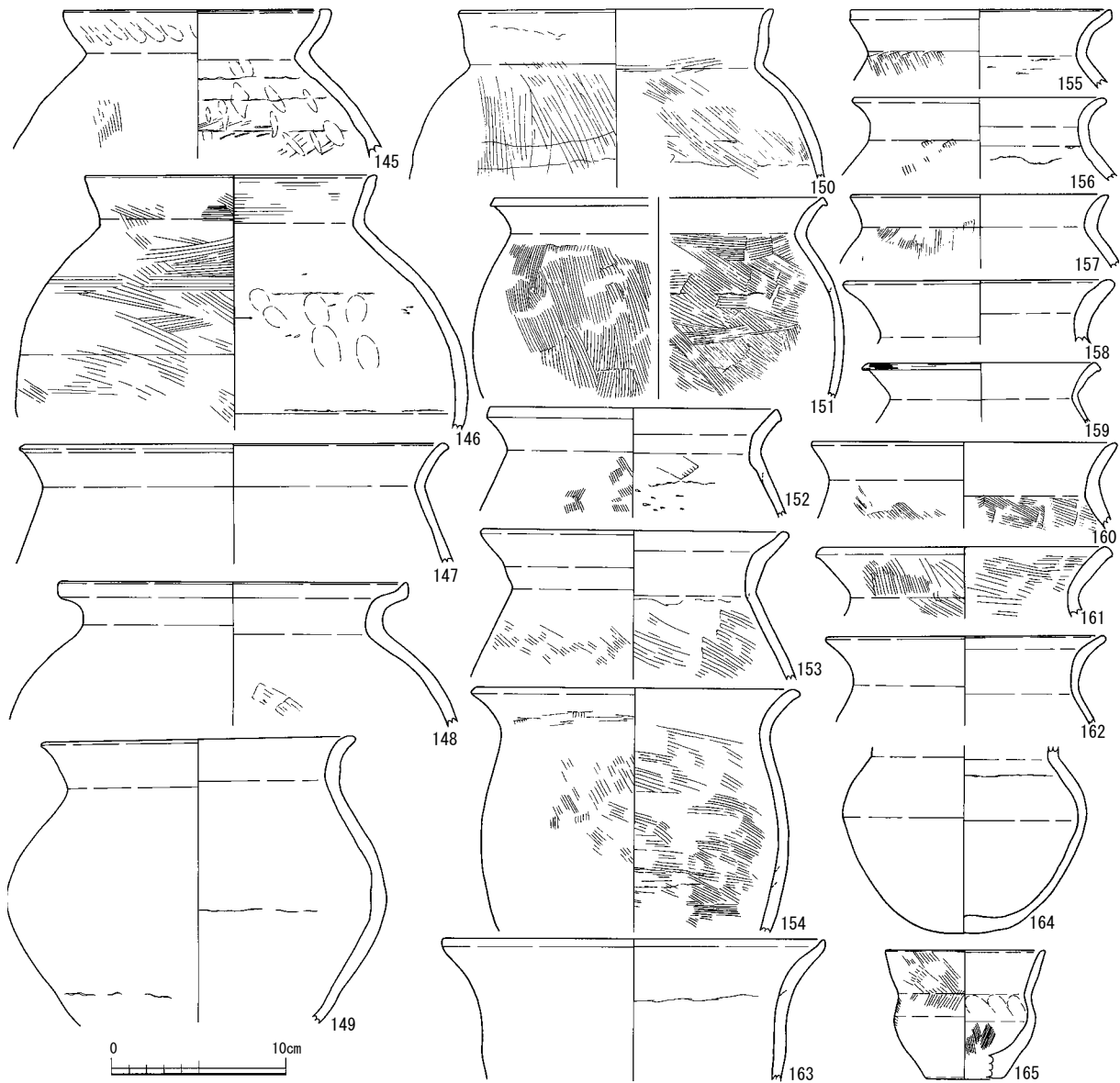
第65図 弥生土器・土師器他（5）（縮尺1/4）

は、非常に小さな平底である。底部のみのもの（137～139）は、いずれも尖底に孔を有するが、三角形の砲弾型（137・138）と丸みのある底部（139）の2種類がある。高坏の坏部の形状であるが、身が深く、脚部も高坏のものとは異なるために台付鉢としたもの（135）がある。深みのある坏部から外反して口縁へ立ち上がるもので、脚部も接合部からそのまま「ハ」の字に開く。これまでは甕や壺の脚台での復元例がなく、鉢などの事例であったが、最近では有段口縁の壺に限っての脚となる事例が、福井平野の下安田向田遺跡などで確認された脚台である。今回図化した壺でもその可能性のあるもの（50）がある。しかしここでは一般的な事例で鉢の可能性を想定した。やや厚めの底部から短く「ハ」の字状に開くもの（142）である。鉢でも小型の部類として、平底の底部から直線的に立ち上がり口縁外面に平坦面を設けるもの（143）がある。また平底から短く立ち上がる小型のもの（144）もあり、弥生時代後期にも、古墳時代中期以降にもある器形で、ここではどちらの時代かは特定できなかった。

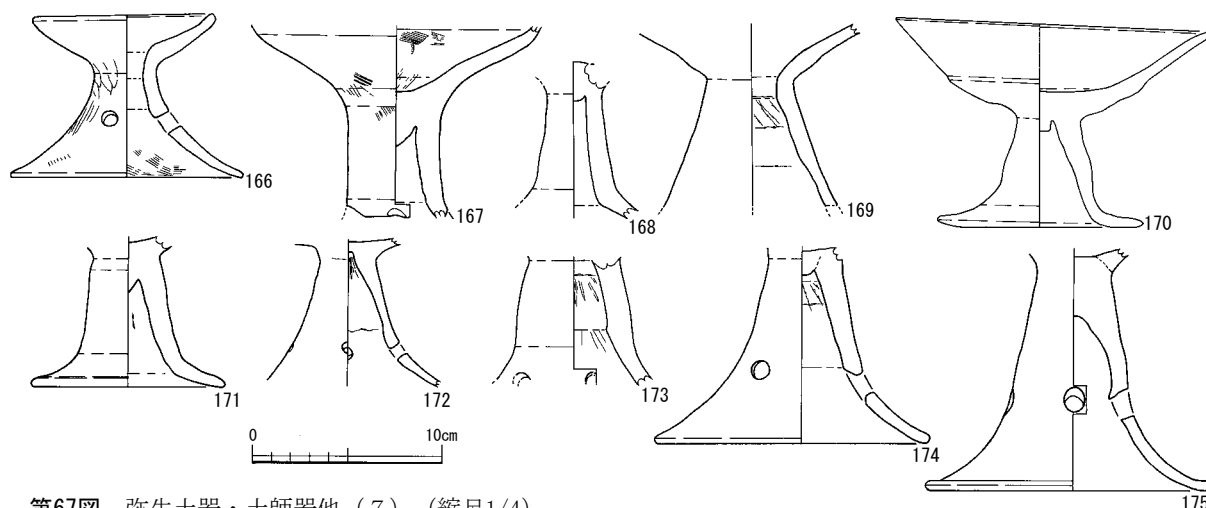
弥生時代後期に続く、古墳時代前期の土器についてはまとまった一群の存在は確認できなかったが、その次の古墳時代中期から古代以前と考えられる甕や高坏などを図化した。この時期の比定については確証がない。その理由は、本遺跡のある奥越盆地では、最近になってようやく発掘調査の事例が多くなり、特に弥生時代から古墳時代にかけてと古代の集落の調査事例はいくつか蓄積されたものの、その間となる古墳時代中期から後期の調査事例は、右近次郎西川遺跡や中丁遺跡で限られた点数の土器が包含層等から出土している程度である。このような状況は奥越盆地よりも発掘調査の事例が多い福井平野でも近い状況で、畿内布留式土器の影響がなくなる古墳時代中期以降古代まで土師器の資料も少なくなり、その主体となる甕も時期を識別できる指標がわからなくなる。また最近の数少ない調査事例でも遺跡ごとの土器の違いも大きいと想定される。つまり周辺の土器の様相を参考にすることもできない状況である。しかし本遺跡でも7世紀代の須恵器が出土し、高坏などには古墳時代中期から後期と考えられるものもあることから、この時期の土師器があることは確実である。そこで弥生時代後期と次の古代に典型的な

ものでないこと、胎土や色調、さらに調整などもそれらとは異なるものをこの時期の土師器の可能性があると考えた。

甕として図化できたのは17点ある。明瞭に「く」の字に屈曲するもの(145～151・159)、屈曲に丸みのあるもの(153～156・162)などである。口縁部の開きでは、直線的に伸びて開くもの(145～147・150)、ゆるく外反し丸みのある頸部のもの(149・154・162)、また1点のみ頸部が少し伸びてから屈曲し、口縁端部を上へ摘み上げるもの(148)もある。口縁端部の処理については、先端部を丸くするか、やや先細りとするものが多いが、端部に面をつくるものもある。その面の取り方も、斜めにするもの(151・152・159)や、垂直とするもの(148・155)、上を平坦にするもの(145・146)である。この上を平坦とするものには、伸びた口縁の中ほどが僅かに厚く膨らむもの(145)があり、これは布留式甕の後出的な特徴を示す。甕胴部の器形が想定できるものには、球形の胴部(146・151など)か、やや胴が張るタイプ(149)が主体であるが、長胴で頸部の屈曲が弱いものが2点(154・163)ある。器形は弥生時代中期の甕に近いが、この時期の甕の口縁端部には刻み目を入れることが多く、周辺の中期の土器の調整や胎土・色調



第66図 弥生土器・土師器他(6) (縮尺1/4)



第67図 弥生土器・土師器他（7）（縮尺1/4）

に同じようなものがないので、古墳時代中後期の甑の可能性を考えた。いずれにせよ弥生時代中期の甕である可能性は大きく残る。ここで壺の口縁として図化できたものはないが、丸底の胴部（164）が壺である可能性が高い。厚手の平底から丸みのある胴部が立ち上がり、小さく屈曲する頸部から口縁となるもの（165）は、壺とするよりも鉢に分類されるものであろう。

高坏は、この時期に典型的な器形として復元できたもの（170）がある。脚部上半がやや膨らむ。その他は脚部、またはその一部のみの図化である。弥生時代後期に特徴的なミガキ調整が明確ではなく、むしろ指押さえなどの成形の痕跡が目立ちやや厚手である。

古代と考えられる土師器は、坏・皿・碗などの供膳具類と、甕・鉢・甑などの煮沸具の2種類である。甕は丸い胴部になるもの（176）と、長胴になるもの（177・178）の2つのタイプであるが、いずれも口縁端部に面を設ける。前者の丸い胴部のもは古代でも古くなるか、古墳時代後期にまで遡る可能性もある。甕には口径が小さくなるものがある。これには口縁端部に面を設けるもの（179・182・183）と、丸くするもの（180・181）の形状がある。鉢は2点（184・185）図化したが、いずれも器壁が厚く周辺でも類例が見当たらない。口縁端部を小さく折り曲げるだけのもの（184）と、やや伸ばして開くもの（185）であるが、両者とも調整が粗く、特に後者は輪積痕を明瞭に残している。甑は下半部を欠くもの、ある程度器形がわかるもの（186）である。外傾する胴部から、わずかであるが口縁部が外反する。把手は牛角状に伸びる。把手については、丸みのある突起状（206）、もしくは円柱状のもの（204・205・209）と、舌状にやや平べったいもの（207・208）の2つのタイプがある。後者に残された胴部の一部は丸みのある形状となっており、鍋の胴部に付く把手である可能性が高い。

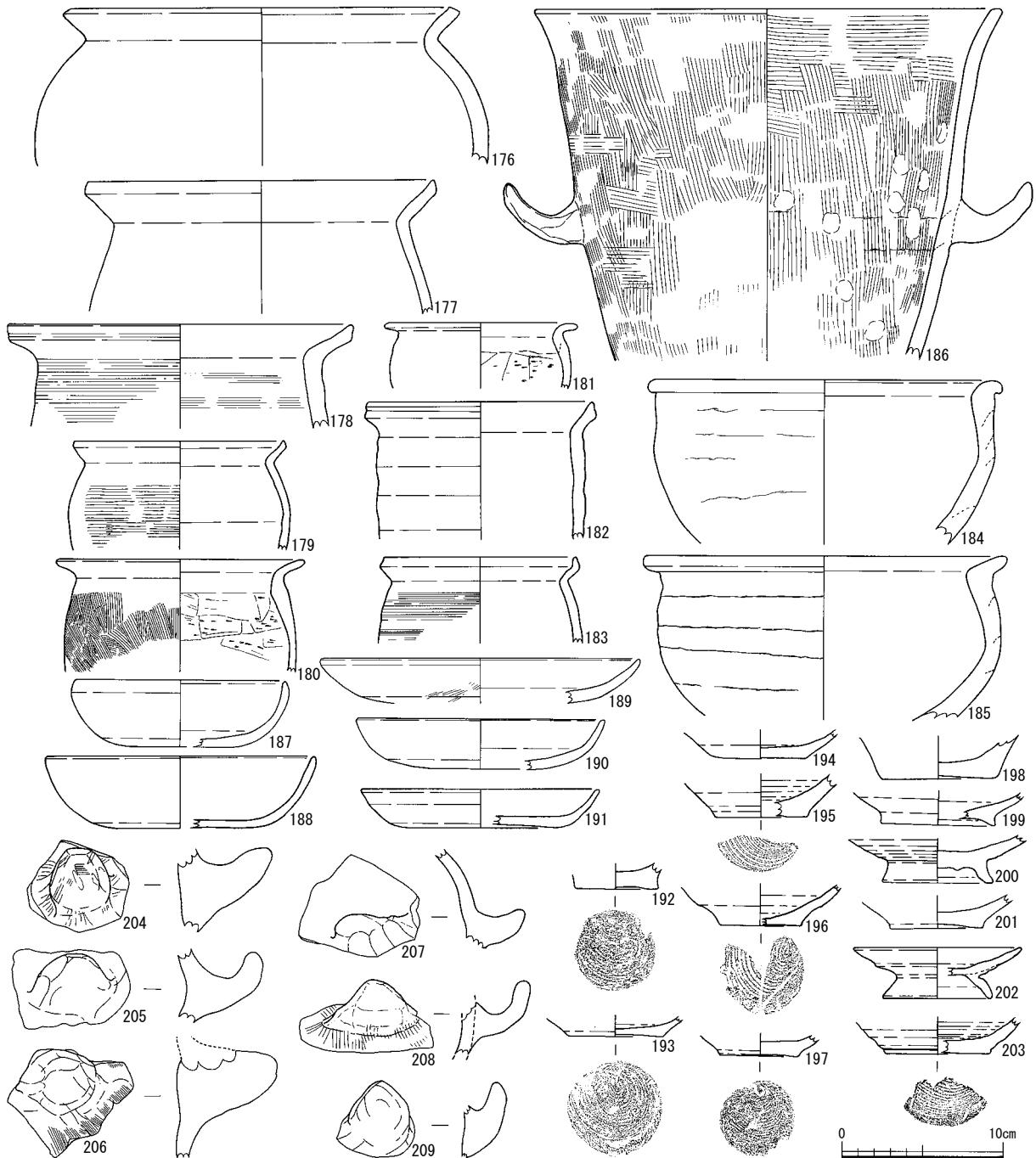
供膳具である坏は身が深い2点（187・188）で、皿は立ち上がりも緩く開き浅いもの3点（189～191）である。碗は底部しか図化できていないが、糸切り底が基本である（193～197）。糸切り底でも立ち上がりが急なもの（192・198）は、大きさから甕等（179～183など）の底部であろう。皿に高台が付くものは有台皿（石川県漆町遺跡での分類による）とされるもので、本県での出土事例は見当たらない。

弥生時代後期以前の土器として縄文土器8点と、弥生土器でも明らかに後期以前の中期と判断した土器2点を図化した。

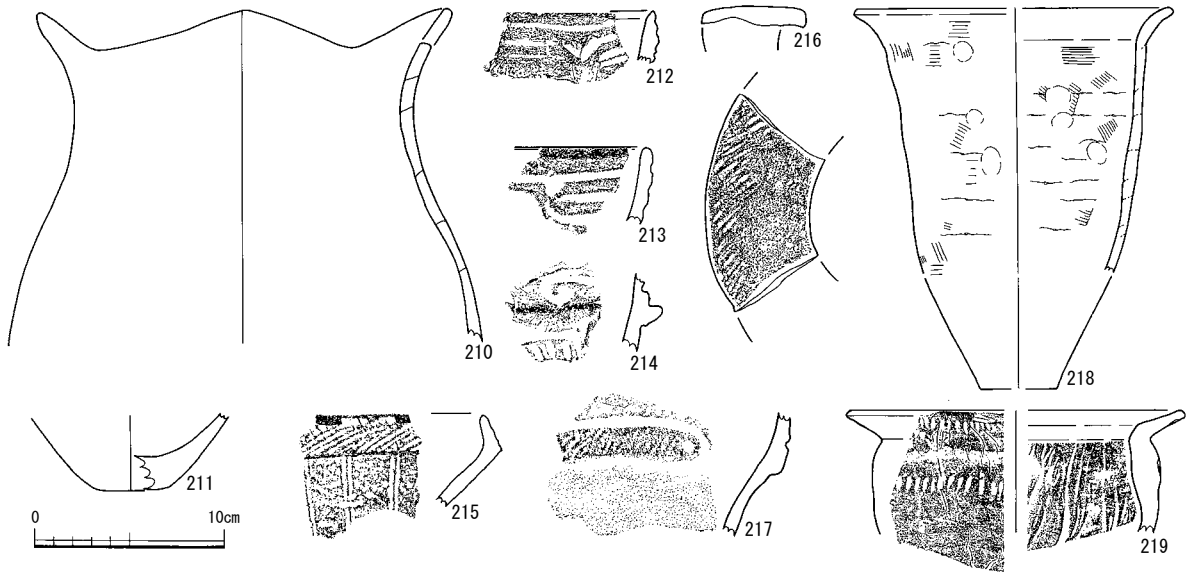
縄文土器は後期のもの4点と晩期のもの3点に、時期も器種も不明なもの1点である。胴部が丸く膨らむ波状口縁の土器（210）は無文である。図化した底部（211）が、同一個体と考えられる。口縁部は

ないものの、凸帯がある破片 (214) は、深鉢の口縁部直下の突起の部分であろう。下半を無文とし、その上に沈線で区画した内側に縄文を充填するもの (217) は、深鉢の胴部中程の破片であろう。以上の4点が後期と考えられる。晩期の浅鉢と考えられる破片が3点あり、2点は沈線で施文するもの (212・213)、もう1点は内側に屈曲する口縁帯に縄文を施文する (215)。時期・器種ともに不明な破片 (216) は、環状の平坦面に縄文を施文し、反対側に剥離痕を残す。浅鉢などの口縁帯の一部であろうか。

図化した2点の弥生時代中期の土器は、口縁から胴部まであるものの、口縁部の残存が少なく、口径が不確実である。下半まで復元できたもの (218) は、長くスリムな胴部から口縁部がゆるく外反する甕である。内外面ともに成形時の接合痕を明瞭に残し、製塩土器を思わせる。もう1点も甕 (219) である



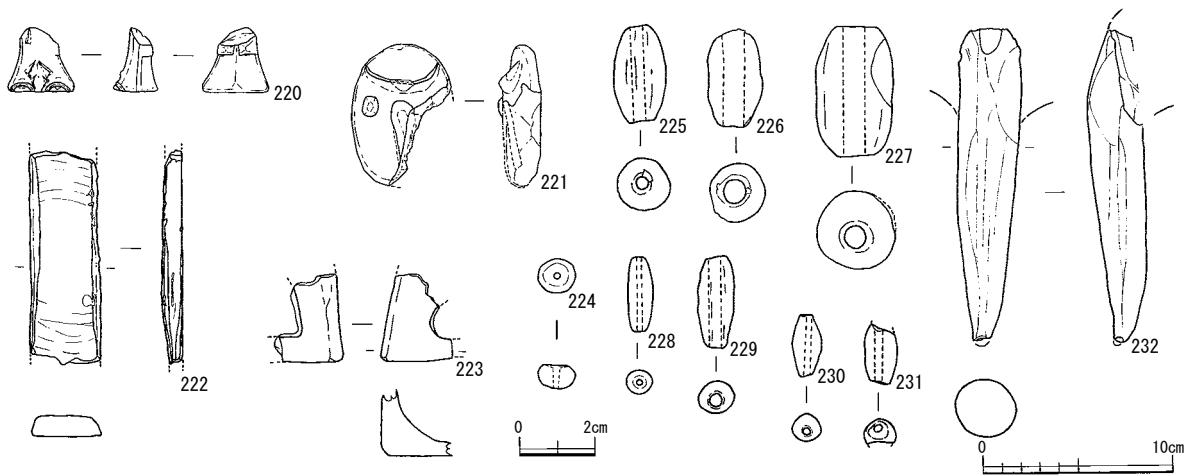
第68図 弥生土器・土師器他 (8) (縮尺1/4)



第69図 弥生土器・土師器他(9) (縮尺1/4)

が、頸部の屈曲が強く、口縁が直線に伸びる。口縁下端と胴部上半にヘラ刺突列点を施文する。全体に器壁が厚く、特に頸部から胴部が厚く、内面に成形時に生じた絞り目を多数残す。

土製品は、縄文時代から古代末までの13点を図化した。縄文時代には、扁平な楕円形の土版(221)がある。全体の1/3を欠くが、中央に凹部を作り、残された一方に寄せて弧状の突帯を貼り付ける。その下の左側に円形突起を貼り付けるが、右側は欠失している。弥生時代後期を中心に類例がある容器形土製品の脚部コーナー部分と考えられる破片(223)には、円形と楕円形の透かしの一部が残されている。同様な色調と胎土の板状の土製品(222)も、容器形に類するものであろうか。土製の人形の脚部と考えられるもの(220)は、表土での採集品で、近世の土人形の可能性がある。土玉(224)はみかんのような扁平な球形形状を呈する。土錘は太さで分けられ、大1点(227)、中2点(225・226)、小4点(228～231)の7点を図化した。小には長いもの(228・229)と短いもの(230・231)の2種類ある。棒状で一方の先端が細くなるもの(232)は、反対側に剥離痕があり、羽釜の脚と考えられる。



第70図 弥生土器・土師器他(10) (縮尺1/4、224のみ1/2)

第1節 小矢戸地区の遺物

第2表 弥生土器・土師器他観察表(1)

※法量はcm

番号	出土地	器種	口径	底径	器高	調整/施文		残存率/12		色調		胎土	焼成	備考
						外面	内面	口縁部	底部	外面	内面			
1	E14 SK06	甕	(16.1)		(11.1)	口:擬凹線(3)、体:ナデ・ハケメ	口:ナデ、頸:ナデ、体:ハケメ	4		にぶい橙	浅黄橙	3	良	外面スス付着
2	B20 表土	甕	(16.8)		(10.3)	口:ナデ、体:ハケメ		2		浅黄橙	浅黄橙	4	良	内面摩滅
3	C20 SR04	甕	(18.4)		(7.7)	体:ハケメか	体:一部指ナデ	2		灰白	灰白	3	良	内外面摩滅
4	C20 SR04	甕	(25.0)		(4.7)	ナデ	ナデ	1		灰白	灰白	3	良	
5	D20 SR04	甕	(18.4)		(5.4)	口~頸:ナデ	口~頸:ナデ	3		浅黄橙	浅黄橙	4	良	
6	C18 SR04	甕	(16.4)		(4.3)	体:ハケメか		8		灰黄	灰黄	4	良	内外面摩滅
7	E16 SR06	甕	(16.0)		(5.3)			4		灰白	灰白	4	良	内外面摩滅
8	D20 SR04	甕	(15.2)		(5.2)	口~体:ナデ	口:ナデ、体:ハケメ	2		にぶい黄橙	灰黄	4	良	外面スス付着
9	C20 SR04	甕	(16.1)		(5.5)	口~頸:ナデ、体:ハケメか	口~頸:ナデ	2		浅黄橙	浅黄橙	3	良	内面摩滅
10	C25 包含層	甕	(25.7)		(9.7)		口:ナデ、体:ケズリ	1		明褐	橙	3	不良	外面摩滅
11	C11 SR01	甕	(30.8)		(5.7)	口:擬凹線(8以上)		1		浅黄橙	橙	2	良	
12	C11 SR01	甕	(16.4)		(6.8)	口:擬凹線(7)、体:ナデ・ハケメ	口:ナデ・指押さえ、頸:ハケメ、体:ナデ	1		にぶい黄褐	にぶい黄褐	2	良	外面口~頸部に被熱痕
13	C15 SR05	甕	(19.2)		(4.6)	口:擬凹線(5)、頸~体:ナデ	口:ナデ、体:ケズリ	3		にぶい橙	にぶい橙	3	良	外面スス付着
14	C11 C列ト	甕	(15.6)		(5.2)	口:擬凹線(7)、頸~体:ナデ	口:ナデ・指押さえ、頸:ナデ・ハケメ、体:ヘラナデ	1		褐灰	にぶい黄褐	2	良	全体に被熱痕
15	C19 SR04	甕	(14.8)		(4.9)	口:擬凹線(8)	口:指押さえ、体:ケズリか	6		橙	橙	3	良	内外面摩滅
16	C20 SR04	甕	(13.0)		(5.2)	口:擬凹線(7)、体:ナデ	口:ナデ、体:ケズリ	6		にぶい黄橙	灰白	1	良	
17	C15 SR05	甕	12.2		(3.9)	口:擬凹線(8)、頸~体:ナデ	口~体:ナデ	7		褐灰	褐灰	3	良	内外面スス付着
18	C20 SR04	甕	(20.0)		(7.8)	口:擬凹線(7)、頸:ナデ、体:ハケメ	口:ナデ・指頭圧痕、体:ケズリ	2		にぶい黄橙	にぶい黄橙	3	良	
19	E21 SD29	甕	(17.8)		(5.0)	口:擬凹線(5)	口:指頭圧痕、体:ケズリ	2		浅黄橙	灰黄褐	3	良	
20	B15 SR04	甕	(16.8)		(5.2)	口:擬凹線(9)、体:ナデ	体:ナデ	1		にぶい橙	にぶい橙	2	良	
21	B15 SR05	甕	20.4		(6.2)	口:擬凹線(7)、体:ナデ	口~体:ナデ	10		黄橙	黄橙	3	良	外面口縁部に被熱痕
22	B18 包含層	甕	18.0		(4.1)			3		淡黄	淡黄	4	良	内外面摩滅
23	C18 SR04	甕	19.0		(6.1)	口:ナデ	口:ナデ、体:ハケメ	10		灰黄	灰黄	4	良	外面摩滅
24	A21 SR04	甕	17.5		(16.5)	体:ハケメ	口:ナデ	7		灰白	にぶい黄橙	4	良	内外面一部スス付着
25	C20 SR04	甕	(18.0)		(6.7)	口:刺突列点文、頸:ナデ、体:直線文・波状文		3		浅黄橙	灰白	4	良	内面摩滅
26	B20 SR04	甕	(17.0)		(8.0)	口:刺突列点文、体:ミガキ	口:ミガキ、体:指押さえ・ハケメ	3		灰白	灰白	4	良	内外面赤彩、口縁部孔あり
27	E19 SR06	甕		5.4	(14.0)	ハケメか	底:ケズリか		12	灰白	黄灰	4	良	内外面摩滅
28	C20 SR04	壺	15.0		(9.4)	口:ナデ、体:ハケメ	口:ナデ、体:ケズリ・指押さえ	6		にぶい黄橙	にぶい黄橙	3	良	
29	C18 SR04	壺	13.9		(14.1)		口:ナデ、体:ナデ・指押さえ	5		浅黄橙	淡黄	3	良	外面摩滅
30	E14 SK06	壺			(11.9)		体:ナデ			浅黄橙	浅黄橙	3	良	外面体部に被熱痕
31	E19 SR06	壺	(19.8)		(8.8)	口:ナデ・擬凹線(1)、頸~体:ナデ	ナデ	6		にぶい橙	浅黄橙	4	不良	
32	C15 SR05	壺	(16.5)		(7.0)	口:擬凹線(2)、頸:ハケメ		1		灰白	褐灰	2	良	内外面摩滅
33	B15 SR05	壺	(16.0)		(5.8)	口:ナデ・円形竹管文、頸:ナデ	ナデ	3		浅黄橙	浅黄橙	3	良	
34	B21 SR04	壺	(14.8)		(4.7)	口~頸:ナデ	口~頸:ナデ、体:ケズリか	2		浅黄橙	浅黄橙	3	良	内外面摩滅
35	E19 SR06	壺	(14.9)		(9.4)		体:指押さえ	6		浅黄橙	にぶい黄橙	4	良	内外面摩滅
36	E19 SR06	壺	(15.8)		(12.2)	頸~体:ハケメか	体:ハケメか	1		にぶい橙	にぶい橙	3	良	内外面摩滅
37	D20 SR04	壺	(16.0)		(5.9)	口:擬凹線(7)、頸:ナデ、体:ハケメ	口:ハケメ、頸:ナデ、体:ハケメ	5		にぶい橙	にぶい橙	3	良	
38	C21 SR04	壺	(14.3)		(6.6)	口:ナデ、頸:ハケメ、体:ハケのちナデ	口~頸:ナデ、体:指押さえ・ナデ	2		灰白	灰白	3	良	
39	C20 SR04	壺	(12.4)		(8.2)	口:ナデ、体:ハケメか・指押さえ	口:ナデ、体:ナデ・指押さえ	3		にぶい黄橙	にぶい黄橙	3	良	
40	D19 D列ト	壺	13.8		(9.6)	口:ナデ、体:ハケメ・刺突列点文	口:ナデ、体:ケズリ	5		浅黄橙	浅黄橙	4	良	
41	D15 SR06	壺	(15.8)		(14.9)	口~頸:ナデ、体:ハケメか	口~体:ナデ	2		にぶい褐	にぶい橙	2	良	外面スス付着
42	C1 SR02	壺	(15.8)		(9.7)	口:ナデ	口~頸:ナデ	3		淡橙	淡橙	3	良	
43	C19 SR04	壺	(14.8)		(11.0)	口:ミガキ、頸:ナデ・ミガキ	口:ナデ、頸:ハケメ	2		灰白	灰白	3	良	
44	C20 SR04	壺	(13.6)		(5.3)	ナデ	ナデ	8		灰白	灰白	3	良	
45	E19 SR06	壺	(11.8)		(6.2)			6		淡黄	浅黄橙	3	良	内外面摩滅

第5章 遺物

46	D20 SR04	壺	11.0		(5.2)	ナデ	ナデ	11		灰黄	灰黄	2	良	
47	D20 SR04	壺	(12.4)		(4.5)	口～頸:ナデ	口:ナデ・指押さえ・頸:ナデ	6		にぶい黄橙	にぶい黄橙	3	良	内外面摩滅
48	D20 SR04	壺	(14.0)		(4.5)			4		浅黄橙	浅黄橙	1	良	内外面摩滅
49	C20 SR04	壺	(14.2)		(6.3)	口:ナデ、体:一部ハケメ	口:刺突列点文、頸:ナデ・刺突列点文、体:指押さえ・ナデ	3		浅黄橙	浅黄橙	4	良	外面摩滅
50	C20 SR04	壺	12.4		(12.7)	口:擬凹線(4?)、体:ハケメ	口:ナデ、体:ナデ・指押さえ	8		浅黄橙	にぶい黄橙	3	良	外面体部にスス付着
51	C18 SR04	壺	(12.1)		(18.9)			3		浅黄橙	浅黄橙	3	良	内外面黒斑あり
52	B20 SR04	壺			(11.2)	頸:ナデ、体:直線文・竹管文・波状文	頸:ナデ、体:ハケメ・ナデ			浅黄橙	黄灰	3	良	
53	B20 SR04	壺	(10.8)		(4.5)	櫛描文・竹管文・刺突列点文	ナデ・ハケメ	1		灰白	灰白	4	不良	
54	C15 SR05	壺			(4.8)	頸:ナデ、体:ハケメ・刺突列点文	頸:ナデ、体:指押さえ・ナデ			浅黄橙	浅黄橙	3	良	
55	A21 SR04	壺		7.0	(6.3)	体:ミガキ	ハケメ	11		灰白	灰白	3	不良	
56	D19 SR04	壺		4.0	(7.8)	ナデ	体:ケズリ	12		にぶい黄橙	灰黄	4	不良	外面底部被熱痕あり
57	D16 SR06	壺		(4.9)	(7.5)	ナデ・指押さえ・ハケメ	ナデ・ハケメ	9		灰黄	灰白	3	良	外面底部被熱痕あり
58	B20 SR04	壺		6.0	(9.3)	ハケメか	ケズリ	12		にぶい黄橙	オリブ黒	3	良	外面摩滅
59	C18 18列㊦	壺	(18.4)		(15.1)	口:ハケメのちナデ、体:ハケメのちナデ	口:ハケメのちナデ、体:ケズリ	2		にぶい橙	にぶい橙	3	良	
60	E20 SR06	壺	(12.8)		(12.5)	口:ナデ、頸:ハケのちナデ、体:ナデ	口:ナデ、体:ケズリ	6		灰白	にぶい黄橙	3	良	外面体部黒斑
61	B21 SR04	壺	(15.6)		(8.6)		体:指ナデ	2		灰白	灰白	3	良	内外面摩滅
62	B0 SR02	壺	(14.8)		(7.0)	口～頸:ナデ、体:ハケメ	口～頸:ナデ、体:ハケメ	1		灰白	灰白	3	良	
63	C22 SP442	壺	(17.2)		(8.4)	頸:指押さえ	体:指押さえ	3		浅黄橙	灰白	4	良	内外面摩滅
64	C20 SR04	壺	13.6		(5.5)		ナデ	3		灰白	灰白	3	良	
65	C19 SR04	壺	(12.2)		(6.9)			4		浅黄橙	浅黄橙	3	良	内外面摩滅
66	D19 D列㊦	壺	(14.0)		(5.9)			8		灰白	灰白	3	良	内外面摩滅
67	B21 SR04	壺	(13.0)		(5.0)	ナデか	ナデ	4		灰白	灰白	3	良	外面摩滅
68	C20 SR04	壺	(14.6)		(5.9)	口:ナデ		3		にぶい橙	にぶい橙	3	良	内外面摩滅
69	B21 SR04	壺	13.3		(5.4)	ナデ・ハケメ	ナデ	11		にぶい黄橙	にぶい橙	1	良	
70	C20 SR04	壺	(12.6)		(7.7)	ハケメか		2		にぶい橙	にぶい橙	4	良	口縁端部欠損
71	E19 SR06	壺	16.2		(9.4)			9		浅黄橙	浅黄橙	3	良	内外面摩滅
72	C0 SR02	壺	15.5		(6.9)	ナデ	ナデ・ハケメ	10		浅黄橙	浅黄橙	2	良	
73	B21 SR04	壺	(13.3)		(6.2)		頸:指ナデ	2		灰白	灰白	3	良	内外面摩滅
74	B21 SR04	壺	(13.2)		(6.6)	ハケメのちミガキ	ナデ	8		にぶい黄橙	浅黄橙	4	良	
75	C18 SR04	壺	(12.4)		(16.0)	体:ミガキか	口:ナデ、頸:指押さえ・ナデ、体:ナデ	10		灰白	灰白	4	良	外面体部スス付着
76	D19 SR04	壺	(13.6)		(21.5)		体:ケズリか	1		浅黄橙	灰黄	3	良	内外面摩滅
77	C17 SR06	壺	(14.2)		(11.9)	口:ナデ、体:ハケメ	口:ハケメ、体:ナデ	1		浅黄橙	浅黄橙	4	良	内外面摩滅
78	C18 18列㊦	壺		6.7	(6.5)	ハケメ・ケズリ	ケズリ・ケズリのちハケメ	10		にぶい黄橙	にぶい橙	4	良	
79	E20 SR06	壺	(10.8)	2.6	12.3		ナデか	2	12	灰黄	灰黄	4	良	内外面摩滅、外面黒斑
80	D19 D列㊦	壺	11.4	2.7	11.9	口～体:ミガキ	口:ミガキ、体:ケズリ・ナデか	7	10	灰黄	浅黄	3	良	内外面摩滅
81	B20 SR04	壺			(5.2)	体:直線文・波状文	体:ケズリ			浅黄橙	浅黄橙	4	良	
82	D20 SR04	壺			(5.3)	頸:ナデ、体:刺突文	頸:ナデ、体:ハケメ・ケズリ			にぶい黄橙	にぶい黄橙	4	良	
83	B20 SR04	壺			(6.6)	体:刺突列点文				浅黄橙	淡黄	4	良	
84	B0 SR02	壺		5.7	(5.9)	体:ナデ・ハケメ	体:ハケメ、底:ハケメ	11		褐灰	浅黄橙	2	良	
85	C20 20列㊦	壺		4.2	(9.4)	ハケメか	ハケメ	8		浅黄	灰黄	1	良	外面体部黒斑
86	C18 SR04	壺		4.2	(9.0)	体:ケズリ(下方)	体:ハケメ、底:ナデ	12		にぶい黄橙	灰黄	3	良	外面摩滅
87	C1 SR02	壺		(10.0)	(6.4)	ナデ	ハケメ	3		にぶい橙	明褐灰	2	良	脚台付
88	C20 SR04	壺		4.1	(11.4)	ミガキ	ナデか	12		灰黄	浅黄	4	良	外面底部スス付着
89	B26 包含層	壺		4.6	(5.9)	ハケメ	ハケメ	8		にぶい黄橙	灰黄褐	1	良	内外面黒斑
90	B20 SR04	壺		6.6	(10.1)	体:ナデ・ケズリ	体:ハケメ	11		灰白	黄灰	3	不良	外面底部黒斑
91	C20 20列㊦	高坏	(31.6)		(4.6)			2		浅黄橙	灰白	1	良	内外面摩滅
92	C20 SR04	高坏	(29.2)		(5.7)			9		浅黄橙	浅黄橙	3	良	内外面摩滅

第1節 小矢戸地区の遺物

93	E14 SK06	高坏	(27.3)		(7.5)	ハケのちナデ	ハケのちナデ	1		にぶい黄橙	にぶい黄橙	1	良	
94	E26 SD38	高坏	(25.2)		6.6			2		橙	にぶい黄橙	4	良	内外面摩滅
95	C20 SR04	高坏	(24.2)		(6.9)	口:ナデ	口:ナデ、体:ミガキ	1		灰白	灰白	1	良	外面摩滅
96	D19 SR04	高坏	(20.2)		(5.1)		口:ナデ、体:ミガキ	3		浅黄橙	灰黄	1	良	97と同一個体か
97	C20 SR04	高坏	(22.6)		(5.4)			1		浅黄橙	にぶい黄橙	1	不良	96と同一個体か、内外面摩滅
98	B15 SR05	高坏	(22.7)		(4.4)	ナデ	口:ヘラケズリのちナデ、体:ナデ	2		にぶい橙	にぶい橙	1	良	
99	B1 SR02	壺	(17.4)		(2.9)	口:擬凹線(4)・棒状浮文、頸:ナデ	口:刺突列点文、頸:ナデ	1		浅黄橙	橙	3	良	
100	C20 SR04	器台	(16.3)		(7.5)	ナデ	ナデ	10		灰白	灰白	4	不良	
101	B0 SR02	壺	(21.0)		(2.2)	口:ナデ・棒状浮文	口:ナデ・刺突列点文	1		灰白	灰白	2	良	
102	C20 SR04	器台	(23.8)		(7.4)	口:擬凹線(4)、体:ナデ	ナデ	10		明赤褐	明赤褐	1	不良	
103	D20 SR04	器台	20.2		(6.3)	口:擬凹線(6)	口:ナデ、体:ミガキ	2		灰白	灰白	1	良	内外面口縁部にスス付着
104	C20 SR04	器台	(20.4)		(3.9)			1		灰白	灰白	4	良	内外面摩滅
105	B20 SR04	器台	20.0		(7.4)	口:円形竹管文	口:ナデ	12		浅黄橙	浅黄橙	3	良	
106	B20 SR04	器台	(20.0)		(1.7)	凹線・ナデか	櫛描波状文	5		浅黄橙	灰白	3	不良	
107	E14 SK06	高坏	(22.0)	(20.4)	(7.5)	ナデ	ナデ・押さえのちナデ	4		にぶい橙	にぶい橙	2	良	
108	B20 SR04	高坏			(12.5)	ミガキ	坏部:ナデ、脚部:ナデ・ハケメ・ハケのちナデ			にぶい黄橙	にぶい黄橙	1	良	円孔4方向
109	D16 SR06	高坏			(15.4)	ナデのちミガキ	ナデ・ハケメ・絞り痕			橙	橙	1	良	
110	E20 E列㊦	高坏	(17.0)		(5.4)	ナデ・ミガキか		6		にぶい黄橙	にぶい黄橙	3	良	内外面摩滅
111	C18 SR04	高坏		9.8	(11.2)	坏部:ハケメ、脚部:ミガキ・ハケメ・刻み目・ナデ	ハケメか	10		にぶい黄橙	橙	3	良	
112	C15 SR05	器台			(9.6)					浅黄橙	明褐灰	2	良	円孔4方向、内外面摩滅
113	C20 SR04	器台		(15.3)	(11.5)	ミガキか	ヘラナデ・ナデ・ケズリのちナデ	7		灰白	灰白	1	良	円孔3方向、外面底部黒斑
114	C20 SR04	高坏		13.9	(10.0)	ミガキか	絞り痕・ケズリ・ハケメ	11		灰白	灰黄	4	良	円孔4方向、外面底部黒斑
115	E19 SR06	高坏		(10.4)	(13.6)			2		にぶい黄橙	にぶい黄橙	3	良	内外面摩滅
116	C15 SR05	高坏			(6.5)	ミガキ	ナデ			灰白	灰白	1	良	外面赤彩
117	C20 SR04	高坏		13.0	(10.5)		ナデか	12		浅黄橙	浅黄橙	1	良	円孔3方向、内外面摩滅
118	C20 20列㊦	高坏		(14.8)	(16.3)	ミガキか	ハケメ・絞り痕	2		浅黄橙	にぶい黄橙	1	良	円孔4方向(脚部下方)、外面摩滅
119	C15 SR05	器台		(12.6)	(13.8)	坏部体~底:ナデ	坏部体:ナデ、脚部:ナデ	2		浅黄橙	浅黄橙	3	良	円孔3方向
120	D20 SR04	高坏		(17.6)	(9.7)	ミガキか	絞り痕	2		灰白	浅黄橙	1	良	円孔4方向(脚部下方)、内外面摩滅
121	D20 SR04	高坏		(12.6)	(10.2)		絞り痕、円孔付近:ナデ	2		灰白	にぶい黄橙	1	良	円孔3方向(脚部下方)、内外面摩滅
122	B20 SP933	高坏		(16.0)	(11.0)		坏部:ナデ、脚部:ナデ・絞り痕	4		にぶい黄橙	にぶい橙	3	良	円孔3方向、外面摩滅
123	C20 C列㊦	器台			(9.5)	脚部:ミガキ	絞り痕			にぶい橙	橙	1	良	円孔4方向、内外面摩滅
124	E30 包含層	器台		17.6	(10.3)	ナデか	ナデか	3		浅黄橙	にぶい黄橙	3	良	円孔3方向(脚部下方)、外面摩滅
125	D15 SR05	高坏		(15.4)	(7.3)			2		にぶい橙	灰黄褐	3	良	円孔6方向、内外面摩滅
126	C15 SR05	器台		(17.2)	(5.7)	ナデ・擬凹線(2以上)	ナデ・ヘラケズリ	3		にぶい黄橙	浅黄橙	2	良	
127	D20 SR04	高坏		(16.8)	(16.1)	坏部:ナデ、脚部:ヘラナデか	ナデ	4		灰白	にぶい褐	4	良	円孔1方向(孔数不明)、脚内部粘土塊
128	C20 SR04	鉢	19.6		9.9	口:ナデ、体:ミガキ	口~頸:ナデ	5	12	赤褐	浅黄橙	3	良	内外面赤彩塗、体部に穴あり(祭祀用か)
129	D16 SR06	鉢	(17.4)		(8.0)			3		浅黄橙	浅黄橙	3	良	内外面摩滅
130	C22 SP442	鉢	(13.9)		(6.3)	口~頸:ナデ、体:ハケメ	口~頸:ナデ、体:ケズリ	2		灰白	灰白	3	不良	
131	E19 SR06	鉢	(13.4)		(11.3)	口:刺突列点文	ナデ	3		浅黄橙	浅黄橙	4	良	内外面摩滅
132	E20 20列㊦	鉢	(16.5)		(7.2)	口:刺突列点文、頸:ナデ、体:櫛描直線文・櫛描波状文	口~体:ナデか	3		浅黄橙	淡黄	4	良	
133	C20 SR04	鉢	(18.0)		(4.3)	口:ナデ、体:ハケメ		2		にぶい黄橙	にぶい黄橙	3	良	内面摩滅
134	B15 SR05	鉢	(10.6)		(8.7)	口~体:ナデ	口:ヘラナデ、頸:ナデ、体:ハケメ	4		浅黄橙	褐灰	3	良	
135	B21 SR04	台付鉢	14.4	8.0	12.0	高台部:指ナデか		5	8	浅黄橙	灰黄	4	良	内外面摩滅
136	E17 SD14	有孔鉢	(14.0)	3.0	12.0	体:ケズリ	ハケメ	3	12	灰白	灰黄	3	良	外面摩滅
137	D19 D列㊦	有孔鉢			(7.1)	口~頸:ナデ、体:カキメ	口~頸:ナデ、体:カキメ	12		にぶい黄橙	にぶい黄橙	3	良	
138	B21 SR04	有孔鉢		2.0	(7.2)	ハケメ	ハケメ	9		灰白	にぶい黄橙	1	良	外面摩滅
139	F20 20列㊦	有孔鉢			(7.0)	体:ハケメ・ケズリ	体:ハケメ、底:指押さえ	12		灰白	浅黄橙	4	良	

第5章 遺物

140	C18 SR04	蓋	(14.4)		6.4	天:ナデ、体:ミガキ	天~ロ:ナデ	1		にぶい橙	にぶい橙	3	良	
141	B20 SR04	鉢		3.0	(10.3)				12	にぶい橙	にぶい橙	3	良	内外面摩滅
142	C16 SR04	鉢		(12.6)	(4.9)	ナデ	ナデ		2	橙	橙	4	良	高台のみ
143	D20 SR04	鉢	(9.4)	4.0	6.4	ロ:つまみナデ	ナデか	1	12	にぶい黄橙	にぶい黄橙	4	良	内外面摩滅
144	B15 SR05	鉢	4.6	3.0	3.2	指ナデ	ロ:指頭圧痕・指ナデ、体:指ナデ	9	12	明赤褐	明赤褐	1	良	
145	B1 SR02	甕	(15.2)		(8.6)	ロ:ナデ・指押さえ	ロ:ナデ、体:ナデ・指押さえ・ケズリ	3		にぶい橙	浅黄橙	4	良	全体にスス附着
146	B13 SR04	甕	16.7		(14.7)	ロ:ナデ、頭~体:ハケメ	ロ:ハケメ、頭~体:ハケメ・指押さえ	11		褐灰	褐灰	2	良	外面体部スス附着
147	B20 SR04	甕	24.0		(6.9)	ナデ	ナデ	1		にぶい黄橙	灰黄	4	良	
148	C20 SR04	甕	20.0		(8.0)		体:ケズリ	1		灰白	灰白	4	良	内外面摩滅
149	B20 SP933	甕	17.5		(16.6)			8		灰白	灰白	3	良	内外面摩滅
150	B13 SR04	甕	(18.2)		(9.8)	ロ:ナデ、体:ハケメ	ロ~頭:ナデ、体:ハケメ			褐灰	灰黄	3	良	
151	E16 SR06	甕	(19.0)		(11.5)	ロ:ナデ、体:ハケメ	ロ:ナデ、体:ハケメ	1		淡黄	灰	4	良	外面体部スス附着
152	D19 SR04	甕	(16.6)		(6.3)	ロ:ナデ、体:ハケメ	ロ:ナデ、体:ケズリ・ナデ	3		浅黄橙	灰白	3	良	
153	D20 SR04	甕	(17.4)		(8.6)	ロ:ナデ、体:ハケメ	ロ:ナデ、体:ハケメ	5		灰白	浅黄橙	3	良	
154	B20 SR04	甕	(18.5)		(14.1)	頭~体:ハケメ	ロ~頭:ナデ、体:ハケメ	2		にぶい黄橙	にぶい黄橙	3	良	外面摩滅
155	E19 SR06	甕	15.0		(4.5)	ロ:ナデ、体:ハケメ	ロ:ナデ、体:ケズリ	11		灰白	灰白	3	良	
156	C20 SR04	甕	(14.6)		(4.9)	ロ~頭:ナデ、体:ハケメか	体:ナデ	3		にぶい黄橙	浅黄橙	3	良	
157	D15 SR06	甕	(14.8)		(4.3)	ロ:ナデ、体:ハケメ	ロ:ナデ	4		にぶい黄橙	にぶい黄橙	4	良	
158	B20 SR04	甕	15.1		(3.7)	ナデ	ナデ	10		にぶい橙	にぶい黄橙	1	良	
159	B21 SR04	甕	13.2		(3.7)	ナデ	ロ:ナデ、体:ケズリ	10		にぶい橙	にぶい橙	3	良	
160	C20 SR04	甕	(17.4)		(5.0)	ロ:ナデ、体:ナデのちハケメ	ロ:ナデ、体:ハケメ	2		浅黄橙	浅黄橙	3	良	外面スス附着
161	C15 SR05	甕	(17.0)		(3.9)	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	3		浅黄橙	浅黄橙	2	良	
162	F20 20列ト	甕	15.8		(5.2)	ロ:ナデ	ナデ	11		にぶい黄橙	灰白	3	良	
163	B20 土器溜り02	甕	(22.0)		(8.2)			4		にぶい黄橙	にぶい黄橙	4	良	内外面摩滅
164	D10 SR01	壺		5.2	(10.8)	ナデか	ナデか		10	橙	橙	3	良	
165	C20 SR04	鉢	(9.1)	(4.6)	7.4	ロ~頭:ハケメ	ロ:つまみナデ、体:指押さえ・ハケメ	2	3	にぶい褐	にぶい褐	1	良	
166	C16 SR04	器台	9.4	(12.2)	8.7	ロ:ナデ、頭:ミガキ、底:ハケメ	ロ:ナデ、頭~底:ハケメのちナデ	11	4	淡橙	淡橙	1	良	円孔3方向
167	B15 SR05	高坏			(10.2)	体:ハケメのちナデ、脚:ナデ	体:ハケメの地ナデ、脚:ナデ			灰白	橙	3	良	円孔あり
168	B1 SR02	高坏			(8.3)	ナデ	ナデ			にぶい橙	淡橙	2	良	
169	B21 SR04	器台		9.1	(9.7)	ナデ	坏部:ナデ、脚部:絞り痕・ナデ	1		灰白	灰白	1	良	
170	A1 SR02	高坏	16.5	10.9	11.1			7	9	橙	橙	3	良	
171	B0 SR02	高坏		10.0	(8.0)	ナデ	ナデ		4	にぶい橙	にぶい橙	2	良	
172	C26 SD38	高坏			(7.5)		脚部:絞り痕			浅黄橙	浅黄橙	1	良	円孔4方向、内外面摩滅
173	C15 SR05	高坏			(6.9)	ナデ	ナデ・絞り痕			灰白	灰白	2	良	円孔4方向
174	B27 表土	高坏		14.3	(10.4)		ナデ・絞り痕		1	明黄褐	にぶい黄橙	1	良	円孔3方向、内外面摩滅
175	E19 SR06	高坏		(12.8)	(14.7)			4		浅黄橙	浅黄橙	3	良	内外面摩滅
176	C1 SR02	甕	(24.6)		(9.8)	ナデ	ナデ	2		浅黄橙	浅黄橙	1	良	
177	D27 SD38	甕	(21.4)		(8.3)	ナデか	ナデか	2		にぶい黄橙	にぶい黄橙	4	良	内外面摩滅顕著
178	E16 包含層	甕	(21.2)		(6.5)	ロ~頭:ナデ、体:カキメ	ロ~頭:ナデ、体:カキメ	2		にぶい黄橙	灰白	3	良	
179	E11 SK05	甕	(13.0)		(6.8)	ロ:ナデ、体:ハケメ	ナデ	2		にぶい橙	にぶい橙	4	良	
180	E11 SK05	甕	(15.0)		(7.0)	ロ:ナデ、体:ハケメ	ロ:ナデ・ケズリ	4		にぶい黄橙	灰黄褐	3	良	内面口縁部スス附着
181	E11 SK05	甕	(11.3)		(4.1)	ロ~頭:ナデ	ロ~頭:ナデ、体:ケズリ	3		にぶい橙	浅黄	3	良	外面摩滅
182	D14 SP259	甕			(8.5)	ナデ	ナデ	1		橙	にぶい橙	3	良	
183	E0 包含層	甕	(12.0)		(5.4)	ロ:ナデ、体:カキメ	ロ:ナデ、体:ケズリのちナデ	3		にぶい黄橙	にぶい褐	4	良	
184	A25 SK33	鉢	(21.0)		(10.2)	ロ~体:ナデか	ロ~体:ナデ	2		にぶい黄橙	にぶい黄橙	3	良	
185	C20 包含層	鉢	22.4		(10.3)	ロ~体:ナデか	ロ~体:ナデ	11		浅黄橙	浅黄橙	3	良	外面摩滅
186	D20 SR04	瓶	(28.8)		(21.8)	ハケメ、把手:ナデ	ロ:ハケメ、体:ハケメ・指押さえ	2		にぶい橙	にぶい橙	3	良	把手付

第1節 小矢戸地区の遺物

187	B15 表土	坏	(13.0)	(9.8)	4.2	ナデ	ナデ	4	3	にぶい橙	にぶい橙	1	良	内外面赤彩
188	E11 SK05	坏	(16.6)	(9.0)	4.5	口～体:回転ナデか、底:ナデか	口～体:回転ナデ、底:ナデ	4		浅黄橙	にぶい橙	3	良	摩滅顕著
189	C13 側溝	皿	(19.8)		(2.8)	口:ナデ、体:ナデ・ハケメ	口～体:ナデ	2	3	浅黄橙	浅黄橙	1	良	赤彩
190	C1 SR02	皿	(15.4)	(11.8)	3.1	口～体:ナデ	口～体:ナデ	5	5	橙	橙	1	良	赤彩
191	C13 包含層	皿	(14.8)	(9.4)	2.4	口:回転ナデ	口:回転ナデ、体～底:ナデ	2		浅黄橙	浅黄橙	3	良	風化顕著、ロクロ使用か
192	C11 11列㊦	塊		5.0	(1.7)	体:回転ナデ、底:糸切り	体～底:回転ナデ		11	浅黄橙	浅黄橙	1	良	
193	D10 SR01	塊		5.9	(1.4)	底:回転糸切り	体～底:回転ナデ		12	浅黄橙	浅黄橙	1	良	
194	D10 SR01	塊		5.7	(2.3)	体:回転ナデ、底:回転糸切り	体～底:回転ナデ		10	灰白	灰白	1	良	
195	C11 SR01	塊		5.7	(2.7)	体:ナデ、底:糸切り	体～底:回転ナデ		5	灰黄	灰黄	1	良	
196	B12 SR01	塊		5.0	(2.6)	体:回転ナデ、底:糸切りのちナデ	体～底:回転ナデ		9	灰白	灰黄	1	良	
197	C11 SR01	塊		5.0	(1.4)	体:回転ナデ、底:回転糸切り	体～底:回転ナデ		12	橙	橙	1	良	
198	C12 SR04	塊		7.0	(2.6)	体～底:ナデ			7	灰白	褐灰	4	良	内面剥離
199	E8 表土	塊		(7.0)	(2.1)	体～底:ナデ	体～底:ナデ		1	浅黄橙	黒褐	2	良	黒色土器
200	C12 12列㊦	塊		7.0	(3.0)	体:回転ナデ、底:糸切り・回転ナデ	体～底:回転ナデ		7	灰黄	灰黄	1	良	貼付高台
201	A・B13 SR01	塊		5.7	(2.1)	体:回転ナデ、底:糸切り	体～底:回転ナデ		8	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1	良	外面体部に被熱痕
202	C22 土器溜り03	塊	(10.4)	(6.7)	3.2	口～体:回転ナデ、底:ナデ	口～体:回転ナデ、底:ナデ	3	11	浅黄橙	橙	1	良	高台は回しナデ
203	C12 12列㊦	塊		(6.4)	(2.4)	体:回転ナデ、底:糸切り	体～底:回転ナデ		4	橙	橙	1	良	高台はケズリ出し
204	B11 SR01	把手			(5.3)	ハケメ	ハケメ			黄橙	黄橙	2	良	把手
205	C0 SR02	把手			(4.6)	ナデ	ナデ			浅黄橙	浅黄橙	3	良	
206	B0 SR02	把手			(6.8)	ハケメ・ヘラケズリか	ナデか			浅黄橙	灰白	2	良	
207	B17 表土	把手			(6.1)	ナデ	ナデ			灰白	灰白	2	良	
208	E11 SK05	把手			(4.5)	ハケメ	ハケメ			橙	にぶい橙	4	良	把手のみ
209	B14 表土	把手			(4.7)					橙	橙	2	良	把手
210	B20 SR04	深鉢	(21.4)		(17.7)	口～体:ナデ	口～体:ナデ	6		にぶい褐	黄褐	2	良	縄文土器
211	B20 SR04	深鉢		4.0	(1.9)				8	にぶい黄褐	黄褐	2	良	縄文土器
212	B1 SR02	浅鉢					口:ナデ			黒褐	黄褐	4	良	縄文土器
213	C1 SR02	浅鉢				口:ナデ	口:ナデ			にぶい橙	灰褐	4	不良	縄文土器
214	F20 20列㊦	深鉢								浅黄橙	にぶい橙	3	良	縄文土器
215	B1 1列㊦	浅鉢					口:ナデ			浅黄	灰黄	1	良	縄文土器
216	E16 包含層	破片								にぶい橙	浅黄橙	1	良	縄文土器
217	C18 SR04	深鉢								にぶい褐	にぶい褐	3	良	縄文土器
218	B21 SR04	甕	16.6		(14.0)	口:ナデ		12		にぶい黄橙	にぶい黄橙	3	良	
219	C15 SR05	甕	18.0		(6.5)	口～体:ナデ、刺突列点文	口～頸:ナデ	2		にぶい橙	にぶい橙	1	良	
220	D8 表土	人形	器長 (3.5)	器幅 3.4	2.3					灰黄	灰黄	1	良	上半欠
221	E19 SR06	土版	器長 7.5	器幅 5.3	2.2					灰黄	灰黄	4	良	右下欠
222	C11 SR01	土製品	器長 11.3	器幅 3.7	1.1					にぶい黄橙	にぶい黄橙	3	良	板状
223	SR04	土製品	器長 (4.6)	器幅 (3.8)	3.3					にぶい褐	にぶい褐	2	不良	
224	E4 E列㊦	土玉		器幅 1.0	0.6			12	12	黒	黒	1	良	
225	E13 SK10	土錘	器長 5.2	器幅 2.8						灰白	灰白	1	不良	
226	C27 包含層	土錘	器長 5.3	器幅 2.9						灰白	灰白	1	良	裏上半欠
227	E15 表土	土錘	器長 7.0	器幅 4.1						灰黄	灰黄	2	良	
228	C13 SR04	土錘	器長 4.0	器幅 1.4						にぶい黄橙	にぶい黄橙	1	良	
229	D4 表土	土錘	器長 4.9	器幅 2.0						灰白	灰白	1	良	上端一部欠
230	D15 包含層	土錘	器長 3.3	器幅 1.6						にぶい橙	にぶい橙	1	良	
231	B10 SR03	土錘	器長 (3.1)	器幅 1.8						橙	橙	1	良	裏半欠
232	D7 包含層	脚部	器長 (16.5)	器幅 3.3						橙	橙	1	良	羽釜

2 須恵器（第71～84図、図版第40～53）

須恵器の出土傾向

本遺跡出土の須恵器は、蓋・坏・皿等の食膳具がその大半を占める。本遺跡の中心時期である8世紀後半から9世紀に属する土器群において、土師器の食膳具は極めて少量である。これは本遺跡の時期的かつ性格的な特徴である。また、鉢・壺・甕等、定量の貯蔵具も存在するが、耳付瓶類の出土数は通常の長頸瓶の出土数と比較しても少量である。この他に、水瓶、鉄鉢や、瓦塔といった、一般集落とは異なる特殊品が少数出土していることも遺跡の性格を端的に示していると推定できる。

小矢戸地区と太田地区を比較して出土傾向を分析すると、小矢戸地区においてはSR 02以外では7世紀に属する須恵器がほとんど出土しないが、太田地区では各種遺構からも出土している。8世紀以降に属する須恵器では、小矢戸地区で8世紀から9世紀にかけての須恵器が途絶することなく出土するのに対し、太田地区では9世紀前半の須恵器が少ない傾向がある。

報告する個体数が多いため、法量など個々の詳細については観察表を参照していただきたい。なお、施釉陶器についても須恵器とともに報告することとする。

表土・包含層出土の須恵器（第71～76図）

1～33（第71図）は蓋である。摘みの突起度が高い1～6は8世紀中頃までの製品と考えられ、中でも1は7世紀後半代に属する可能性がある。4の天井部内面には○の記号墨書がある。蓋への墨書の割合は極めて少なく、本品を含めて4点しか確認できていない。

7～16は摘みの擬宝珠形が崩れた形態で口縁端部の成形も鋭さを欠く。いずれも8世紀後半から9世紀の製品である。17～19は扁平形摘みの個体であるが、本遺跡では擬宝珠形に比べると出土量が少ない。永平寺窯群ではこうした扁平摘みの個体を8世紀後半以降集中して生産する窯が存在するが、本遺跡では少数確認できているにとどまる。しかしながら、単一窯からの製品供給ではなく、複数の窯群から供給された可能性を示している。また、17・18は丁寧な回転ナゲ調整で粗製された様子はなく、時期も8世紀前半に属する可能性がある。

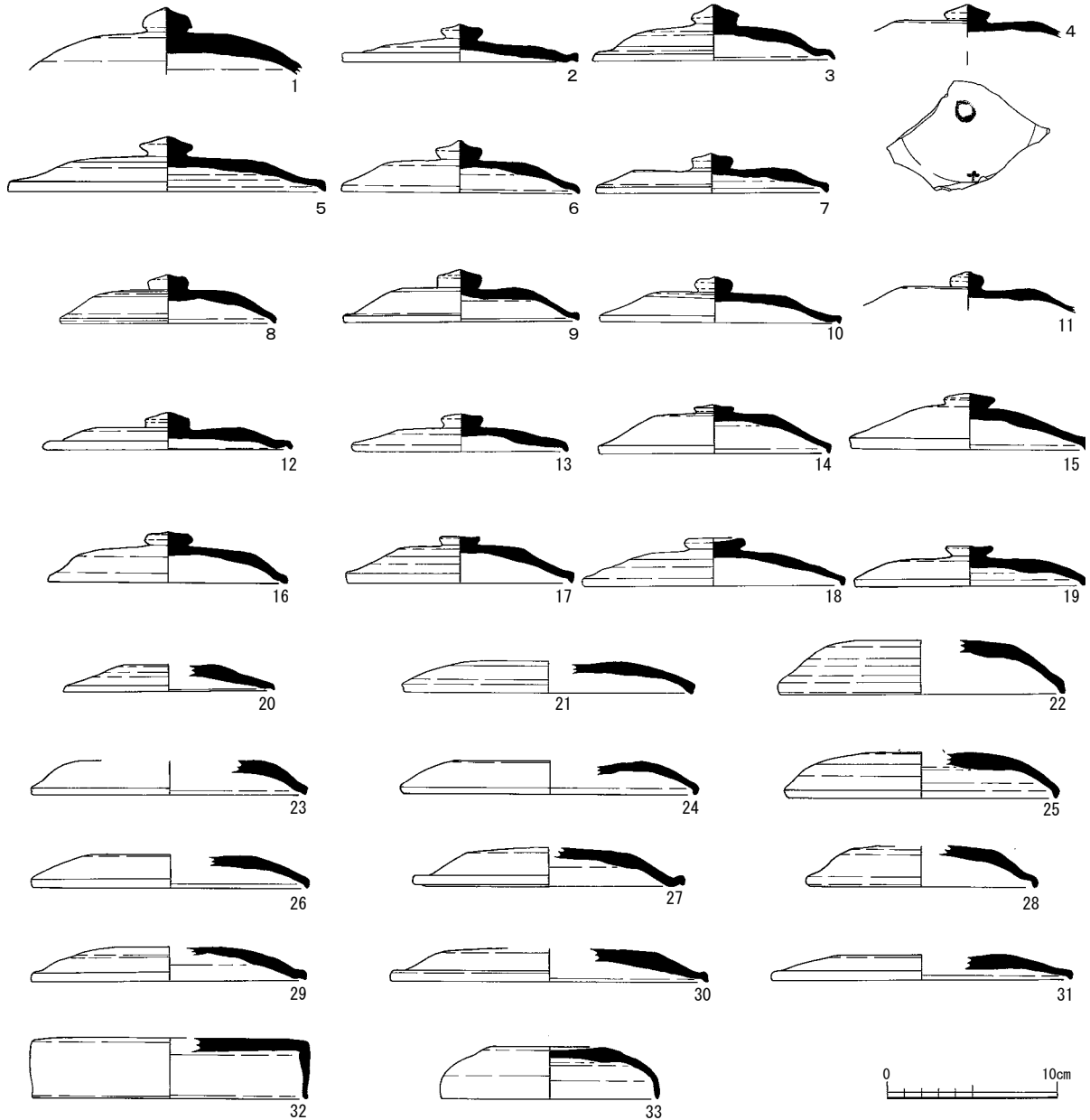
20～31は摘みが破損した個体を集成して提示している。扁平形、平笠形、山笠形がまんべんなく出土しており、法量や形態による時期差は区別し得ない。32は壺蓋である。中央部を欠損しているため、摘みの有無は不明である。33は7世紀前半に属する。

破片も含めた観察の結果、坏蓋においては無紐化した製品を確認することはできなかった。越前の主要窯群では無紐化した製品が存在するが、供給元の窯群では無紐化が達成されていないのか、あるいはその時期の製品が存在しないのか不明である。

34～79（第72図）は無台坏である。器高が高く、口縁部の直立度が高い34～45は8世紀中頃までの製品と考えられる。

46～67は前述の一群と比較して器高が低く、口縁部もかなり傾斜している製品である。8世紀後半から9世紀に属する。62のように少数ではあるが一定量口縁部が外反する製品も存在する。68・69は一見すると8世紀中頃までの製品と形態は共通しているが、調整が粗雑で同一に含められない。古相を示すものの、8世紀後半の製品ではないかと推定できる。70は口縁部が内湾し、非常に直立度が高い。胎土や調整からは8世紀後半の製品と同一と推定できる。71は7世紀前半の坏Gである。成形も粗雑で器壁も分厚い。

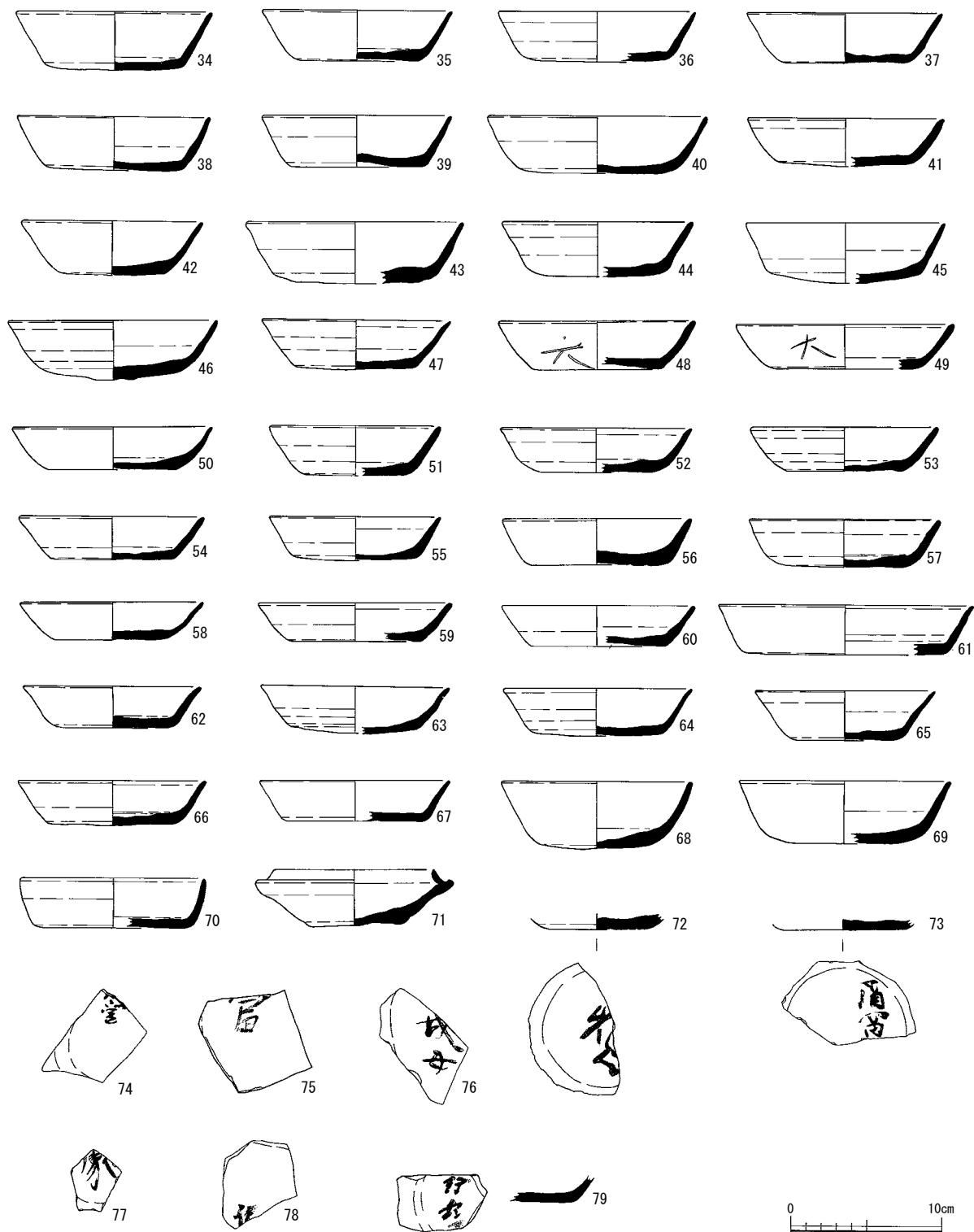
72～79は坏Aの墨書を集成している。72は物構えと考えられるが不明である。73は「酒富」である。



第71図 須恵器 (1) (縮尺1/4)

74は「□室」、75は酒富の「富」である。76は「成女」である。77は「家」と推定できる。78は「伊」、79は「伊□□」で、人名と推定できるが、3文字確認できるものの判然としない。酒富といった吉祥句、室・家といった施設名、人名が記された墨書土器群は、識字層の存在を示すのみならず、祭事饗応の食事を配給する公的施設の存在を示すものであり、一般集落とは異なる墨書である。

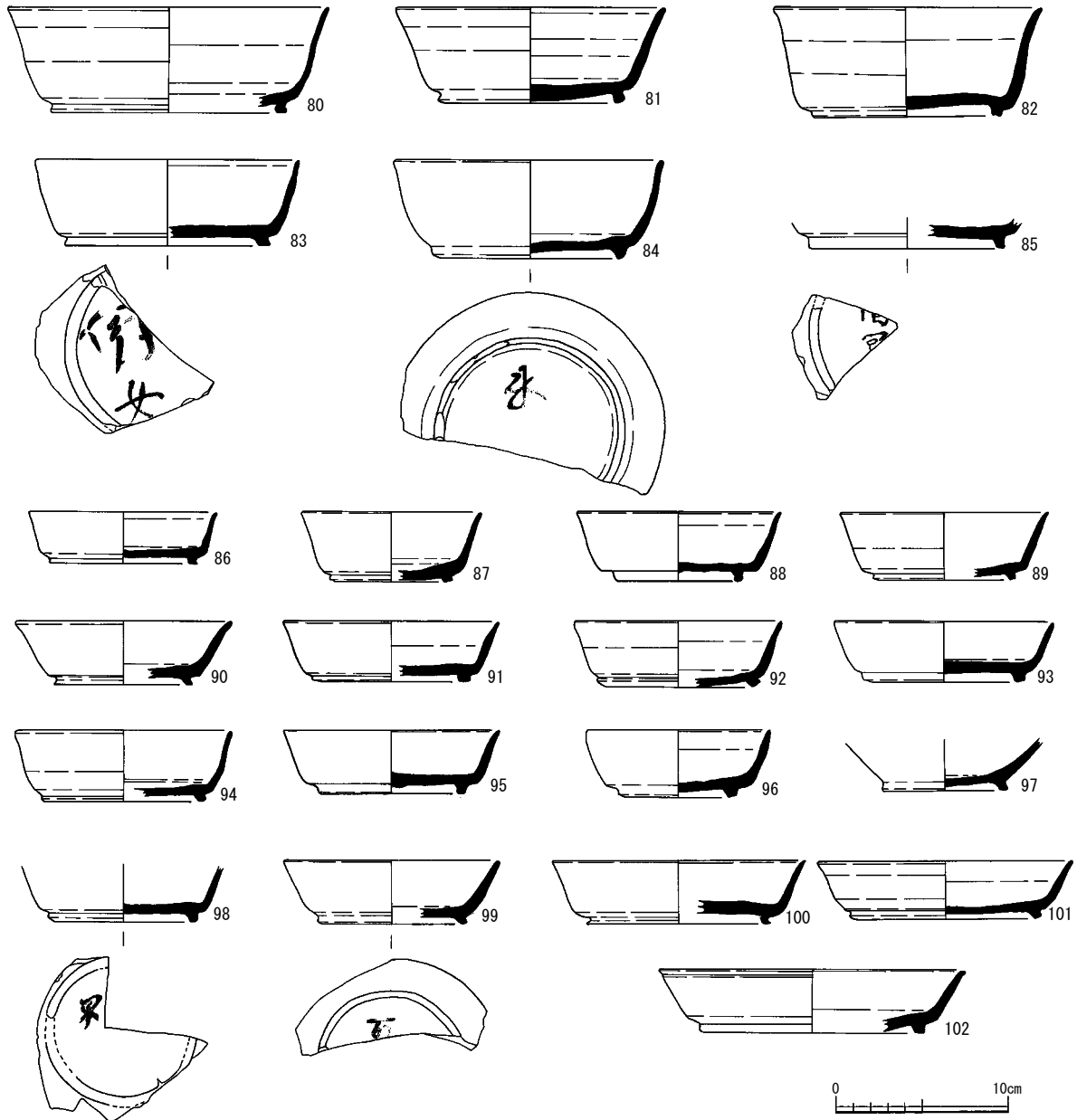
80～102 (第73図) は有台坏、有台盤である。80～85は坏Bの大型品で小型品と比較すると出土量が少ない。80は器壁が薄く成形され、高台も踏ん張る形で8世紀中頃までの製品である。81～83は8世紀後半から9世紀前半に属し、83の底面には、「□女」の墨書がある。84は口縁部が内湾し、高台の作りも粗雑である。9世紀の製品と推定できる。84の底面には墨書があるか、記号の可能性はある。85の底面墨書は「酒富」である。86～99は坏B小型品で、97のみ碗Bである。86～90までの個体は8世紀中の製品と推定できるが、特に90は南加賀系窯群の影響品である可能性があり、時期も8世紀前半に属するのではないかと推定できる。



第72図 須恵器（2）（縮尺1/4）

91～96の製品は、高台の断面形も方形で、口縁部の立ち上がりも鋭さを欠く。8世紀後半から9世紀に属すると推定できる。97は碗であるが、8世紀後半以降越前では少数生産される。高台が低い形態から判断すると9世紀後半までくだらない製品と推定できる。98・99はともに底面に墨書があるが、文字は不明である。

100～102は有台盤である。100は口縁部の成形も鋭く、高台もよく踏ん張る。8世紀中頃までの製

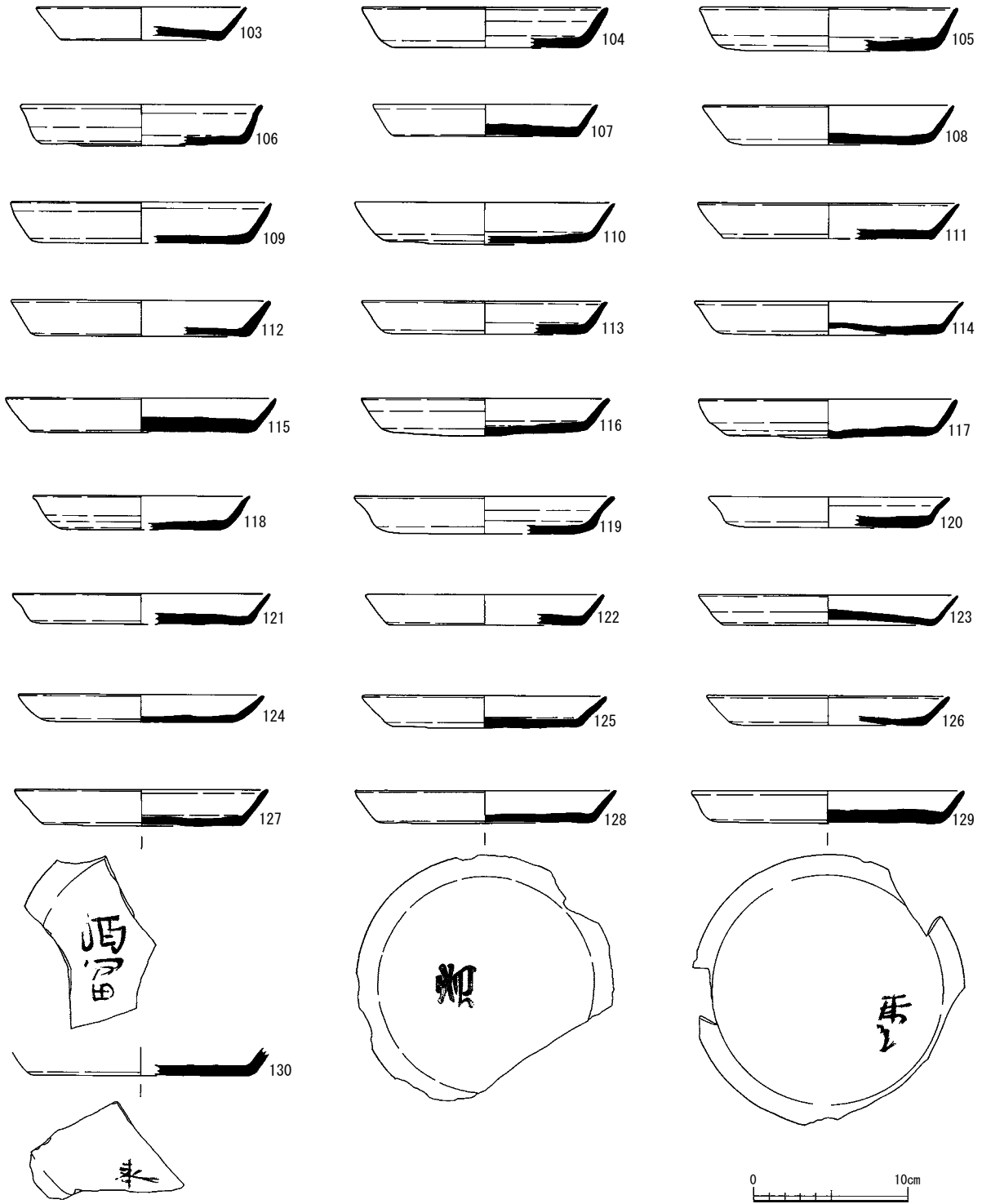


第73図 須恵器 (3) (縮尺1/4)

品と推定できる。101・102は高台の断面形が方形で8世紀後半以降に属する。本遺跡においては、有台盤の出土量は極めて少ない。

103～130(第74図)は皿である。103～119、127～130は器高が高く、口縁部の立ち上がりも鋭く、8世紀中の製品と推定できる。中でも105・106はより古い様相を呈しており、8世紀前半までの製品である可能性が高い。

120～126は、器高が低く、口縁部の立ち上がりが緩やかな形態で主に9世紀の製品と推定できる。少数ではあるが、119・120に見られるような口縁部が強く外反する個体を確認できる。こうした特徴は越前の基幹窯の製品ではあまり見られない特徴である。県内では、永平寺窯群、野向窯群において主に確認できる形態であり、注意を要する。127～130は墨書土器である。127は「酒富」である。128～130は文字ではあるが特定できず、不明である。

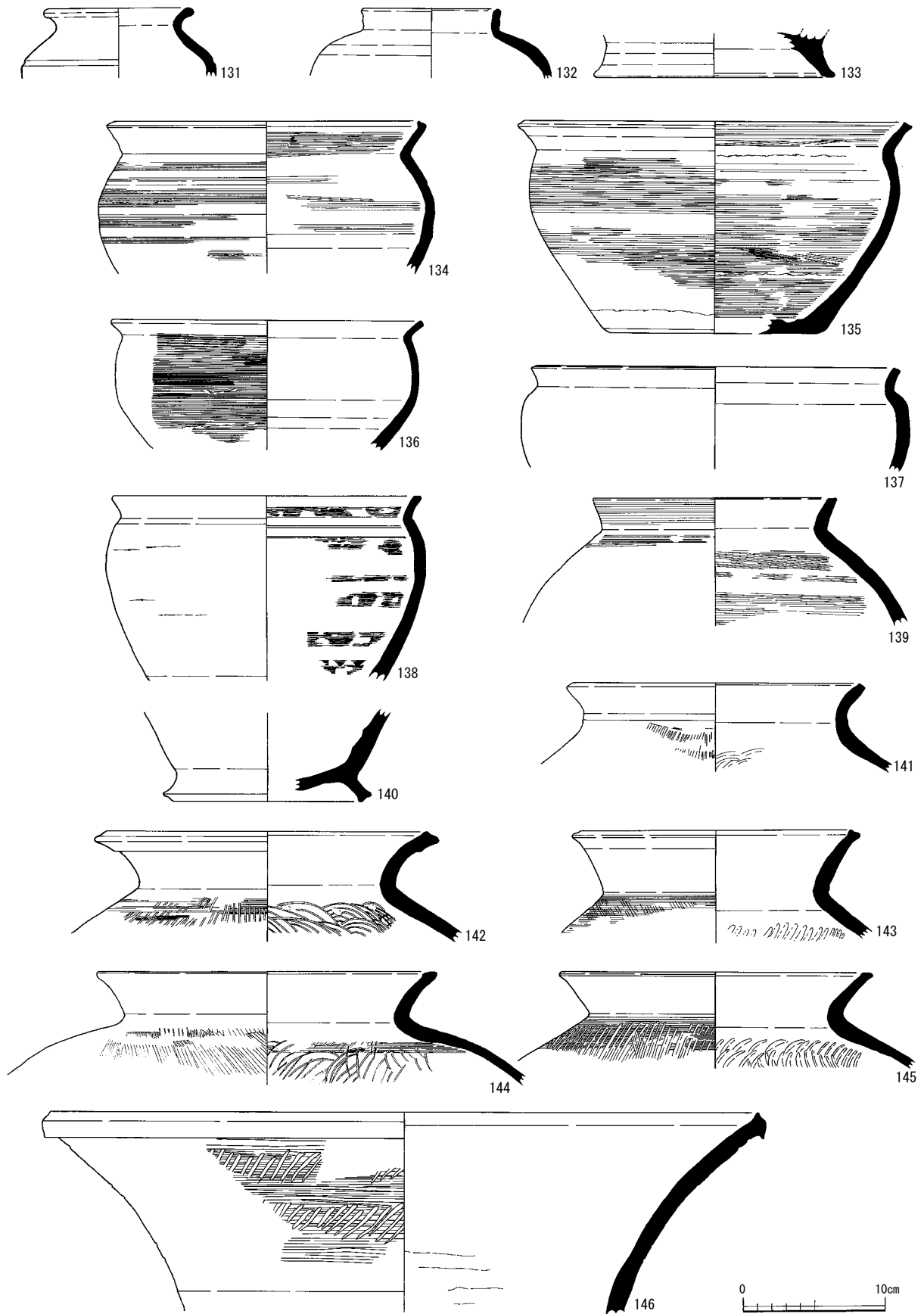


第74図 須恵器（4）（縮尺1/4）

131～146（第75図）は、壺・甕など調理具・貯蔵具である。131は小型の広口壺、132は小型の短頸壺である。133は大型短頸壺の高台である。

134～138、140は鉢で、カキ目調整を内外面施すものが多い。135のような平底のもの主流であるが、140のような台付きも少数確認できる。139・141は直口壺である。調整がまったく異なっており、139は台付の可能性はある。

142～146は甕である。143はやや長胴の壺になる可能性があるが、ここに含めておく。大型品以外の



第75図 須恵器 (5) (縮尺1/4)

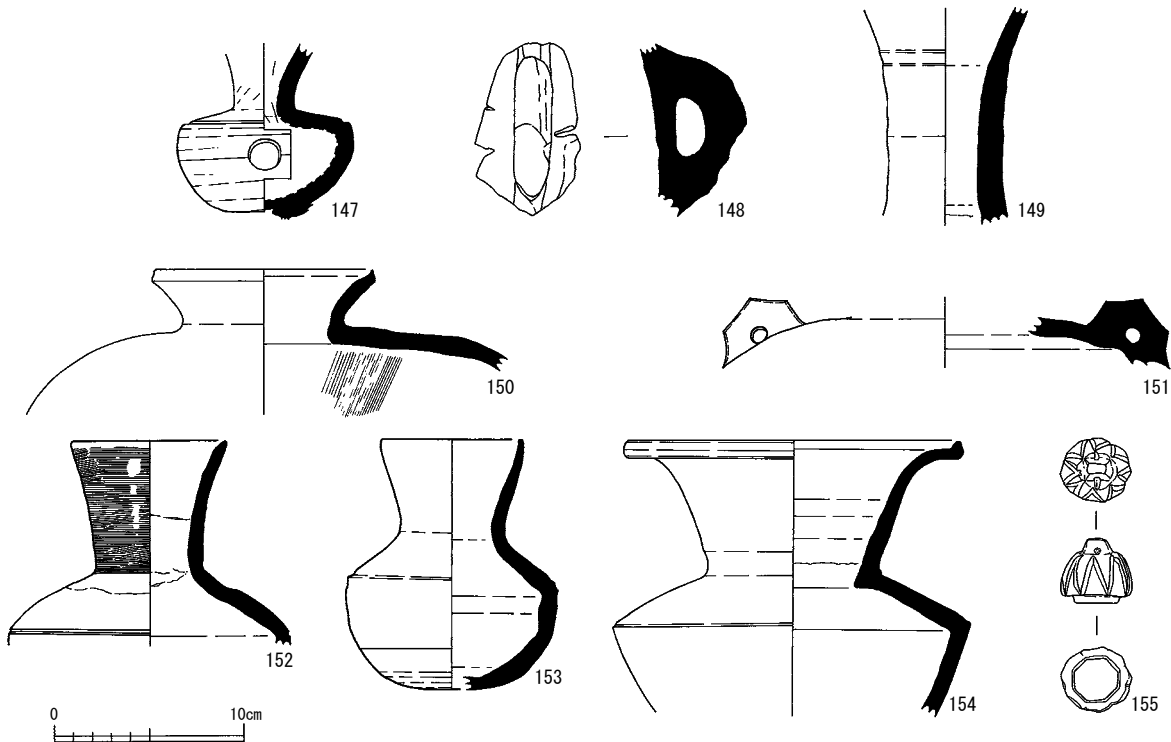
甕類は頸部から肩部にかけて叩き目の上からカキ目調整が施されており、口縁部は基本回転ナデ調整で無装飾である。146のような大型品には、ヘラ描き斜線文が口縁部に施されているなど明瞭に工人の特徴が窺われる。

147～155（第76図）は瓶、その他の製品を集めている。147は壺で7世紀に属する。148は双耳ではなく、全体に丸みを帯び取手状の形態をしている。甕または瓶であろうと推定できる。あまり類例がない。149は長頸瓶の頸部で、151のような双耳瓶の頸部と推定できる。150は横瓶で、複数存在が確認できる。8世紀に属する。152・153は小型の長頸壺である。丸底のもので7世紀に属する可能性が高い。154は広口瓶である。出土数は極めて少ない。8世紀に属する。

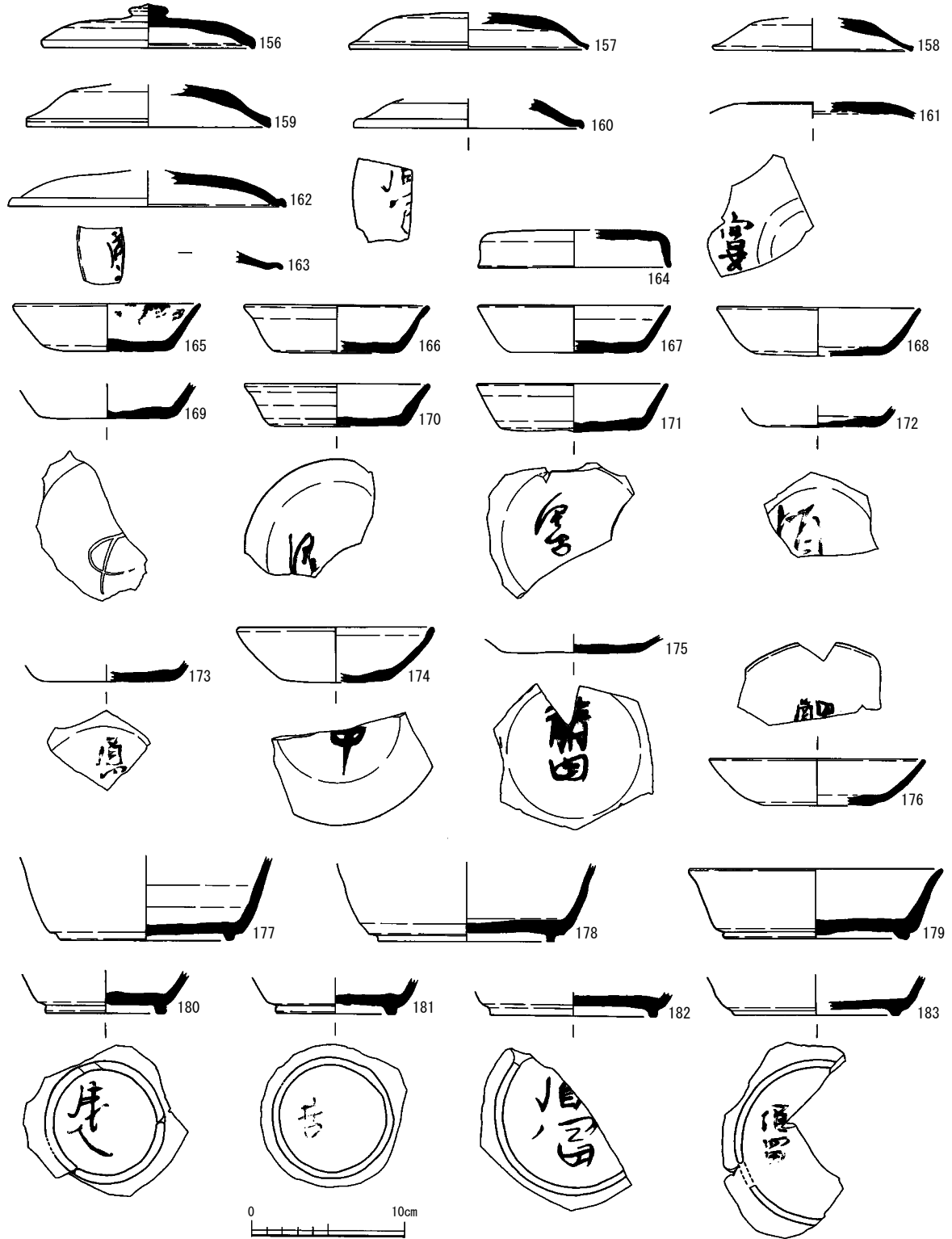
155は陶製権状錘である。銅製の錘を模倣した形態を呈しており、笠部は半球形で丸みがある。笠部には花卉状の装飾が線刻で施されているが、直線による放射線状の区画ではなく、連続の線刻で行われている。ただし、立体的に稜が作り出されていない。紐の側面形は台形で、方形を指向して丁寧に作られている。紐孔は丸みがある。底部は八角形に作り出されている。県内では王子保窯の出土品が知られているが、これらは銅製錘の模倣品とは考えがたい。銅製錘の模倣品としては、石川県額見町遺跡出土品や若緑マツタケヤマ窯採取品に類似している。権状錘が型式学的に変遷するとすれば、ちょうど両者の中間形と言えるため、時期もおおよそ8世紀中頃から後半と推定できる。ただし、様となる模倣された銅製錘の型式学的な変化であった場合は、この限りではない。

S R 01 出土の土器（第77・78図）

第77・78図はS R 01出土須恵器である。156～191までの蓋・坏A・坏B・碗・皿類の特徴からは、いずれも8世紀後半以降から9世紀にかけての製品群であることが窺われる。特に、184のような大平鉢形の碗や、185・186の低脚坏は、9世紀後半から末頃の製品であり、当遺構出土須恵器の下限を示している。



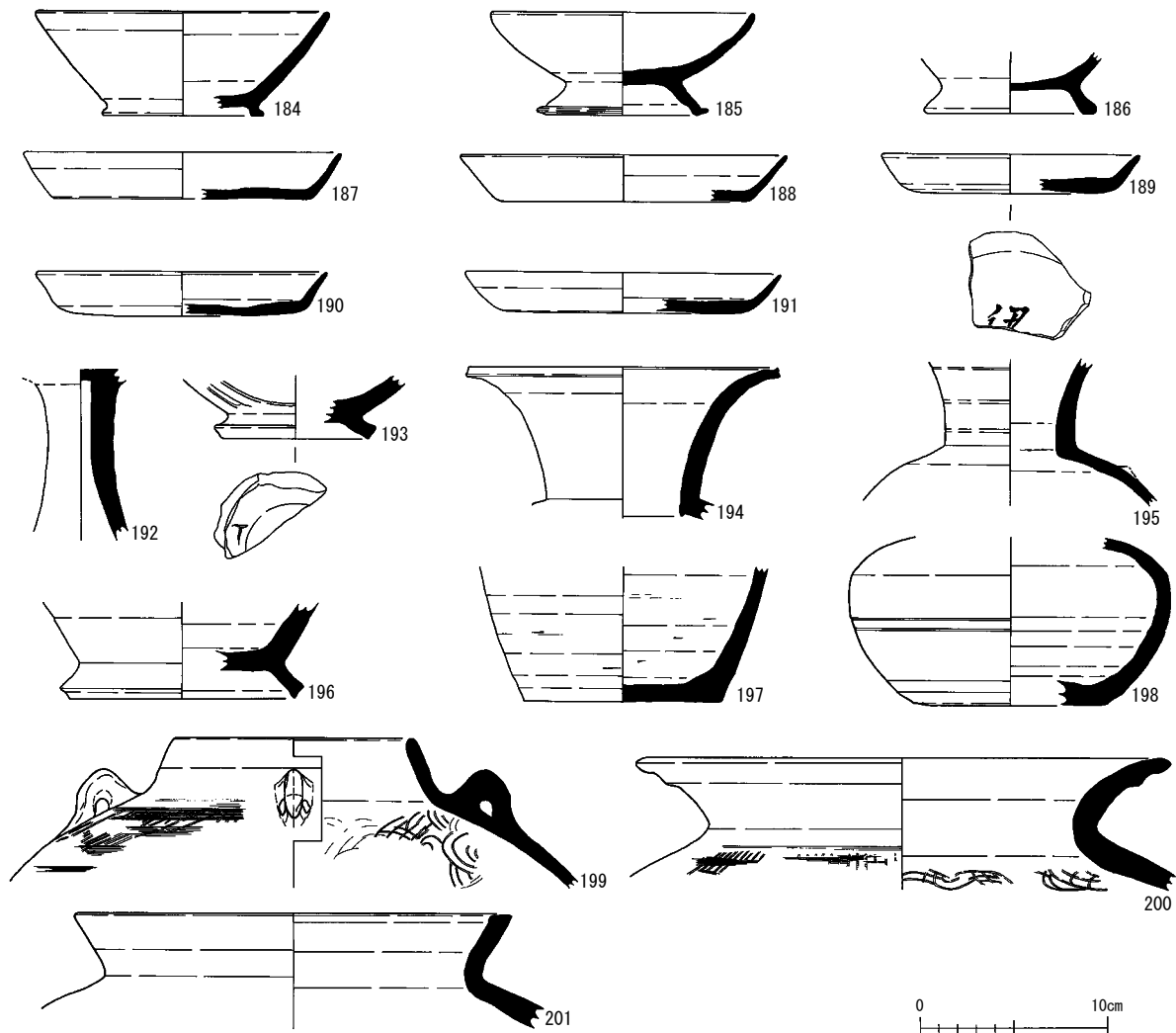
第76図 須恵器（6）（縮尺1/4）



第77図 須恵器（7）（縮尺1/4）

食膳具個別の詳細報告は省略し、以下、特記すべき内容を報告する。墨書では、ここまで報告分の墨書以外に、161に「宮女」の墨書がある。171は「伊呂」または「伊万呂」と推定できる。175は「口田」、180は「成人」、181は「井口」である。

165の坏口縁部内面には、墨痕がある。油煙墨痕の可能性も否定しきれない。169の坏底面には文字様のヘラ記号がある。

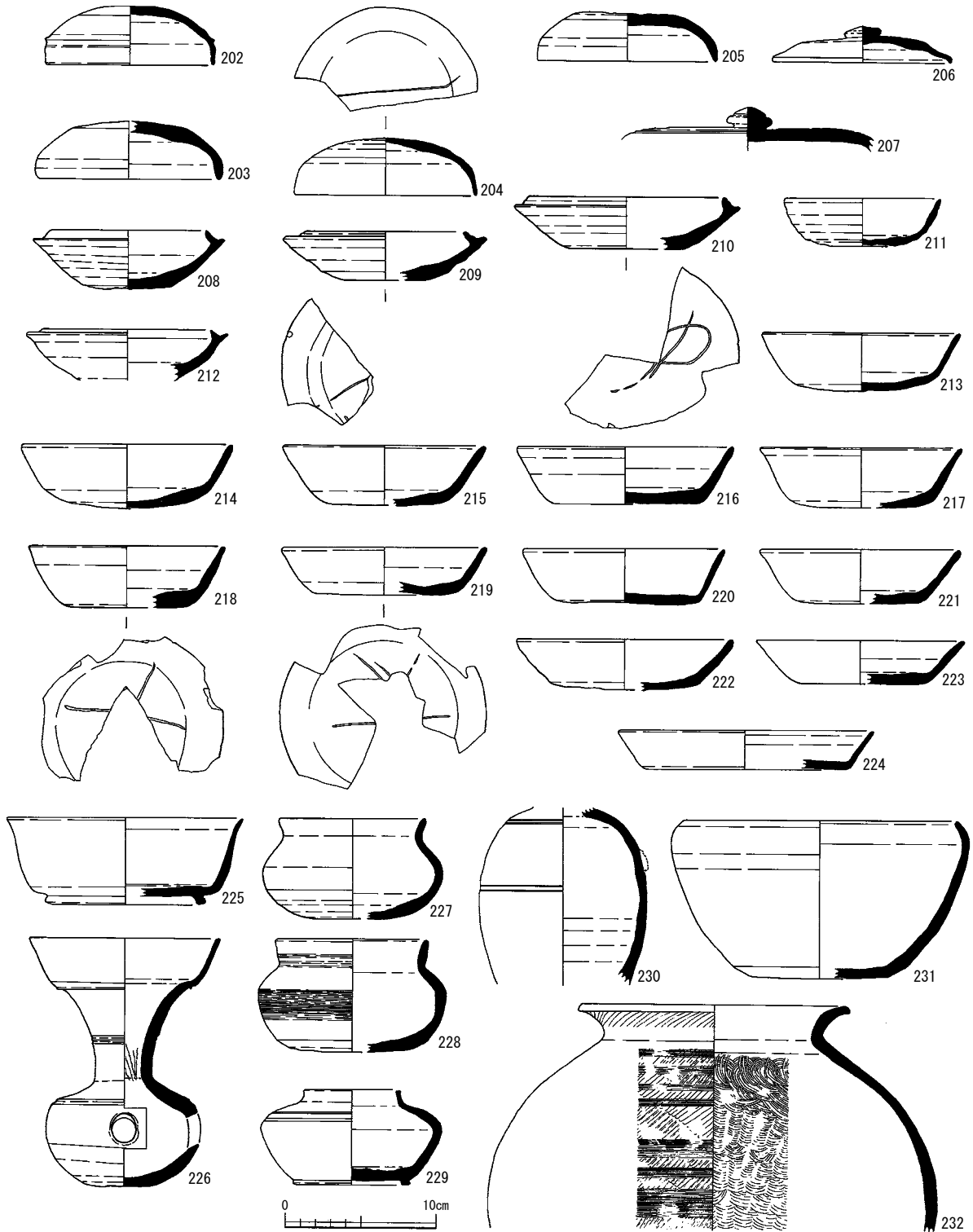


第78図 須恵器（8）（縮尺1/4）

その他の器種では、胴部が提瓶状形態を呈する高台付樽型瓶（193）がある。胴部の平坦面には円形に線刻がある。高台内面に「T」字状のヘラ記号がある。胎土や調整からは8～9世紀の須恵器と考えられるが、県内に類例がない。199は四耳壺である。釉薬は掛かっていないため、須恵器として判断しておく。口縁部は内傾する直口縁で、頸部以下の調整は甕類の調整と変わらない。横方向に孔が空く取手状の耳が肩部に貼り付けられている。同様の耳をもつ壺や瓶は、新潟県今池遺跡S D 03出土品や長野県菖蒲平1号窯出土品などに類例があり、いわゆる突帯付四耳壺の生産地域の影響が考えられる。権状錘がそれらの関連地域に含められる能登の製品に類似することは偶然ではない可能性がある。

SR 02 出土の土器（第79図）

SR 02からは、小矢戸地区の中では古い須恵器群が出土している。202～207は蓋である。202はTK 43型式併行期に属する。203～205は7世紀前半に属する。206・207は8世紀前半の製品で、207は壺蓋である。208～223は無台坏である。208～212は7世紀中頃までの製品群で、213～218が8世紀前半、219～223が8世紀後半に属する。224は皿である。口縁部の立ち上がりは鋭く、213～218と同様の時期に属する。225の坏Bも同時期である。226の甗は202と同じ6世紀後半に属する。227・228の小型広口壺は8世紀前半、229の小型台付短頸壺は8世紀に属する。230は水瓶の胴部で、2条1対の沈線が2カ所施されている。肩部には取手が付いていた可能性があるが破損している。231は鉄鉢である。平底で、



第79図 須恵器（9）（縮尺1/4）

口縁端部は丸く収められている。230・231 とともに8世紀中の製品と推定できるが、本地区でこうした仏教系の遺物が確認できるのはSR 02のみである。232は中型甕である。外面の仕上げはカキ目調整で8世紀の製品である。

S R 04・08・09 出土の土器 (第80図)

その他旧河道出土品について報告する。

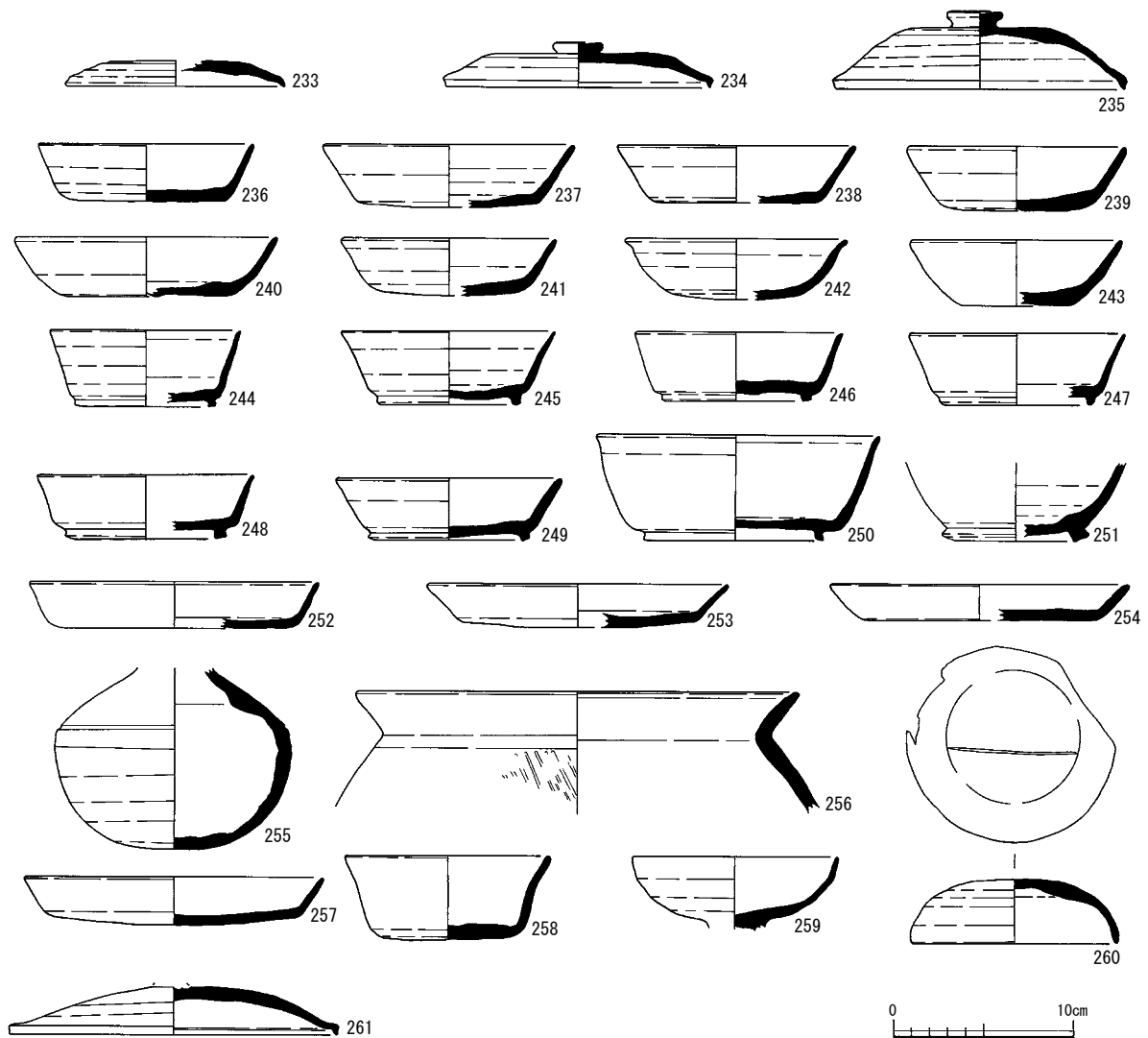
233～256がS R 04出土品である。食膳具では、8世紀の製品でもやや古い様相が残る236・244・252を除くとおおむね8世紀後半から9世紀に属する。251は小型の台付瓶である。255は出土数が多いものの長頸壺と推定でき、これも8世紀後半のものである。256は中型の甕である。口縁部外面に加飾のない型式の甕で、食膳具と同じ8世紀後半以降の製品である。

257～259がS R 08出土品である。257の皿や258の坏Aは器高も高く、口縁部が鋭く立ち上がる製品で、8世紀前半から中頃に属する。259の坏型の高坏は、高盤化以前の製品で8世紀前半までに属する。

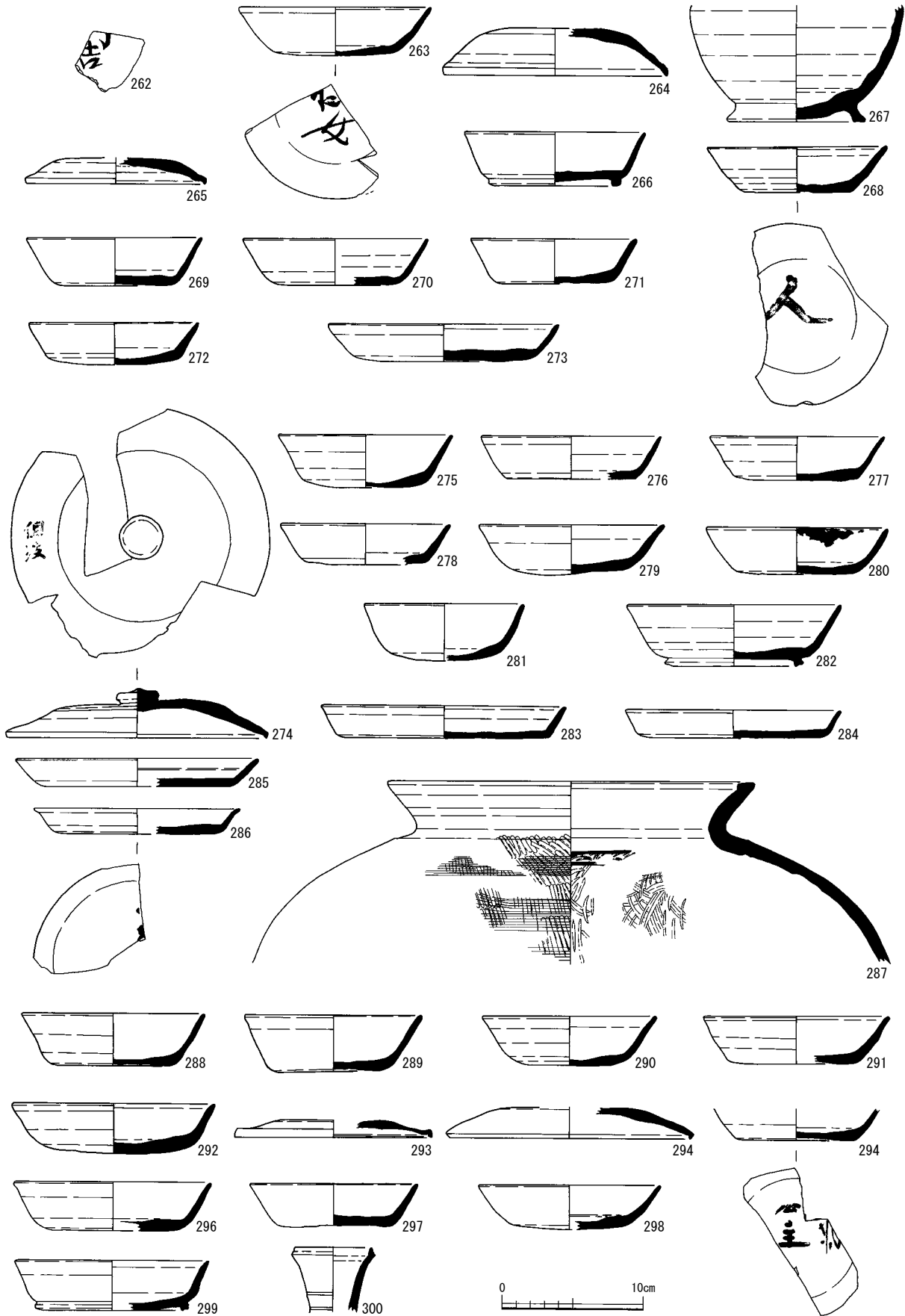
260・261がS R 09出土品である。260の蓋は7世紀前半の製品で、天井部に直線のヘラ記号がある。261の蓋は口縁端部の成形も丁寧に行われており、8世紀前半の製品である。

その他の遺構出土の須恵器 (第81～84図)

S D 01からは墨書がある坏A(262)が出土している。「口吉」と推定できる。S D 07からは坏A(263)と蓋(265)が出土している。263の墨書は「成女」と推定できる。時期は9世紀に属する。



第80図 須恵器 (10) (縮尺1/4)

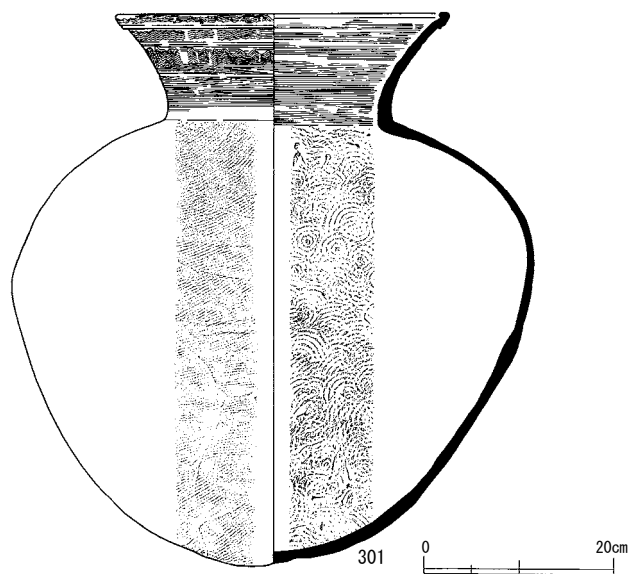


第81図 須恵器 (11) (縮尺1/4)

SD 16からは蓋(264)、SD 27からは坏B(266)と台付瓶(267)が出土している。時期は8世紀後半に属する。

SD 38からはほぼ完形の大甕(301)が出土した。口縁端部外面と口縁部に波状文が施され、胴部タタキも緻密で隙間が無い。非常に丁寧な成形・調整である。口唇部が内側に摘み上げられ、胴部のフォルムは肩がしっかりと張りだす。この甕だけで厳密な時期決定は困難だが、およそ8世紀中頃までの製品と推定できる。

SD 39からは、食膳具(268～273)がまとめて出土している。古い様相を残す個体も存在するが、273の皿は口縁部の立ち上がりも緩やかで、おおむね8世紀後半から9世紀に属する。



第82図 須恵器(12) (縮尺1/8)

土器溜り 01からは、274～287が出土している。蓋(274)の外面には、「但波」と推定できる墨書がある。口径が大きく、組み合わせられていたと思しき製品は確認できなかった。275～281は坏Aである。器高が高い275には古い様相がみられるものの、276～280は器高も低く、口縁部の立ち上がりも緩やかである。275は8世紀中頃まで、その他は8世紀後半から9世紀に属する。281は包含層出土品で報告を行ったものと同様の異形品と思われる。282の坏Bは、高台のつくりが丁寧で、口縁部が大きく開く形態ではあるものの、8世紀前半までの製品である可能性がある。283～286の皿についても283・284には古い様相が窺われるが、器高が低く単純に時期差とは言えない。286は口縁部が強く外反する製品で、底面に墨書があるが、判読不能である。287は口縁部が無装飾で、外面カキ目調整の中甕で、8世紀後半に属する。土器溜り 01出土の須恵器群は8世紀後半から9世紀の製品が中心であるが、8世紀前半から中頃までの製品も混在する可能性が高いと推定できる。

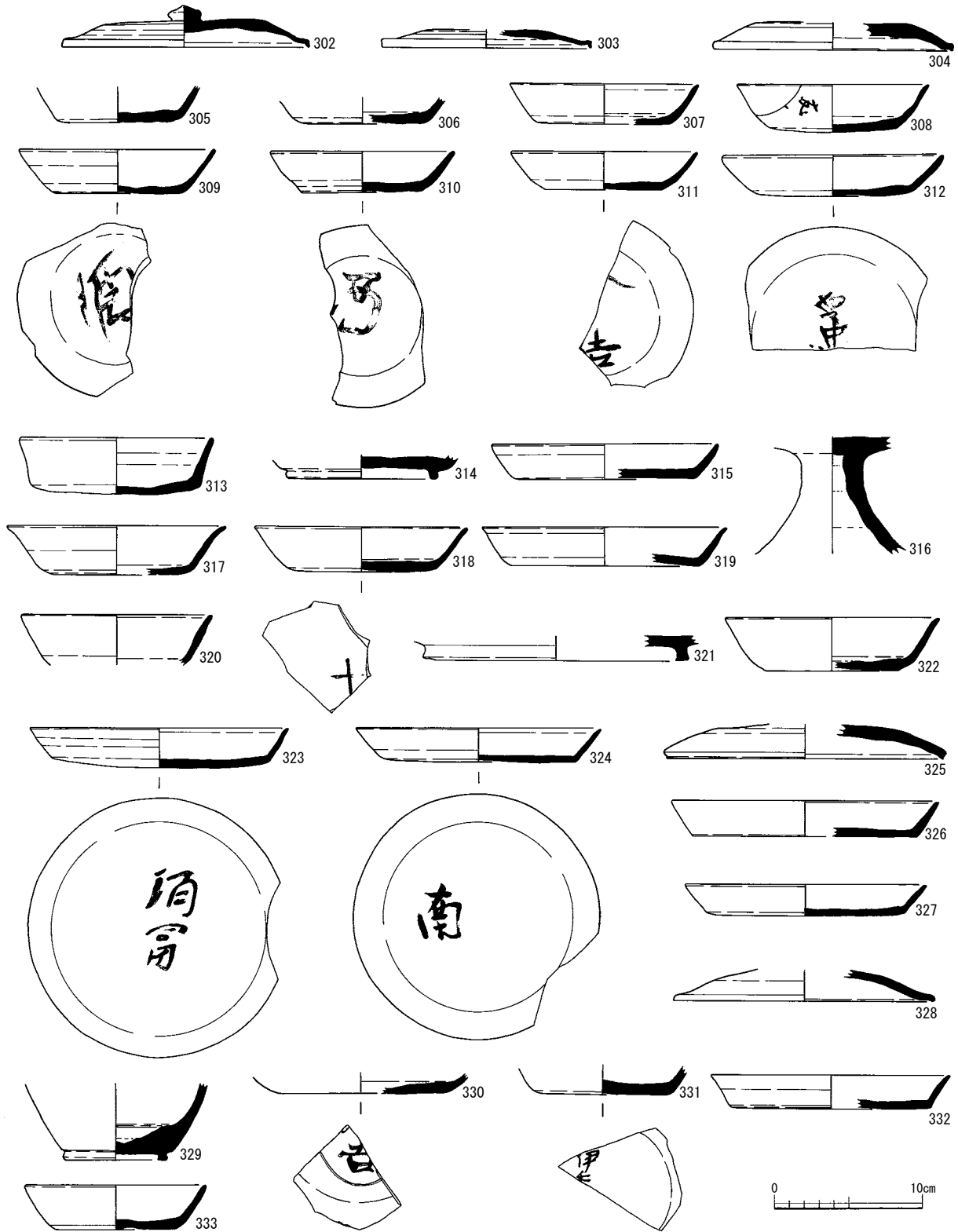
SK 05からは、288～293が出土している。292がやや異質ではあるが、一括性が高く、いずれも8世紀後半に属する。

SK 10からは、294～300が出土している。295の底面には「公主」の墨書がある。300は小型長頸瓶の口縁部である。2条の沈線が確認できる。296がやや古い様相を呈するものの、おおむね8世紀後半から9世紀に属する。

SE 04からは、302～316(第83図)が出土している。302～304は蓋である。302・304の平笠形のものも器高が低い。305～313は坏Aである。313以外、口縁が緩やかに立ち上がる。308の口縁部外面には「成口」、309・310は「酒」、311は「口吉」、312は判読不能の墨書がある。314の坏Bは方形高台である。315の皿は器高が高いものの、小口径で口縁部の立ち上がりも緩やかである。310は高盤であるが、低脚化している。以上の特徴からは、9世紀前半の製品群である可能性が高い。

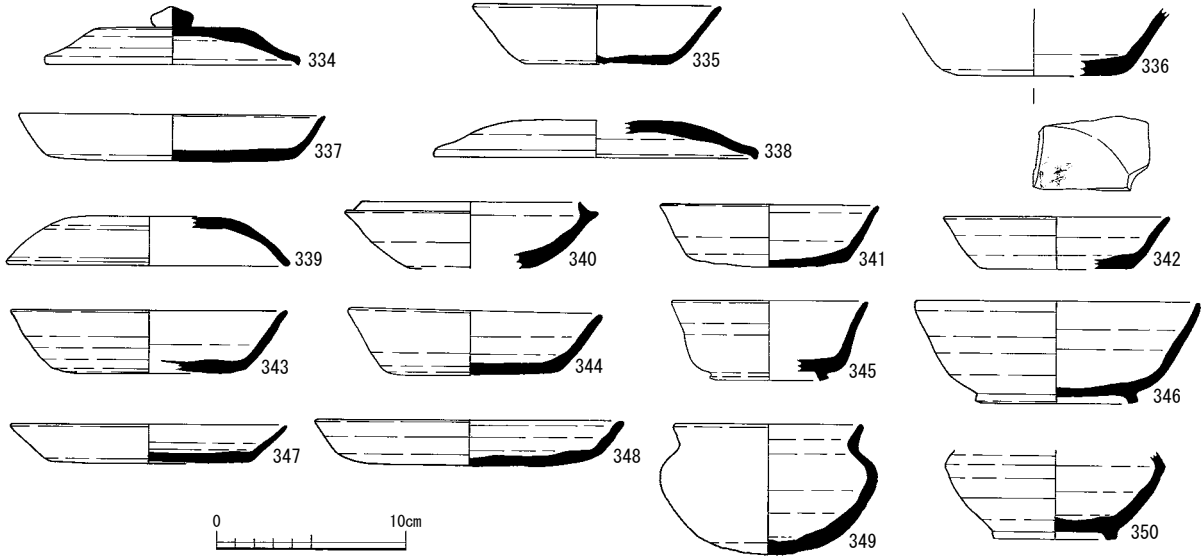
SB 02からは、317～320が出土している。318には底面に「十」の墨書がある。320の碗が含まれていることから8世紀中頃～後半に属すると考えられる。

SB 04からは盤(321)が出土している。破片資料であり、本個体だけで時期決定は困難である。SB 05からは、坏A(322)が出土している。322は8世紀後半から9世紀に属する。



第83図 須恵器 (13) (縮尺1/4)

S B 08 からは皿(323・324)が出土している。ともに8世紀中頃までの製品と推定できる。323には「酒富」、324には「南」の墨書がある。S B 10 からは 325～327 が出土している。325の口縁端部は粗雑化しており、8世紀後半の製品と考えられる。S B 11 からは 328・329 が、S B 14 からは 330～332、S B 19 からは 333 が出土している。いずれも8世紀後半から9世紀に属すると推定できる。



第84図 須恵器 (14) (縮尺1/4)

S B 20 からは、334～337 が出土している。336 には「伊」の墨書がある。8 世紀後半から 9 世紀に属する。S B 21 からは蓋 (338) が出土している。破損しているため断言できないが、8 世紀中の製品である可能性が高い。

339～350 は、ピット出土品である。340 の坏は 7 世紀前半に属し、最も古い。341 の坏 A は、口縁の立ち上がりも鋭く、丁寧な調整で 8 世紀中頃までの製品と推定できる。346 の碗、347・348 の皿は 9 世紀に属する。これら以外の製品は 8 世紀後半に属するものと推定できる。

第 3 表 須恵器観察表 (1)

※ 法量はcm

番号	出土地	器種	口径	底径	器高	調整/施文		残存率/12		色調		胎土	焼成	備考
						外面	内面	口縁部	底部	外面	内面			
1	F15 包含層	坏蓋			(4.0)	体:回転ナデ、天:回転ヘラケズリのち回転ナデ	体~天:回転ナデのちナデ	3	-	灰	灰	1	良	
2	C14 表土	坏蓋	14.0		2.3	口~体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ、回転ナデ	口~底:回転ナデ	12	2	灰	灰	2	良	
3	C14 表土	坏蓋	(14.4)		3.3	口~体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ、回転ヘラケズリ、回転ナデ	口~底:回転ナデ	3	1	灰白	灰白	4	良	
4	E15 包含層	坏蓋			(1.9)	体:回転ナデ、天:回転ヘラ切りのち回転ナデ、回転ナデ	体~天:回転ナデ	4	-	灰	灰	3	良	墨書「○」記号カ?
5	B21 B列Ⅱ	坏蓋	18.8		3.3	口~体:回転ナデ、天:回転ヘラ切り、回転ナデ	口~天:回転ナデ	7	1	浅黄	橙	2	良	
6	C12-13 表土	坏蓋	14.0		3.1	口~体:回転ナデ、天:回転ヘラナデ	口~天:回転ナデ	8	8	灰	灰	2	良	
7	C13 表土	坏蓋	(13.6)		2.4	口~体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ、回転ヘラケズリ、回転ナデ	口~底:回転ナデ	3	3	灰白	灰白	1	不良	
8	E15 包含層	坏蓋	(12.6)		2.9	口~体:回転ナデ、天:回転ヘラ切りのち回転ナデ、回転ヘラケズリ	口~天:回転ナデ	3	2	灰	灰	2	良	
9	C8 表土	坏蓋	(13.8)		3.1	口~体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ、回転ヘラケズリ、回転ナデ	口~底:回転ナデ	4	2	灰	灰	2	良	
10	C13 表土	坏蓋	14.2		2.7	口~体:回転ナデ、底:回転ヘラケズリ、回転ヘラ切りのち回転ナデ	口~底:回転ナデ	12	8	灰	灰	4	良	
11	C12 表土	坏蓋			(2.3)	体:回転ナデ、天:回転ヘラケズリのち回転ナデ	口~天:回転ナデ	-	8	灰	灰	2	良	
12	E16 包含層	坏蓋	(14.7)		2.2	口~体:回転ナデ、天:回転ヘラ切りのち回転ナデ、回転ナデ	体~天:回転ナデ	3	3	灰白	灰白	1	不良	
13	B14 表土	坏蓋	12.6		2.2	口~体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口~底:回転ナデ	12	11	褐灰	灰	2	良	
14	E8 表土	坏蓋	13.6		2.9	口~体:回転ナデ、天:回転ヘラ切りのちナデ	口~天:回転ナデ	6	1	灰	灰	4	良	
15	D10 表土	坏蓋	13.8		3.3	口~体:回転ナデ、天:回転ヘラナデ、底:回転ヘラナデ、回転ナデ	口~底:回転ナデ	10	3	灰	暗灰	3	良	
16	E16 包含層	坏蓋	(14.0)		3.0	口~体:回転ナデ、天:回転ヘラケズリ	口~天:回転ナデ	4	2	灰	灰	2	良	
17	B19 19列Ⅱ	坏蓋	13.2		2.8	口~体:回転ナデ、天:回転ヘラ切り、回転ヘラケズリ、回転ナデ	口~天:回転ナデ	7	2	灰	灰	4	良	
18	C13 13列Ⅱ	坏蓋	15.6		2.9	口~体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ、回転ナデ	口~底:回転ナデ	5	3	灰	灰	2	良	
19	D29 包含層	坏蓋	(13.6)		2.4	口~体:回転ナデ、天:回転ヘラ切りのち回転ナデ、回転ナデ	口~体:回転ナデ、天:回転ナデのちナデ	3	3	褐灰	灰	2	良	
20	E16 包含層	坏蓋	(12.4)		(1.6)	口~体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口~底:回転ナデ	5	4	灰	灰	2	良	
21	E16 包含層	坏蓋	(16.6)		(1.9)	口~体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ、回転ヘラケズリ	口~体:回転ナデ、底:ナデ	2	5	灰	灰	4	良	

第1節 小矢戸地区の遺物

22	D15 包含層	坏蓋	16.6	(11.1)	(3.3)	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ちナデ	口～底:回転ナデ	2	4	灰	灰	2	良	
23	E15-16 表土	坏蓋	16.0		(2.1)	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ち回転ナデ	口～底:回転ナデ	8	6	暗灰	灰	2	良	
24	E15-16 表土	坏蓋	(17.2)		(2.0)	口～底:回転ナデ	口～底:回転ナデ	6	4	灰	灰	2	良	外面:自然釉付着
25	E19 包含層	坏蓋	15.8		2.7	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラ切りの ちナデ・回転ヘラケズリ	口～体:回転ナデ、天:回転ナデの ちナデ	5	3	灰	灰	2	良	
26	C4 表土	坏蓋	(16.1)		(2.0)	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ち回転ナデ・回転ヘラケズリ	口～底:回転ナデ	5	5	灰	灰	1	良	
27	B16 表土	坏蓋	(16.2)		(2.3)	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ちナデ	口～底:回転ナデ	3	2	褐灰	褐灰	2	良	
28	C12-13 表土	坏蓋	(13.7)		(2.4)	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラ切りの ち回転ナデ	口～天:回転ナデ	-	2	灰	灰	4	良	
29	E9 表土	坏蓋	(16.2)		(2.0)	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ち回転ナデ	口～底:回転ナデ	2	1	灰	灰	1	良	
30	B9 表土	坏蓋	(18.9)		(2.0)	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラ切りの ちナデ	口～体:回転ナデ、天:回転ナデの ちナデ	1	2	灰	灰白	2	良	
31	C10 10列ト	坏蓋	(17.8)	(9.8)	(1.5)	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラ切りの ちナデ	体～天:回転ナデ	1	1	灰白	灰白	3	良	
32	E9 表土	壺蓋	(16.0)		3.6	口～底:回転ナデ	口～体:回転ナデ、底:回転ナデの ちナデ	3	1	灰	灰	2	良	
33	C28 包含層	坏蓋	(12.8)		3.1	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラ切り・回 転ヘラケズリ	口～天:回転ナデ	4	2	灰	灰	1	良	
34	E16 表土	坏A	(12.9)	9.4	3.9	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り	口～底:回転ナデ	2	6	灰	灰	1	良	
35	D16 包含層	坏A	(12.5)	8.1	3.3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ち回転ナデ	口～底:回転ナデ	4	6	灰白	灰白	2	良	外面底部:スノコ庄痕あり
36	C13 13列ト	坏B	13.0	9.4	3.3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ちナデ	口～底:回転ナデ	6	6	灰	灰	1	良	
37	表採	坏A	12.9	8.3	3.3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り	口～底:回転ナデ	5	6	灰	灰	1	良	
38	C18 包含層	坏A	12.6	9.3	3.6	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ち回転ナデ	口～底:回転ナデ	6	12	灰	灰	2	良	
39	C15 表土	坏A	(12.6)	9.5	3.4	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ちナデ	口～底:回転ナデ	2	5	灰白	灰白	2	不良	
40	E14 包含層	坏A	(14.4)	10.4	3.8	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ちナデ	口～底:回転ナデ	3	6	灰白	灰白	2	不良	
41	E19 包含層	坏A	(12.8)	9.0	3.2	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ちナデ	口～底:回転ナデ	4	6	灰	灰	2	良	
42	D12 表土	坏A	12.0	7.2	3.6	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ちナデ	口～底:回転ナデ	2	6	黄灰	黄灰	1	良	
43	C13 表土	坏A	(14.2)	(11.0)	4.1	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ちナデ	口～底:回転ナデ	1	4	灰	灰	2	良	
44	D16 包含層	坏A	(12.6)	9.6	3.6	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ちナデ	口～体:回転ナデ、底:回転ナデの ちナデ	3	6	灰白	灰白	2	不良	
45	C26 表土	坏A	(13.1)	10.0	4.0	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ちナデ	口～底:回転ナデ	4	7	灰黄	灰黄	2	不良	
46	C21 包含層	坏A	17.6	9.4	4.0	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ちナデ	口～体:回転ナデ、底:回転ナデの ちナデ	8	12	灰	灰	2	良	
47	B21 包含層	坏A	(12.4)	8.0	3.3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ち回転ナデ	口～底:回転ナデ	4	11	灰	灰	2	良	
48	C13 表土	坏A	(13.0)	8.4	3.2	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り	口～底:回転ナデ	1	9	灰	灰	3	良	外面体部:ヘラ記号数 字カ
49	B15 表土	坏A	(14.2)	(10.0)	2.9	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り	口～底:回転ナデ	1	1	灰	灰	2	良	外面体部:ヘラ記号「大」
50	D13 表土	坏A	13.0	8.6	2.8	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ち回転ナデ	口～底:回転ナデ	6	6	灰	灰	2	良	
51	C13 13列ト	坏A	(11.2)	(7.0)	3.3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ちナデ	口～底:回転ナデ	1	1	灰	灰	2	良	
52	E15 表土	坏A	(12.8)	7.6	2.9	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ちナデ	口～底:回転ナデ	1	3	灰	灰	2	良	
53	D29 包含層	坏A	(12.2)	8.0	2.9	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ち回転ナデ	口～体:回転ナデ、底:回転ナデの ちナデ	3	5	灰	灰	2	良	
54	C13 13列ト	坏A	(12.2)	(8.4)	2.9	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ちナデ	口～底:回転ナデ	4	4	黄灰	灰	2	良	
55	B20 20列ト	坏A	(11.3)	(8.4)	2.9	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ちナデ	口～底:回転ナデ	2	4	灰	灰	2	良	
56	A11 表土	坏A	12.6	9.4	3.1	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り	口～底:回転ナデ	5	5	灰	灰	2	良	
57	E16 包含層	坏A	12.5	8.0	3.2	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ち回転ナデ	口～底:回転ナデ	9	12	青灰	青灰	4	良	
58	E16 表土	坏A	11.8	7.5	2.5	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り	口～底:回転ナデ	5	10	灰	灰	1	良	内面:灯明皿として使用
59	B13 表土	坏A	(12.8)	(8.8)	2.6	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ちナデ	口～底:回転ナデ	2	2	灰	灰	3	良	
60	E15 包含層	坏A	(13.0)	(8.6)	2.7	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ちナデ	口～底:回転ナデ	3	4	灰	灰	2	良	
61	C14-15 表土	坏A	(16.6)	(13.1)	3.3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ちナデ	口～底:回転ナデ	2	3	灰	灰	2	良	
62	C12-13 表土	坏A	(11.6)	(8.2)	2.8	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ちナデ	口～底:回転ナデ	1	3	灰	灰	2	良	
63	C17 包含層	坏A	(12.4)	8.4	3.1	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ちナデ	口～底:回転ナデ	2	6	灰	灰	2	良	
64	C13 13列ト	坏A	(12.6)	8.7	3.1	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ちナデ	口～底:回転ナデ	1	11	灰	灰	2	良	
65	B20 20列ト	坏A	(11.8)	7.4	3.3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ちナデ	口～底:回転ナデ	2	8	灰	灰	4	良	
66	表採	坏A	(12.2)	(8.7)	3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り	口～底:回転ナデ、回転ナデの ちナデ	4	4	黄灰	黄灰	1	良	
67	E9 表土	坏A	(12.4)	(9.0)	2.7	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ち回転ナデ	口～底:回転ナデ	1	4	灰白	灰白	2	良	
68	E15 表土	坏A	(12.4)	7.2	4.4	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りの ちナデ	口～底:回転ナデ	4	8	灰	灰	4	良	

第5章 遺物

69	C12-13 表土	坏A	(14.0)	(6.6)	4.1	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	1	6	灰白	灰白	2	不良	
70	C6 C列Ⅱ	坏A	(12.0)	(10.4)	3.3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	2	3	灰	灰	2	良	
71	C28 包含層	坏G	10.5	6.8	3.8	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り	口～体:回転ナデ、底:回転ナデのちナデ	9	10	灰	灰	2	良	
72	B13 表土	坏A		7.4	(1.0)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り	底:回転ナデ	-	6	黄灰	黄灰	1	良	墨書 不明
73	E10 表土	坏A		8.0	(0.6)	回転ヘラ切り	回転ナデ	-	5	灰	灰	1	良	墨書「酒富」
74	B13 表土	坏A			(0.5)	回転ヘラ切りのちナデ	回転ナデ	-	-	黄灰	黄灰	1	良	墨書「口室」
75	A13 表土	坏A			(1.1)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	体～底:回転ナデ	-	2	灰	灰	1	良	墨書「富」
76	B13 表土	坏A			(0.8)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	体～底:回転ナデ	-	-	灰	灰	2	良	墨書「成女」
77	B14 表土	坏A			(0.7)	回転ヘラ切りのちナデ	回転ナデ	-	-	灰	灰	1	良	墨書「家」カ
78	E16 16列Ⅱ	坏A			(0.8)	回転ヘラ切りのちナデ	回転ナデ	-	-	黄灰	灰	2	良	墨書「伊」
79	D16 表土	坏A			(1.8)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	体～底:回転ナデ	-	-	灰	灰	2	良	墨書 不明
80	D15 表土	坏B	(17.6)	6.2	(13.8)	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	1	1	灰	灰白	2	良	
81	E9 表土	坏B	15.8	11.0	5.6	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	1	2	灰	灰	4	良	
82	C13 表土	坏B	15.6	10.8	6.5	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り	口～底:回転ナデ	10	12	灰	灰	1	良	
83	C14 表土	坏B	(15.4)	(12.0)	(5.1)	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	1	3	灰	灰	3	良	墨書「酒女」
84	C14 表土	坏B	15.7	11.2	5.8	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	6	7	灰	黄灰	2	良	墨書「来」
85	E10 表土	坏B		(13.4)	(1.7)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ、回転ナデ	底:回転ナデ	-	1	灰	灰	2	良	墨書「酒富」カ
86	E9 表土	坏B	(11.0)	(8.6)	3.0	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	1	5	灰	灰	2	良	
87	C16 表土	坏B	(10.5)	(7.2)	4.5	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	3	3	灰	灰	2	良	
88	C14 表土	坏B	(12.0)	7.2	4.1	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	2	5	灰	灰	2	良	
89	C13 表土	坏B	(12.0)	(7.6)	4.0	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	4	2	黒褐	灰	2	良	つぎ痕カ
90	E16 包含層	坏B	(12.5)	(8.0)	3.7	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ、回転ナデ	口～底:回転ナデ	2	5	灰	灰	1	良	
91	C18 包含層	坏B	(12.6)	7.9	3.5	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ、回転ナデ、ナデ	口～底:回転ナデ	1	6	灰	灰	2	良	
92	C13 表土	坏B	(12.1)	9.7	3.9	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	3	6	灰	灰	2	良	
93	C13 13列Ⅱ	坏B	(12.8)	9.5	3.6	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り	口～底:回転ナデ	1	3	灰	灰白	1	良	
94	C13 C列Ⅱ	坏B	(12.4)	(9.2)	4.2	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	1	4	灰	灰	2	良	
95	B14-15 表土	坏B	(12.6)	8.4	3.7	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	3	7	灰	灰	3	良	外面:鉄軸状
96	E16 包含層	坏B	10.6	6.8	4.0	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り、回転ナデ	口～底:回転ナデ	2	4	褐灰	灰	3	良	
97	C12 12列Ⅱ	坏B		(7.1)	(3.1)	体:回転ナデ、底:ヘラ切りのち回転ナデ	体～底:回転ナデ	-	3	灰	灰	2	良	碗B
98	表採	坏B		8.7	(3.4)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	体～底:回転ナデ	-	8	灰	灰	2	良	墨書 不明
99	C13 表土	坏B	(12.8)	(8.8)	3.8	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ、回転ナデ	口～底:回転ナデ	2	4	灰	黄灰	2	良	墨書 不明
100	E15 包含層	坏B	(14.7)	(10.7)	3.7	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラ切り	口～天:回転ナデ	1	2	灰	灰	2	良	
101	D20 包含層	坏B	(14.8)	9.8	3.4	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ、回転ナデ	口～底:回転ナデ	4	5	灰	灰	4	良	
102	表採	坏B	(17.9)	(13.1)	3.7	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り	口～体:回転ナデ、底:回転ナデのちヘラナデ	1	2	灰	灰	2	良	
103	E7 表土	皿	(13.5)	(10.8)	2.2	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	1	4	灰	灰	1	良	
104	E15 包含層	皿	(16.0)	(12.0)	2.6	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	2	2	灰	黄灰	4	良	
105	E16 包含層	皿	(16.8)	(14.4)	2.3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	1	3	灰	灰	2	良	
106	C12 表土	皿	(15.6)	(13.8)	2.7	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	1	2	灰	灰	2	良	
107	C13 表土	皿	(14.6)	12.2	2.1	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～体:回転ナデ、底:回転ナデ、ナデ	1	1	灰	灰	1	良	
108	C13 13列Ⅱ	皿	16.4	13.7	2.6	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～体:回転ナデ、底:回転ナデのちナデ	3	8	灰	灰	2	良	
109	C13 表土	皿	16.9	(14.5)	2.7	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り	口～底:回転ナデ	3	4	灰白	灰白	1	良	
110	E15 包含層	皿	(17.0)	(13.2)	2.7	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	1	1	灰	灰	2	良	
111	E16 包含層	皿	(17.0)	(13.6)	2.3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り	口～底:回転ナデ	1	1	灰	灰	2	良	
112	D15 表土	皿	(16.8)	14.2	2.4	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	2	2	灰	灰	2	良	
113	D15 包含層	皿	(16.0)	(12.0)	2.2	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	-	3	灰	灰	2	良	
114	E10 表土	皿	(17.6)	(15.0)	2.2	口～体:回転ナデ、底:ヘラ切りのちヘラナデ、回転ナデ	口～底:回転ナデ	2	2	灰	灰	2	良	外面底部:スノコ圧痕あり
115	B28 包含層	皿	(17.5)	4.9	2.3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～体:回転ナデ、底:回転ナデのちナデ	2	11	灰白	灰白	2	良	

第1節 小矢戸地区の遺物

116	E15 包含層	皿	16.1	13.5	2.4	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	5	10	灰	灰	3	良	
117	C13 表土	皿	16.7	13.4	2.6	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ・回転ヘラケズリ	口～底:回転ナデ	3	10	灰	灰	2	良	
118	E17 包含層	皿	(14.0)	(10.8)	2.3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	2	3	灰	灰	2	良	
119	C19 包含層	皿	(16.8)	(14.4)	2.5	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～体:回転ナデ、底:回転ナデのちナデ	1	3	灰白	灰白	2	不良	
120	C14 表土	皿	(15.6)	(13.4)	2.0	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	1	3	灰白	灰白	1	良	
121	C13 表土	皿	(16.6)	(14.4)	2.0	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～体:回転ナデ、底:回転ナデのちナデ	2	3	灰	灰	2	良	
122	C12 表土	皿	(15.5)	(12.6)	2.0	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り	口～底:回転ナデ	1	2	灰	灰	2	良	
123	C13 表土	皿	16.9	(14.2)	2.0	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り	口～底:回転ナデ	2	4	黄灰	黄灰	2	良	
124	A8 表土	皿	(15.8)	(13.2)	1.8	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	3	4	灰	灰	1	良	
125	表採	皿	(15.9)	(12.4)	2.1	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	1	1	灰	灰	2	良	
126	D7 表土	皿	(15.8)	(13.1)	1.9	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	3	3	黄灰	灰	4	良	
127	C14 表土	皿	(16.3)	(13.1)	2.4	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	1	1	灰	灰	1	良	墨書「酒富」
128	C13 表土	皿	(17.0)	14.2	2.1	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	3	10	灰白	灰白	2	良	墨書「物」カ
129	C18 18列IV	皿	17.7	14.3	2.2	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	7	10	灰	灰	3	良	墨書「馬口」
130	C13-15 表土	皿		(15.4)	(1.9)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ	体～底:回転ナデ	-	-	灰	灰	1	良	墨書「来」
131	B15 表土	広口壺	(9.8)		(4.9)	口:回転ナデ、体:回転ナデ・ヘラ描沈線・回転ヘラケズリカ	口～体:回転ナデ	3	-	灰	灰	1	良	
132	C12 表土	短頸壺	10.0		(4.8)	口～体:回転ナデ	口～体:回転ナデ	1	-	灰	灰	1	良	外面:自然降灰あり
133	E15-16 表土	短頸壺		(16.6)	(3.2)	高台:回転ナデ	高台:回転ナデ	-	6	橙	橙	1	不良	
134	C29 表土	鉢	(21.4)		(10.8)	口:回転ナデ、体:回転ナデのちカキメ	口～体:回転ナデのちカキメ	4	-	灰	灰	4	良	
135	D29 SD39	鉢	(26.8)	(14.4)	15.0	口:回転ナデ、体:回転ナデのちカキメ・ヘラケズリ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデのちカキメ	9	7	灰	灰	4	良	
136	D27 表土	鉢	(21.8)		(9.2)	口～体:回転ナデ、体:カキメ	口～体:回転ナデ	2	-	灰	灰	2	良	
137	E16 包含層	鉢	(26.0)		(7.2)	回転ナデ	回転ナデ	1	-	灰白	灰白	2	不良	
138	E15 表土	鉢	(20.7)		(13.0)	口～体:ナデ	口～体:ハケメのちナデ・ヘラ描沈線(2)	1	-	灰白	灰白	1	不良	
139	C17 包含層	直口壺	(17.0)		(9.0)	口:カキメ、体:タタキ	口:回転ナデ、体:回転ナデのちカキメ	2	-	灰	灰	2	良	
140	B13 表土	鉢		(14.6)	(6.3)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ・回転ナデ	体～底:回転ナデ	-	4	暗灰	暗灰	2	良	
141	D15 包含層	直口壺	(20.2)		(6.3)	口～体:回転ナデ・タタキ	口～体:回転ナデ・タタキ	2	-	褐灰	灰	2	良	
142	C12 表土	甕	(22.6)		(7.8)	口～頭:回転ナデ、体:タタキのちカキメ	口～頭:回転ナデ、体:タタキのち指押さえ	2	-	褐灰	褐灰	2	良	
143	D29 包含層	甕	(19.0)		(7.8)	口:回転ナデ、体:タタキのち回転ナデ	口:回転ナデ、体:タタキ	2	-	褐灰	褐灰	2	良	
144	C13 13列IV	甕	(23.8)		(8.0)	口～頭:回転ナデ、体:タタキのちナデ	口～頭:回転ナデ、体:タタキ	1	-	褐灰	褐灰	2	良	
145	C13 表土	甕	(21.8)		(6.7)	口:回転ナデ、体:タタキのちカキメ	口:回しナデ、体:タタキのち回しナデ	4	-	灰	灰	3	良	
146	D27 包含層	甕	(50.0)		(14.3)	口:回転ナデ、体:カキメ・凹線文(3)・斜線文(2)・回転ナデ	口～体:回転ナデ	1	-	灰	灰	2	良	
147	B26 表土	壺		4.2	(9.0)	頸:回転ナデ、体:回転ナデ、底:回転ヘラケズリ	頸:ナデ	-	12	暗灰	灰	1	良	外面底部:坏身付
148	C14 表土	甕か瓶			(9.0)	指ナデ	タタキカ	-	-	青灰	青灰	3	良	
149	C11-12 表土	長頸瓶			(11.5)	回転ナデ	回転ナデ	-	-	灰	暗灰	2	良	内面頸部:自然軸付着
150	D29 包含層	横瓶	(11.6)		(7.7)	口:回転ナデ、体:カキメ	口:回転ナデ、体:カキメ	2	-	灰	灰	2	良	
151	C12 表土	双耳瓶			(3.7)	体:回転ナデ、耳:ケズリのちナデ	体:回転ナデ	-	-	黄灰	灰	2	良	耳付、外面体部:自然軸
152	E29 包含層	長頸壺	8.2		(10.9)	口:カキメ、体:回転ナデ	口～体:回転ナデ	11	-	灰	灰	2	良	
153	F23 包含層	長頸壺	7.1	6.0	13.3	口～体:回転ナデ・ヘラ描沈線・ヘラナデ、底:回転ヘラケズリ	口～底:回転ナデ	11	8	灰	灰	2	良	
154	E29 包含層	広口瓶	17.6		(14.6)	口～体:回転ナデ	口～体:回転ナデ	8	-	灰	灰	4	良	
155	D15 包含層	権状鍾	3.7		3.4			12	12	灰	灰	2	良	重量:40.9g
156	D10 SR01	坏蓋	(13.8)		2.9	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラケズリのち回転ナデ	口～天:回転ナデ	3	3	灰	灰	4	良	
157	D10 SR01	坏蓋	(15.6)		(2.4)	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラ切りのちナデ	口～天:回転ナデ	5	2	灰	灰	1	良	
158	C0 SR01	坏蓋	(13.0)		(2.2)	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラ切りのちナデ	口～天:回転ナデ	9	6	灰白	灰白	1	不良	
159	A-B13 SR01	坏蓋	(15.8)		(2.8)	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラ切りのちナデ	口～天:回転ナデ	4	1	灰	灰	2	良	
160	E10 SR01	坏蓋	(15.1)		(1.9)	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラケズリ	口～天:回転ナデ	-	1	灰	灰	1	良	墨書「酒富」
161	E10 SR01	坏蓋			(1.1)	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラ切りのち回転ナデ・回転ナデ・回転ヘラケズリのち回転ナデ	口～天:回転ナデ	3	-	灰	灰	2	良	墨書「宮女」
162	C11 SR01	坏蓋	(18.1)		(2.4)	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～天:回転ナデ	1	1	灰	灰	2	良	

第5章 遺物

163	D10 SR01	坏蓋			(1.1)	口～体:回転ナデ	口～体:回転ナデ	-	-	黄灰	黄灰	1	良	墨書「戌カ?口」
164	D10 SR01	壺蓋	(13.6)	(11.0)	(3.0)	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～天:回転ナデ	-	2	灰	灰	2	良	
165	A-B13 SR01	坏A	12.1	8.8	3.2	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り	口～底:回転ナデ	8	11	灰	灰	4	良	口縁部:自然釉あり、内面口縁部:ターム痕あり、灯明皿として使用か
166	B12 SR01	坏A	(12.0)	8.4	3.1	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	3	6	灰	灰	4	良	
167	D10 SR01	坏A	(12.6)	8.4	3.1	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	2	6	暗灰	灰	1	良	
168	D10 SR01	坏A	(13.2)	(9.1)	3.2	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底:回転ナデ	4	3	灰	灰	2	良	
169	D10 SR01	坏A		(9.0)	(2.4)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	体～底:回転ナデ	-	1	暗灰	灰	4	良	外面底部:ヘラ記号
170	E10 SR01	坏A	(12.0)	(9.1)	2.8	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	3	3	灰	灰	1	良	墨書「富」
171	D9 SR01	坏A	(12.6)	9.2	3.2	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	1	6	灰白	灰白	2	良	墨書「酒富」
172	D10 SR01	坏A		(7.9)	(1.4)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	底:回転ナデ	-	4	灰白	灰黄	2	良	墨書「酒」
173	D10 SR01	坏A		(8.6)	(1.3)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	体～底:回転ナデ	-	3	灰	黄灰	1	良	墨書「酒富」カ
174	D11 SR01	坏A	(13.0)	7.0	3.6	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	3	6	黄灰	黄灰	3	良	墨書「中」
175	D11 SR01	坏A		8.8	(1.3)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	体～底:回転ナデ	-	11	灰	灰	2	良	墨書「口田」
176	E9 SR01	坏A	(14.1)	(8.0)	3.1	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	2	3	灰黄	灰黄	2	不良	墨書 不明
177	B13-D10 SR01	坏B		11.4	(5.5)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ・回転ナデ	体～底:回転ナデ	-	7	灰	灰	2	良	
178	C11 SR01	坏B		11.6	(5.2)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ・回転ナデ	体～底:回転ナデ	-	6	灰	灰	2	良	
179	E10 SR01	坏B	(16.4)	11.9	4.6	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ・回転ナデ	口～体:回転ナデ、底:回転ナデのちナデ	2	6	黄灰	灰	2	良	外面:自然釉
180	D11 SR01	坏B		7.7	(2.8)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ・回転ナデ	体～底:回転ナデ	-	12	灰	灰	2	良	墨書「戌人」
181	D9 SR01	坏B		7.9	(2.3)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ・回転ナデ	体～底:回転ナデ	-	12	灰	灰	2	良	墨書「井口」
182	B13 SR01	坏B		11.1	(1.6)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ・回転ナデ	体:回転ナデ、底:回転ナデ・ナデ	-	6	灰	灰	2	良	墨書「酒富」
183	D10 SR01	坏B		10.8	(2.6)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ・回転ナデ	体～底:回転ナデ	-	7	灰	灰	2	良	墨書「酒富」
184	B13 SR01	碗	(13.8)	4.4	5.6	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	5	8	暗灰	暗灰	2	良	
185	E10 SR01	碗	(14.1)	8.1	5.5	口～体:回転ナデ、底:回転ナデ・つまみナデ	口～底:回転ナデ	2	9	灰	灰	2	良	高台付
186	B12 SR01	碗		9.2	(3.3)	体:回転ナデ、底:糸切りのち回転ナデ	体～底:回転ナデ	-	5	灰	灰	2	良	
187	C11 SR01	皿	(16.8)	14.0	2.5	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～体:回転ナデ、底:回転ナデ・ナデ	1	1	灰	灰	1	良	
188	D11 SR01	皿	(17.4)	(13.0)	2.5	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	1	2	灰	灰	1	良	
189	D10 SR01	皿	(14.0)	(11.2)	2.1	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	1	2	灰	灰	2	良	墨書「伊」
190	A13-B13 SR01	皿	(15.5)	(13.4)	2.4	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	1	2	灰	灰	1	良	
191	C14 SR04	皿	(16.8)	(12.4)	2.2	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	1	3	灰	灰	1	良	
192	D11 SR01	高坏		(9.2)		回転ナデ	回転ナデ	-	-	灰白	灰白	1	不良	
193	C11 SR01	提瓶		(7.8)		体:回転ナデカ、底:回転ヘラ切り?のち回転ナデ	体～底:回転ナデカ	-	1	灰	灰	1	良	外面底部高台部:ヘラ記号あり
194	E10 SR01	広口壺	(16.6)		(8.1)	口:回転ナデ	口:回転ナデ	1	-	暗灰	灰	2	良	
195	B13 SR01	瓶		(7.9)		頸～体:回転ナデ	頸～体:回転ナデ	-	-	灰	灰	2	良	
196	D10 SR01	壺	(12.1)	(5.2)		体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ・回転ナデ	体～底:回転ナデ	-	2	灰	灰	2	良	
197	A-B13 SR01	瓶	(10.6)	(7.3)		体:回転ナデ、底:ナデ	体～底:回転ナデ	-	4	灰	灰白	2	良	
198	D10 SR01	長頸瓶	(10.4)	(9.0)		体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	体～底:回転ナデ	-	-	灰	灰	2	良	
199	B13 SR01	四耳壺	(12.6)		(8.0)	口:回転ナデ、体:回転ナデ・タキのちカキメ	口:回転ナデ、体:回転ナデ・タキ	3	-	灰	灰	2	良	耳2ヶ所残存
200	C11-12 表土	甕	(27.8)		(7.0)			2	-	灰	灰	2	良	
201	B12-13 SR01	甕	(23.4)		(5.1)	口～体:回転ナデ	口～体:回転ナデ	2	-	暗灰	暗灰	2	良	
202	B0 SR02	坏蓋	11.1		3.9	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラ切りのちナデ	口～天:回転ナデ	12	9	灰	褐灰	4	良	
203	B0 SR02	坏蓋	12.0		3.9	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	6	4	灰	灰	1	良	
204	C1 SR02	坏蓋	(12.1)		3.8	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ・回転ヘラケズリ	口～体:回転ナデ、底:ナデ	4	4	暗灰	灰	1	良	外面底部:ヘラ記号あり
205	B0 SR02	坏蓋	12.0		3.3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ・回転ヘラケズリのちナデ	口～底:回転ナデ	12	12	暗灰	暗灰	2	良	
206	E9 SR02	坏蓋	11.9		2.5	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ・回転ナデ	口～底:回転ナデ	9	4	暗灰	暗灰	4	良	
207	C0 SR02	坏蓋		(2.9)		体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ・回転ナデ・沈線(2)(2)	体～底:回転ナデ	4	-	暗灰	暗灰	1	良	
208	B0-1 SR02	坏H	10.3	5.6	4.0	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～体:回転ナデ、底:回転ナデのちナデ	7	9	灰	灰	2	良	
209	C1 SR02	坏H	(13.6)	(6.6)	(3.3)	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	1	1	灰	灰	1	良	外面底部:ヘラ記号

第1節 小矢戸地区の遺物

210	C1 SR02	坏H	(13.0)	(6.4)	3.5	口:回転ナデ、体:回転ヘラケズリ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	2	6	灰	灰	1	良	外面底部:ヘラ記号
211	C0 SR02	坏	(10.4)		3.2	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	7	7	灰	灰	1	良	外面底部:スノコ圧痕あり
212	C1 SR02	坏H	(11.2)		(3.4)	口～体:回転ナデ	口～体:回転ナデ	3	2	褐灰	褐灰	1	良	
213	B1 SR02	坏A	13.0	8.7	3.9	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	4	6	灰	灰	2	良	
214	B1 SR02	坏A	14.0	8.0	4.3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	4	4	灰白	灰白	1	不良	
215	B0 SR02	坏A	(13.3)	(8.6)	4.0	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	2	6	灰白	灰白	4	不良	
216	B0 SR02	坏A	14.4	10.0	3.8	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	2	7	灰	灰	2	良	
217	C1 SR02	坏A	(13.2)	(9.2)	4.1	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	6	6	灰	灰	4	良	
218	B0-C1 SR02	坏A	(12.7)	(8.5)	4.1	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	2	9	灰	灰	4	良	外面底部:ヘラ記号「十」字
219	B1 SR02	坏A	13.8	9.5	3.2	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	3	9	灰	灰	2	良	外面底部:ヘラ記号あり
220	B1 SR02	坏A	13.3	9.7	3.6	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	12	11	灰白	灰白	4	良	
221	C0 SR02	坏A	13.1	(8.7)	3.6	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～体:回転ナデ、底:回転ナデ・ナデ	3	8	灰	灰	3	良	
222	B1 SR02	坏A	(14.0)	(8.4)	(3.0)	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り	口～底:回転ナデ	3	3	灰白	灰白	2	不良	
223	C1 SR02	坏A	13.6	8.4	2.9	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	8	7	灰	灰	2	良	
224	C1 SR02	皿	(17.0)	(13.4)	2.6	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	2	3	灰	灰	1	良	
225	C1 SR02	坏B	(15.6)	(10.6)	5.8	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ・回転ナデ	口～底:回転ナデ	1	4	暗灰	灰	2	良	
226	B0 SR02	壺	12.6	3.5	16.5	口:回転ナデ・ヘラ指洗線(1)、頸:回転ナデ・ヘラ指洗線(2)、体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り・回転ヘラケズリ	口:回転ナデ、頸:回転ナデ、体～底:回転ナデ	8	12	灰	灰	2	良	
227	C1 SR02	広口壺	(9.6)	(8.2)	6.7	口～体:回転ナデ・ヘラケズリ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	2	4	灰	灰	1	良	内面:墨の痕跡あり
228	B0 SR02	広口壺	(10.0)	10.2	7.5	口～体:回転ナデ・カキメ、底:回転ヘラ切りのちナデ・回転ヘラケズリのちナデ	口～底:回転ナデ	1	6	灰	灰	1	良	
229	B0・1・C1 SR02	短頸壺	(6.4)	7.6	6.3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	2	8	灰	灰	2	良	
230	B0 SR02	水瓶			(11.1)	体:回転ナデ・沈線上(2)・下(2)	体:回転ナデ	-	-	褐灰	灰	1	良	外面体部:自然釉
231	B0 SR02	鉄鉢	(18.2)	9.0	10.5	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ・回転ヘラケズリ	口～底:回転ナデ	-	12	灰	灰	2	不良	
232	B1 SR02	甕	17.0		(15.5)	口:回転ナデ、体:タタキ・カキメ	口:回転ナデ、体:タタキ	6	-	灰	灰	1	良	
233	B-C16 SR04	坏蓋	(12.2)		(2.0)	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ・回転ヘラケズリ	口～底:回転ナデ	3	1	灰	灰白	2	良	
234	B21 SR04	坏蓋	(14.6)		2.5	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラ切り・回転ヘラケズリ・回転ナデ	口～天:回転ナデ	4	1	灰	灰	2	良	
235	C12 SR04	坏蓋	16.0		4.4	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラケズリ・回転ナデ	口～天:回転ナデ	12	6	灰	灰	2	良	
236	B21 SR04	坏A	11.8	9.6	3.2	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	5	12	にぶい黄橙	灰黄褐	2	良	
237	C12 SR04	坏A	13.8	9.4	3.5	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	5	5	灰白	灰白	2	良	
238	C12 SR04	坏A	(13.2)	9.2	3.2	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底:回転ナデ	2	6	灰白	灰白	2	良	
239	B13 SR04	坏A	(12.2)	7.2	3.6	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ・回転ヘラケズリ	口～底:回転ナデ	1	7	灰	灰	4	良	
240	C12 SR04	坏A	(14.5)	(9.4)	3.3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り	口～底:回転ナデ	1	3	灰	灰	2	良	
241	B21 SR04	坏A	(11.8)	9.0	3.2	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底:回転ナデ	2	6	灰	灰	2	良	
242	B21 SR04	坏A	(12.2)	7.2	3.4	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	3	5	灰	灰	2	良	
243	B13 SR04	坏A	(11.8)	(3.4)	3.6	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	1	3	黄灰	灰白	1	良	
244	B21 SR04	坏B	(10.4)	7.0	4.3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ・回転ナデ	口～底:回転ナデ	4	5	灰	灰	2	良	
245	B20 SR04	坏B	(11.8)	(7.2)	4.1	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ・回転ナデ	口～底:回転ナデ	2	4	灰黄	灰黄	1	良	
246	C15 SR04	坏B	11.6	8.3	3.9	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	8	12	灰	灰	2	良	
247	B14 SR04	坏B	(11.9)	(8.1)	4.0	口～体:回転ナデ	口～底:回転ナデ	3	3	黄褐	灰	2	良	
248	B21 SR04	坏B	(11.9)	3.6	7.8	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ・回転ナデ	口～底:回転ナデ	1	5	灰	灰	1	良	
249	B21 SR04	坏B	(12.4)	9.6	3.5	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ・回転ナデ	口～底:回転ナデ	3	8	灰	暗灰	2	良	
250	B14 SR04	坏B	15.6	10.0	5.9	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ・ナデ	口～底:回転ナデ	2	10	暗灰	灰	2	良	
251	B-C16 SR04	台付瓶		8.2	(4.4)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	体～底:回転ナデ	-	6	暗灰	灰	2	良	
252	B14 SR04	皿	(15.9)	(13.6)	2.6	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底:回転ナデ	2	2	灰白	灰白	2	良	
253	C12 SR04	皿	(16.6)	(13.7)	2.4	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～体:回転ナデ、底:回転ナデのちヘラナデ	2	3	灰	灰	1	良	
254	B13 SR01-04	皿	(16.5)	(13.2)	2.0	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	1	3	灰白	灰白	4	良	
255	B20 SR04	長頸壺		6.1	(10.1)	体:回転ナデ・沈線、底:回転ヘラケズリ	体～底:回転ナデ	-	8	灰	灰	1	良	
256	B-C16 SR04	甕	(24.4)		(6.8)	口:横ナデ、体:カキメのちナデ	口～体:ナデ	2	-	灰	黄灰	2	良	

第5章 遺物

257	D29 包含層	皿	16.4	14.4	2.7	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～体:回転ナデ、底:回転ナデのちナデ	5	6	灰	灰	2	良	
258	C26 SD38	坏A	11.2	7.3	4.7	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	9	12	灰	灰	2	良	
259	C26 SD38	高坏	11.4		(4.1)	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ・ナデ	口～底:回転ナデ	11	11	淡黄	淡黄	2	良	坏部のみ
260	E26 SD38	坏蓋	11.4		3.6	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラ切りのちナデ	口～体:回転ナデ、天:回転ナデのちナデ	12	6	褐灰	橙	2	良	外面天井部:ヘラ記号あり
261	E26 SD38	坏蓋	18.2		(2.7)	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラ切りのちナデ・回転ヘラケズリのちナデ	口～天:回転ナデ	12	12	灰	灰	3	良	
262	B9 SD01	坏A			(0.6)	回転ヘラ切り	回転ナデ	-	-	褐灰	褐灰	2	良	墨書「口吉」
263	D16 SD07	坏A	(13.6)	(8.4)	3.5	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	2	3	灰	灰	2	良	墨書「口女」
264	D15 SD16	坏蓋	15.8		(3.4)	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラ切りのち回転ナデ・回転ヘラケズリ	口～体:回転ナデ、天:回転ナデのちナデ	5	5	灰	灰	2	良	
265	D16 SD07	坏蓋	12.6		(1.9)	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～天:回転ナデ	5	3	灰	灰	2	良	
266	B20 SD27	坏B	12.6	8.3	3.8	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ・回転ナデ	口～体:回転ナデ、底:回転ナデのちナデ	7	6	灰	灰	2	良	
267	D21 SD27	台付瓶		(9.6)	(8.3)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ・回転ナデ	体～底:回転ナデ	-	4	灰	灰	4	良	高台付
268	D29 SD39	坏A	(12.8)	8.2	3.3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底:回転ナデ	4	8	黄褐	黄灰	1	良	墨書「人」
269	D29 SD39	坏A	(12.3)	8.8	3.5	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	4	6	灰白	灰白	1	良	
270	D28 SD39	坏A	(13.0)	8.4	3.3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	4	5	淡黄	灰白	1	不良	
271	D29 SD39	坏A	11.6	8.2	3.2	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～体:回転ナデ、底:回転ナデのちナデ	8	12	灰白	灰白	2	不良	
272	D29 SD39	坏A	11.9	9.4	3.0	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底:回転ナデ	6	8	灰	灰	4	良	
273	D29 SD39	皿	(16.2)	13.2	2.7	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～体:回転ナデ、底:回転ナデ	2	10	灰	灰	1	良	
274	C13 土器溜り01	坏蓋	18.2		3.5	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラ切りのち回転ナデ・回転ヘラケズリのち回転ナデ・回転ナデ	口～天:回転ナデ	10	6	灰	灰	3	良	墨書「但波」カ
275	C13 土器溜り01	坏A	12.2	9.0	3.8	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り	口～底:回転ナデ	6	10	灰白	灰白	2	不良	
276	C13 土器溜り01	坏A	(12.7)	(9.2)	3.1	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底:回転ナデ	2	3	灰白	灰白	2	良	
277	C13 土器溜り01	坏A	(12.2)	9.0	3.2	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	3	12	灰	灰	2	良	
278	C13 土器溜り01	坏A	(12.0)	(9.2)	(2.9)	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底:回転ナデ	3	3	灰	灰	3	良	
279	C13 土器溜り01	坏A	15.0	7.9	3.5	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	5	10	灰白	灰白	4	不良	
280	C13 土器溜り01	坏A	12.9	8.9	3.3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り	口～底:回転ナデ	10	12	灰	灰	2	良	内面口縁部:タール痕付着
281	C13 土器溜り01	坏A	(11.3)	(7.8)	(4.1)	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	1	4	灰	灰	2	不良	
282	C13 土器溜り01	坏B	15.0	8.2	4.4	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ・回転ナデ	口～底:回転ナデ	5	6	灰	灰	4	良	
283	C13 土器溜り01	皿	(17.2)	(13.4)	2.3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～体:回転ナデ、底:回転ナデのちナデ	4	4	灰	灰	2	良	
284	C13 土器溜り01	皿	(15.1)	(13.5)	2.0	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～体:回転ナデ、底:回転ナデのちナデ	2	3	灰	褐灰	2	良	
285	C13 土器溜り01	皿	(17.0)	(12.4)	2.0	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	2	2	灰白	灰白	2	良	
286	C13 土器溜り01	皿	(14.6)	(12.0)	1.8	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～体:回転ナデ、底:回転ナデのちナデ	3	3	灰	灰	1	良	墨書 不明
287	C13 土器溜り01	甕	(26.2)		(19.5)	口:回転ナデ、体:タタキのち回転ナデ・タタキ・カキメ	口:回転ナデ、体:タタキ	3	-	褐灰	褐灰	2	良	
288	E11 SK05	坏A	12.7	8.8	3.7	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	10	12	赤灰	赤灰	4	良	
289	E11 SK05	坏A	(12.4)	8.2	4.1	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	1	10	浅黄橙	灰	3	不良	
290	E11 SK05	坏A	(12.2)	3.5	7.8	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底:回転ナデ	4	6	暗灰	暗灰	3	良	
291	E11 SK05	坏A	13.0	8.9	3.4	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	6	8	灰白	灰白	2	不良	
292	E11 SK05	坏A	14.2	10.6	3.6	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	6	12	黄橙	灰白	2	良	底部:橙色
293	E13 SK10	坏蓋	14.0		(1.2)	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラケズリのち回転ナデ	口～天:回転ナデ	5	4	灰	灰	2	良	
294	F13 SK10	坏蓋	(17.1)		(2.2)	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～体:回転ナデ、天:回転ナデのちナデ	2	2	灰	灰	3	良	
295	E13 SK10	坏A		(8.5)	(2.3)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	体～底:回転ナデ	-	2	褐灰	褐灰	2	良	墨書「公主口」
296	F13 SK10	坏A	(13.8)	(8.8)	3.5	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	3	4	灰白	灰白	2	不良	
297	E13 SK10	坏A	11.8	8.3	3.1	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り	口～底:回転ナデ	4	7	褐灰	褐灰	4	良	
298	E13 SK10	坏A	(12.8)	(8.1)	3.2	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	4	5	灰	灰	4	良	外面底部:スノコ痕あり
299	E13 SK10	坏B	(13.6)	10.9	3.6	口～体:回転ナデ、底:ヘラ切りのちナデ	口～体:回転ナデ、底:ヘラナデ	5	6	灰白	灰白	1	良	
300	E13 SK10	長頸瓶	(5.4)		(4.6)	口～頸:回転ナデ・ヘラ描沈線(2)	口～頸:回転ナデ	2	-	褐灰	褐灰	2	良	
301	D27 SD38	大甕	33.1		56.8	口:波状文、体:タタキ	口:ハケメ、体:タタキ	11	11	灰	灰	2	良	
302	D12 SE04	坏蓋	16.6		2.8	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラケズリ・回転ナデ	口～天:回転ナデ	10	3	灰	灰	2	良	
303	D12 SE04	坏蓋	(14.2)		(1.2)	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラ切りのちナデ・回転ヘラケズリ	口～天:回転ナデ	3	3	灰	灰	2	良	

第1節 小矢戸地区の遺物

304	D12 SE04	坏蓋	16.2		(1.8)	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラ切りのち回転ナデ・回転ヘラケズリ	口～天:回転ナデ	5	3	灰	灰	2	良	
305	D12 SE04	坏A		8.3	(2.5)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	体～底:回転ナデ	-	12	灰	灰白	2	良	外面底部:墨痕(転用硯)
306	D12 SE04	坏A		(4.1)	(1.8)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	体～底:回転ナデ	-	4	褐灰	褐灰	2	良	
307	D12 SE04	坏A	(12.7)	(9.2)	2.8	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	3	3	灰	灰	2	良	
308	D12 SE04	坏A	(12.9)	8.6	3.3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	3	6	灰白	灰白	4	良	墨書「成口」
309	D12 SE04	坏A	(13.0)	8.8	3.0	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	3	7	黄灰	黄灰	2	良	墨書「酒」
310	D12 SE04	坏A	(12.5)	8.1	2.9	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	2	8	灰	灰	2	良	墨書「酒」カ
311	D12 SE04	坏A	(12.8)	8.0	2.6	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	4	5	灰	灰	2	良	墨書「口吉」、内面底部 転用硯
312	D12 SE04	坏A	(14.8)	11.1	2.8	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底:回転ナデ	3	6	黄灰	黄灰	2	不良	墨書 不明
313	D12 SE04	坏A	12.3	11.4	3.8	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～体:回転ナデ、底:回転ナデのちナデ	6	12	灰白	浅黄	2	不良	
314	D12 SE04	坏B		10.3	(1.4)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ・回転ナデ	体～底:回転ナデ	-	12	灰	灰	4	良	外面底部:墨痕(転用硯)
315	D12 SE04	皿	(15.2)	12.2	2.4	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	4	5	灰	灰	1	良	
316	D12 SE04	高坏			(8.0)	脚:回転ナデ	坏底:ナデ、脚:回転ナデ	-	-	灰	灰	2	良	
317	B3 SB02 P01	坏A	(14.6)	(9.0)	3.3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り	口～底:回転ナデ	1	3	黄灰	黄灰	2	良	
318	B4 SB02 P09	坏A	(14.3)	(10.0)	3.1	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り	口～底:回転ナデ	1	2	黄灰	黄灰	2	良	墨書「十」記号
319	B4 SB02 P09	皿	(16.4)	(12.7)	2.6	口～体:回転ナデ・回転ヘラナデ、底:回転ヘラ切り	口～底:回転ナデ	1	1	灰	灰	1	良	
320	B4 SB02 P06	碗	12.7		(3.4)	口～体:回転ナデ	口～体:回転ナデ	7	-	灰	灰	2	良	
321	C4 SB04 P01	盤		(17.8)	(1.5)	底:回転ヘラ切りのちナデ	底:回転ナデ	-	1	灰	灰	2	良	
322	C5 SB05 P07	坏A	(14.3)	(9.2)	3.6	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り	口～底:回転ナデ	-	2	灰	灰	2	良	外面底部:スス付着カ
323	D6 SB08 P10	皿	17.2	14.7	2.7	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～体:回転ナデ、底:回転ナデのちナデ	11	11	黄灰	黄灰	4	良	墨書「酒富」
324	D6 SB08 P10	皿	16.4	13.1	2.3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	11	11	褐灰	褐灰	4	良	墨書「南」
325	E7 SB10 P04	坏蓋	(18.6)		(2.3)	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラケズリのち回転ナデ	口～体:回転ナデ、天:回転ナデのちナデ	-	1	暗灰	暗灰	2	良	
326	E7 SB10 P04	坏A	(17.9)	(15.0)	2.4	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	2	2	黄灰	黄灰	1	良	
327	E7 SB10 P04	坏A	16.2	14.0	2.2	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～体:回転ナデ、底:回転ナデのちナデ	5	7	褐灰	褐灰	1	良	
328	D7 SB11 P04	坏蓋	(17.6)		(2.1)	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラケズリのち回転ナデ	口～体:回転ナデ、天:回転ナデのちナデ	-	2	灰	灰	2	良	
329	D7 SB11 P03	碗		6.7	(5.2)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ・回転ナデ	体～底:回転ナデ	-	12	灰	灰	2	良	外面底部:自然釉
330	B9 SB14 P10	坏A		(11.0)	(1.3)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り	体～底:回転ナデ	-	1	黄灰	黄灰	2	良	墨書「口吉」
331	B8 SB14 P18	坏A		(9.4)	(2.0)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	体～底:回転ナデ	-	3	灰	灰	2	良	墨書「伊永」
332	B8 SB14 P17	皿	(16.0)	(13.6)	2.3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	2	2	灰	灰	2	良	
333	E12 SB19 P13	坏A	12.2	8.0	3.0	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ・回転ヘラケズリのち回転ナデ	口～底:回転ナデ	3	4	灰	灰	1	良	
334	E14 SB20 P03	坏蓋	(13.4)		(3.1)	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラ切りのち回転ナデ・回転ナデ	口～体:回転ナデ、天:回転ナデのちナデ	3	1	灰	灰	2	良	二次焼成の痕跡あり
335	E15 SB20 P09	坏A	(13.1)	7.2	3.2	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切り	口～底:回転ナデ	4	6	灰	灰	3	良	
336	E15 SB20 P04	坏A		(9.8)	(3.3)	体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	体～底:回転ナデ	-	-	灰	灰	3	良	墨書「伊」
337	E14 SB20 P03	皿	(16.1)	13.3	2.5	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	2	10	灰	灰	1	良	
338	A16 SB29 P07	坏蓋	(17.0)		(2.0)	口～体:回転ナデ、天:回転ヘラケズリのち回転ナデ	口～天:回転ナデ	-	1	灰	灰	4	良	内面:天井部墨痕あり
339	B9 SP119	坏蓋	(15.5)	(9.0)	(2.6)	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	1	2	灰白	灰白	2	不良	
340	B22 SP867	坏H	(11.6)		(3.5)	口:回転ナデ、体:回転ヘラケズリのちナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	4	4	灰	灰	2	良	
341	D6 SP11	坏A	(11.5)	8.8	3.3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底:回転ナデ	3	5	灰	灰	2	良	
342	D6 SP61	坏A	11.8	(8.2)	2.8	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	5	3	灰	灰	3	良	
343	C13 SP06	坏A	(14.4)	(8.8)	3.3	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～体:回転ナデ、底:回転ナデのちナデ	2	4	灰	灰	2	不良	
344	D13 SP327	坏A	13.5	9.0	3.6	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	9	12	黄灰	黄灰	2	良	
345	C13 SP328	坏B	10.4	6.4	4.2	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	10	8	暗灰	灰	2	良	
346	B7 SP84	碗	(15.0)	7.6	5.4	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ・回転ナデ	口～体:回転ナデ、底:回転ナデのちナデ	4	6	灰	灰	2	良	高台付
347	D4 SP72	皿	(14.5)	11.2	2.1	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	4	6	灰	灰	2	良	
348	C27 SP125	皿	16.2	14.0	2.4	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底:回転ナデ	12	12	灰	灰	2	良	
349	B23 SP861	直口壺	9.8	6.3	6.9	口～体:回転ナデ、底:回転ヘラ切りのちナデ	口～底:回転ナデ	6	10	黒褐	黒褐	2	良	
350	C9 SP50	台付壺		6.4	(4.7)	体:回転ヘラケズリ・回転ヘラナデ、底:回転ヘラ切りのち回転ナデ	体～底:回転ナデ	-	8	灰	灰	2	良	

3 中世の土器・陶磁器

(1) 土師質土器 (第 85・86 図、図版第 54～57)

1) 構成と分布

中世の土師質土器は、図化できたもので 150 点余りが出土した。器種はすべて皿で、9～10 cm 大の小皿と 14～16 cm 大の大皿に分けられ、数量比率はおおむね 4：6 である。この傾向は、一括廃棄と考えられる土器溜まり 02 でも同様の傾向が認められ、本遺跡での土師質皿の使用方法を知る上で一つの手掛りとなりうると考えられる。

その集中区は大きく 4 か所あるが、そのうち土器溜まり 02 を含む B・C 20～22 で約 47%、SK 33 を含む A・B 24・25 で約 15% が出土しその大半を占め、E 8・9 と F18・19 に若干の集中区が認められる。中世陶磁器の分布が、A～F 6～13 に集中するそれと大きく異なる。

2) 分類と傾向

分布状況でも述べたとおり、まとめて出土したものが大半を占め、時期が近接すると考えられるものが多いが、その特徴から分類を行うと次のようになる。

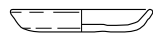





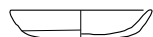

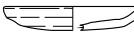
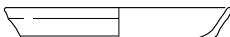


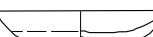
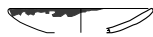

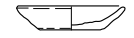
A 類：平らな底部を持つ手づくね整形のもの

- a：内外面共に明確な屈曲をもって立ち上がるもの
 - 1：屈曲部から口端部にかけて挟みナデ回すもの
 - 2：外面から抑え気味にナデ、僅かに外反形状を呈するもの
 - 3：外面から抑え気味にナデ、下部に屈曲を有するもの
 - 4：口端部外面に幅の狭い面を有するもの
- b：狭い底部から斜めに直線的に立ち上がり、口端部の仕上げナデにより端部外面に面を有する。
- c：底部から内湾気味に立ち上がり、身込みが深く、屈曲部から口縁部にかけて挟みナデ回すもの

B 類：底部に丸みを持つ手づくね整形のもの

- a：口縁部を 1.5～2 cm 挟み 1 周ナデ回すもの
 - 1：外面ナデ下部に僅かな段差が付くもの
 - 2：外面に段差が見られないもの
- b：緩やかに立ち上がり、ナデ回した後、口端部のみをナデ回して口端部を整形し、口端部外面に幅の狭い面を有するもの
- c：僅かに内湾気味に立ち上げ、上下 2 段をナデ回すもの
- d：口を強く外側から押さえながらナデ回し、僅かに外反気味に立ち上がるもの
- e：立ち上がり下部外面を強く押さえ、明確な屈曲を有するもの
- f：底部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる身込みが浅いもの
- g：内面底部付近までナデ回したもの
 - 1：口端部が薄くなるもの
 - 2：口端部が丸みを帯びるもの

C 類：糸切底 (86～88) を有するロクロ整形のもの

Aa1	
Aa2	
Aa3	
Aa4	
Ab	
Ac	
Ba1	
Ba2	
Bb	
Bc	
Bd	
Be	
Bg1	
Bg2	
Bf	
C	

土師質土器の分類

以上の中で最も多いのはBa1類で全体の約26%、Aa1類が約14%、Ac類が約10%で、これらで全体の半数を占める。遺構別では、58点出土した土器溜まり02では、Ba1類が約38%、Aa1類が約27%、Ac類が約20%で大半がこのタイプに集約される。それ以外ではBe類とBc類が2点ずつある他、Aa2類、Aa3類、Ba2類、Ad類が各1点に過ぎないことから、この土器溜まりが、短期に使用し、一括廃棄された結果である可能性が高い。深みのある椀に近い形状を持つAc類が多く含まれているのもこの遺構の特徴といえる。同様に土器溜まり状態で検出されたSK33では13点が出土し、Ba1類が2点とBa2類が4点、Bc類が5点と、Aa3類とBb類が各1点である。Ba類とBc類2種類に集中し、Bc類が多い点が特徴である。Ba類は、永平寺町諏訪間興行寺遺跡のⅡF類とほぼ同時期と考えられ、13世紀末～14世紀初頭段階に位置づけられる。一方、Bc類の特徴である二段ナデは、12世紀代に遡る古い技法の影響を残すもので、これらが共存することから、SK33は土器溜まり02より一段階古い13世紀後半代と想定することができる。また、SK33に隣接する掘立柱建物SB32の柱穴内から出土したものは、Ba類1点が4点、Ba2類が2点、Bc類が2点で、SK33とは異なりBa類がやや多い傾向はあるが、ほぼ同時期に存在していたことを示唆し、SK33と有機的に関係していた可能性が高い。土器溜まり02に近い土器溜まり03では、Aa1類が4点、Bc類が2点、Aa2類が1点で、Aa類を主にBc類が混ざる形となり、平底A類が主体である点で前2者と異なる。また、器種構成で見ると、土器溜まり02では大皿の比率が高く、全体の約65%を占めているのに対し、SK33では逆に小皿が約77%と多く、土器溜まり03ではすべて大皿で、3遺構で大きく異なっていることが分かる。

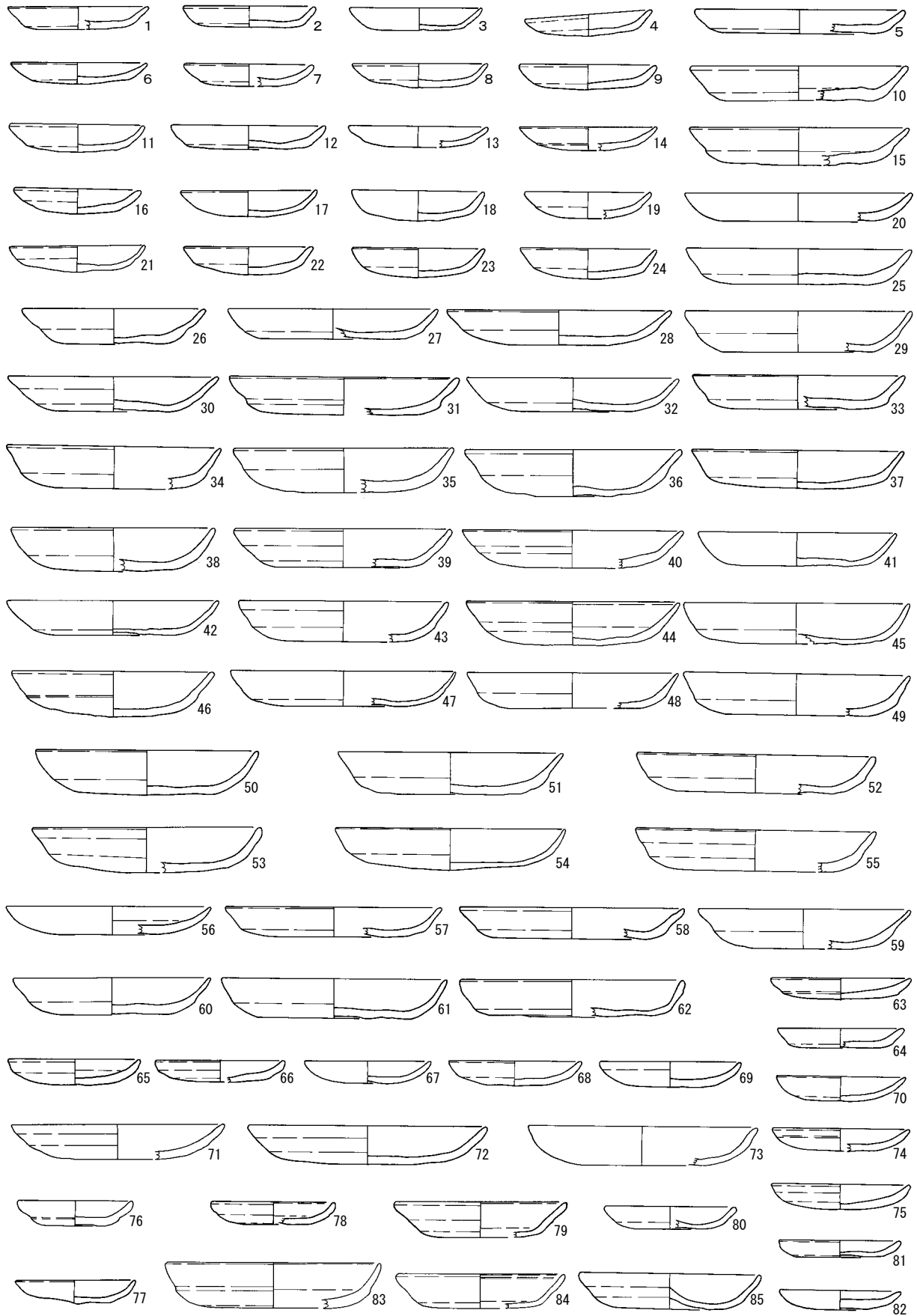
表土や包含層が主であるが、比較的集中して出土したE8・9では、Ba2類が5点で最も多く、Aa4類が3点、Bg1類とAb類が各2点で、Bf類が1点であった。この地区では数は少ないが、他地区で出土していないタイプのものが見られるという特徴があり、Aa4類が4点中3点、Bg1類とBf類はこの地区に限られる。Bg類は15世紀前半代、Ab類は15世紀後半代に位置づけられることから、この地区は、比較的新しい時期に利用されていた可能性が高い。E8のSE02から出土した76は、口径8cmのやや小ぶりの皿で、丁寧に作られたいわゆる白かわらけで、井戸祭祀に使用されたと考えられる。

灯芯油痕を残すものは2点(112・116)のみで、このうち116は型押し整形された薄手のもので、口縁部に広く油痕を残し、灯明皿として恒常的に使用されたと考えられる。整形技法などから、近世に属するものである。112は内面を中心とした1か所に僅かな痕跡が残るに過ぎず、恒常的に灯明皿として使用されたものではなく、一時的に転用された可能性が高い。

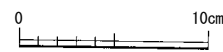
C類は3点のみで12世紀代の所産と考えられる。86と87は底部のみで器形は不明である。88は、良質のいわゆる白かわらけだが、包含層出土であるため用途は明らかではない。

3) 小結

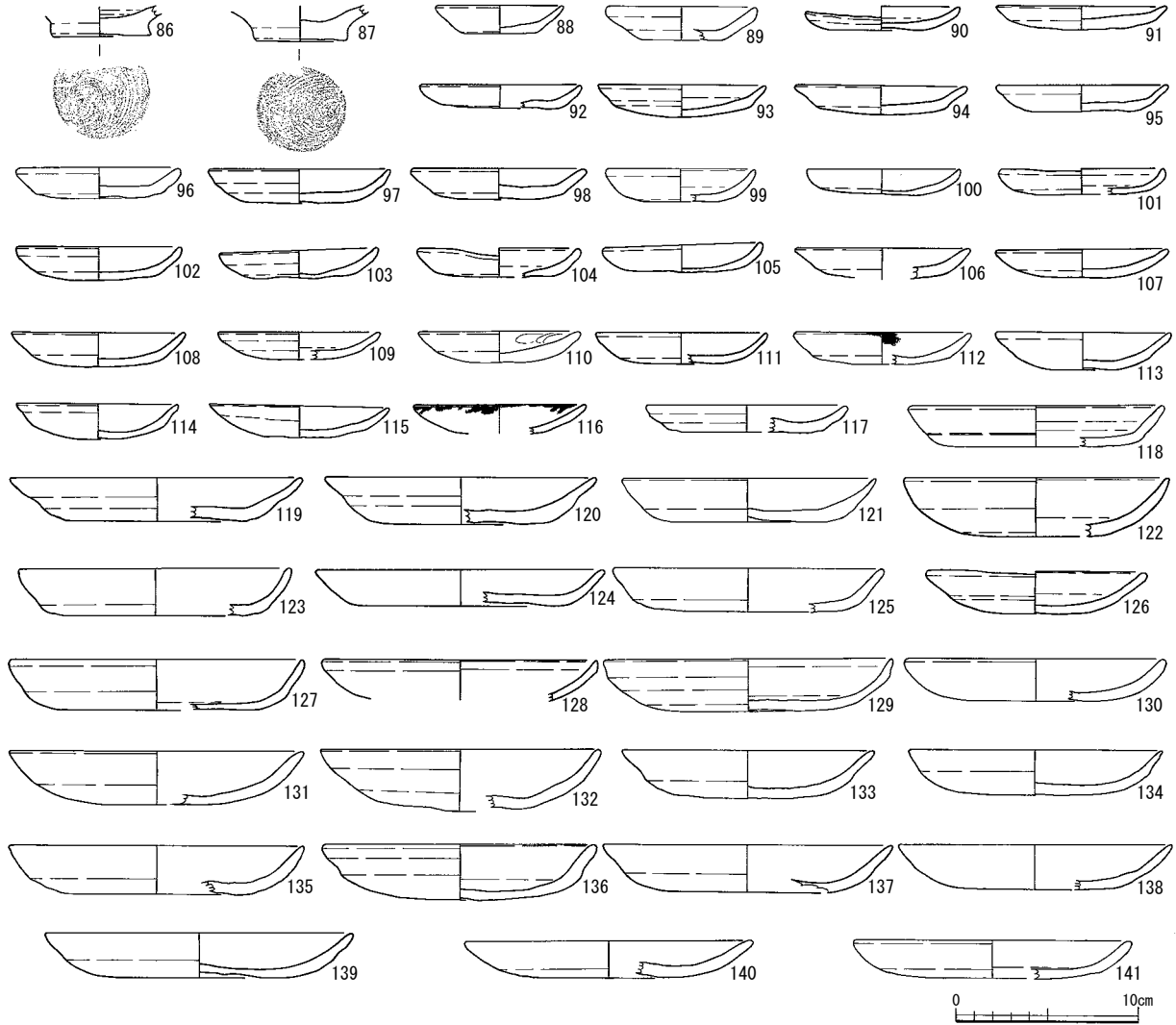
土師質土器の大半が、一括廃棄と考えられる土器溜まり遺構から出土したもので、大皿と小皿が同時に出土している場合が多いことから、13世紀代後半から14世紀初頭のセット関係を知る良好な資料といえる。また、大皿と小皿の比率が遺構により異なっていたことで、土師質土器の使用方法が、時として異なっていた可能性を示し、食膳具としての土師質土器の使用方法を考える上で貴重な資料といえる。一括廃棄中心であることから、これらが何らかの宴に使用されたことを示し、本遺跡が13世紀～14世紀初頭段階では単なる農村集落ではなかったことを暗示している。また、地区により、時期差があることも分かったが、一方で、他の中世陶磁器類と分布も時期もあまり重ならない傾向があり、このことをもって、一概に遺跡内の土地利用を推測することは難しいと言わざるを得ない。



第85図 土師質土器 (1) (縮尺1/4)



第1節 小矢戸地区の遺物



第86図 土師質土器（2）（縮尺1/4）

第4表 土師質土器観察表（1）

※ 法量はcm

番号	出土地	器種	口径	底径	器高	調整/施文		残存率/12		色調		胎土	焼成	分類	備考
						外面	内面	口縁部	底部	外面	内面				
1	B21 土器溜り02	皿	9.8	(7.5)	1.8	口~体:回しナデ	体:回しナデ、底:ナデ	7	6	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1	良	Aa1	
2	B21 土器溜り02	皿	(9.2)	7.8	1.5	口:回しナデ	口~体:回しナデ	6	6	浅黄橙	浅黄橙	1	良	Aa1	摩滅顕著
3	B20 土器溜り02	皿	(9.8)	5.4	1.6	口~体:回しナデか	口~体:回しナデか	3	3	浅黄橙	浅黄橙	1	良	Aa1	剥落顕著、口縁部薄い
4	B21 土器溜り02	皿	9.0	6.0	1.9	口:回しナデ、体~底:ナデ	口:回しナデ、体~底:ナデか	10	12	橙	橙	1	良	Ba1	表面風化顕著、内面摩滅、身込み浅い
5	C26 SP29	皿	(14.8)	10.8	1.7	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	3		橙	橙	1	良	Aa1	
6	B21 土器溜り02	皿	9.4	7.0	1.7			12	12	橙	橙	1	良	Ba1	剥落顕著、身込み浅い
7	B21 土器溜り02	皿	(8.9)	(5.4)	1.6	口:回しナデ	口:回しナデ、体~底:不明	5		にぶい 橙	にぶい 橙	1	良	Ba1	
8	B21 土器溜り02	皿	9.6	7.1	2.0	口:回しナデ	口:回しナデ	9	11	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1	良	Ba1	剥落顕著
9	B20 土器溜り02	皿	(9.6)	7.6	1.8	口:回しナデ	口:回しナデ	5	5	にぶい 橙	にぶい 橙	1	良	Aa1	摩滅顕著
10	B20・21 土器溜り02	皿	(15.4)	(10.0)	2.5	口:回しナデ	口:回しナデ	4		淡黄	灰白	1	良	Aa3	剥落顕著

第5章 遺物

番号	出土地	器種	口径	底径	器高	調整/施文		残存率/12		色調		胎土	焼成	分類	備考
						外面	内面	口縁部	底部	外面	内面				
11	B21 土器溜り02	皿	9.2	7.2	2.0	口:回しナデ	口:回しナデ、体~底:ナデ	12	12	にぶい黄橙	灰白	1	良	Ad	外面剥落顕著
12	B21 土器溜り02	皿	(10.8)	(8.0)	1.7	口~体:回しナデ	口~体:ナデ、底:ナデ	3	3	橙	橙	1	良	Ba1	
13	B20 土器溜り02	皿	(10.0)	(7.8)	1.5	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	4		浅黄橙	浅黄橙	1	良	Ba1	
14	B21 土器溜り02	皿	(9.6)	(7.2)	1.7	口:回しナデ	口:回しナデ、底:ナデ	5		橙	橙	1	良	Ba1	剥落顕著、身込み浅い
15	B21 土器溜り02	皿	(15.4)	(10.0)	2.5	口:回しナデ、底:ナデ	口:回しナデ、底:ナデ	4		浅黄橙	浅黄橙	1	良	Ba1	摩滅顕著
16	B20・21 土器溜り02	皿	(8.8)	(5.0)	1.8	口:回しナデ、体~底:ナデ	口:回しナデ、体~底:ナデ	4	7	にぶい橙	にぶい橙	1	良	Ba2	剥落顕著
17	B21 土器溜り02	皿	9.5	7.5	1.8	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ	7	12	にぶい橙	にぶい橙	1	良	Ba1	剥落・摩滅顕著
18	B20 土器溜り02	皿	9.2	7.5	2.1	口:回しナデ	口:回しナデ	11	12	にぶい橙	浅黄橙	1	良	Ba1	外面剥落
19	B20・21 土器溜り02	皿	(9.0)	(7.0)	2.0	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	4		浅黄橙	浅黄橙	1	良	Ba1	
20	B20 土器溜り02	皿	(16.0)	(14.4)	2.0	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ	3		淡黄	灰白	1	良	Aa1	表面剥落顕著
21	B21 土器溜り02	皿	9.4	7.6	1.9	口:回しナデ	口:回しナデ、体~底:ナデか	12	12	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1	良	Ba1	
22	B21 土器溜り02	皿	9.0	7.6	1.8	口:回しナデ	口:回しナデ、体~底:ナデ	12	12	橙	橙	1	良	Ba1	
23	B20・21 土器溜り02	皿	(9.2)	7.8	2.1			5	5	橙	橙	1	良	Ba1	表面剥落顕著
24	B20 土器溜り02	皿	9.4	7.8	2.1	口:回しナデ、体~底:指押さえ	口:回しナデ	7	8	橙	にぶい橙	1	良	Ba1	
25	B20 土器溜り02	皿	(15.8)	11.0	2.6	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	1	2	浅黄橙	浅黄橙	1	良	Aa1	
26	B21 土器溜り02	皿	(13.0)	7.0	2.6	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ、底:ナデか	2	4	浅黄	浅黄橙	1	良	Aa1	
27	B20・21 土器溜り02	皿	(14.8)	(10.2)	2.2	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	2	2	浅黄橙	灰白	1	良	Aa1	
28	B21 土器溜り02	皿	(16.0)	7.2	3.1	口~体:回しナデ、底:ナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	1	1	橙	黄橙	1	良	Aa1	
29	B20・21 土器溜り02	皿	(16.0)	(10.8)	2.9	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	3		淡黄	淡黄	1	良	Ba1	
30	B21 土器溜り02	皿	(14.8)	8.0	2.5	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	1	3	浅黄橙	浅黄橙	1	良	Aa1	
31	B20 土器溜り02	皿	(16.2)	(11.8)	2.7	口:回しナデ	口:回しナデ、体~底:ナデ	4		橙	黄橙	1	良	Be	剥落・風化顕著
32	B20・21 土器溜り02	皿	(15.0)	9.4	2.4	口~体:回しナデ、底:ナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	1	2	浅黄橙	橙	1	良	Ac	
33	B21 土器溜り02	皿	(14.8)	(10.8)	2.4	口~体:強い回しナデ	口~体:強い回しナデ、底:ナデ	2	2	浅黄橙	浅黄橙	1	良	Aa1	付着物多い
34	B21 土器溜り02	皿	(15.0)	(12.4)	(3.0)	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ	4		浅黄橙	浅黄橙	1	良	Bc	二段ナデか
35	B21 土器溜り02	皿	(15.5)	(10.0)	3.2	口:回しナデ、体~底:ナデ	口:回しナデ、体~底:ナデ	4		にぶい黄橙	にぶい黄橙	1	良	Ba1	摩滅顕著
36	B21 土器溜り02	皿	(14.2)	8.4	3.4	口:つまみ回しナデ、体:回しナデ	口:回しナデ、底:ナデ	5	6	橙	浅黄橙	3	良	Ac	
37	B21 土器溜り02	皿	(14.8)	12.6	2.7	口:回しナデ	口:回しナデ	6	12	橙	橙	1	良	Aa2	摩滅顕著
38	B20・21 土器溜り02	皿	(14.2)	(7.6)	3.1	口:回しナデ	口:回しナデ、体~底:ナデ	4		橙	橙	1	良	Ba1	
39	B21 土器溜り02	皿	(15.2)	(9.6)	2.8	口:回しナデ	口:回しナデ、底:ナデ	4		浅黄橙	にぶい黄橙	1	良	Aa1	磨滅顕著
40	B20 土器溜り02	皿	(15.2)	(10.2)	2.7	口:回しナデ、体~底:ナデ	口:回しナデ、体~底:ナデ	4		橙	橙	1	良	Ba1	摩滅顕著
41	B20・21 土器溜り02	皿	(14.0)	(9.6)	2.4	口~体:回しナデ、底:ナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	2	6	浅黄橙	浅黄橙	1	良	Aa1	
42	B20・21 土器溜り02	皿	(15.0)	8.4	2.5		口~体:回しナデ	2	2	橙	橙	1	良	Aa1	剥落顕著
43	B20 土器溜り02	皿	(14.8)	(12.0)	(2.9)	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	2		浅黄橙	浅黄橙	1	良	Bc	二段ナデ

第1節 小矢戸地区の遺物

番号	出土地	器種	口径	底径	器高	調整/施文		残存率/12		色調		胎土	焼成	分類	備考
						外面	内面	口縁部	底部	外面	内面				
44	B21 土器溜り02	皿	(15.0)	9.2	3.1	口:回しナデ、体~底:指押さえ・ナデ	口:回しナデ、体~底:ナデ	4	5	にぶい 橙	橙	1	良	Ac	
45	B20 土器溜り02	皿	(15.8)	(11.4)	2.9	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	3	2	浅黄橙	浅黄橙	1	良	Ac	
46	B21 土器溜り02	皿	14.2	7.2	3.2	口:回しナデ、底:ナデか	口:回しナデ、底:ナデ	9	7	橙	橙	1	良	Ba1	
47	B20 土器溜り02	皿	(16.0)	(12.0)	2.5	口~体:回しナデ、底:ナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	2		橙	橙	1	良	Ac	全体摩滅
48	B21 土器溜り02	皿	(15.0)	(9.8)	2.5	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	1		橙	橙	1	良	Ac	
49	B20 土器溜り02	皿	(15.8)	(11.6)	2.9	体:回しナデ、	口~体:回しナデ、底:ナデ	3		浅黄橙	浅黄橙	1	良	Ac	外面調整体部:やや強い回しナデ
50	B20 土器溜り02	皿	(15.6)	(13.2)	3.2	口:回しナデ、底:ナデ	口:回しナデ、底:ナデ	7	7	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1	良	Ac	外面口縁部摩滅顕著
51	B21 土器溜り02	皿	(15.8)	11.0	3.0	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ	1	2	浅黄橙	明黄褐	1	良	Ac	表面剥落顕著
52	B21 土器溜り02	皿	(16.8)	12.0	2.7	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	2		淡黄	灰白	1	良	Aa1	
53	B21 土器溜り02	皿	(16.0)	(11.6)	3.4	口:回しナデ、底:ナデか	口:回しナデ、体~底:ナデ	7	5	にぶい 橙	にぶい 橙	1	良	Ba1	付着物多い、厚手
54	B20 土器溜り02	皿	(16.2)	14.2	3.0	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	5	5	橙	橙	1	良	Ba1	
55	B21 土器溜り02	皿	(16.9)	(10.8)	3.0	口:回しナデ	口:回しナデ、体~底:ナデ	4		浅黄橙	にぶい 橙	1	良	Ac	剥落顕著
56	C22 土器溜り03	皿	(14.0)	(8.0)	(1.7)	口~体:回しナデか	口~体:回しナデか、底:ナデ	3		浅黄橙	浅黄橙	1	良	Bc	風化顕著
57	C22 土器溜り03	皿	(15.0)	(11.4)	2.1			2		橙	橙	1	良	Aa2	全体摩滅
58	C22 土器溜り03	皿	(16.0)	(11.0)	(2.2)	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	4		橙	橙	1	良	Aa1	
59	C22 土器溜り03	皿	(15.0)	(12.0)	2.8	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	1		浅黄橙	浅黄橙	1	良	Ba1	
60	C22 土器溜り03	皿	(13.8)	8.0	2.6	口:つまみ回しナデ、体:回しナデ、底:ナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	3	6	浅黄橙	浅黄橙	1	良	Ac	
61	C22 土器溜り03	皿	(15.8)	11.0	2.8	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	2	3	橙	黄橙	1	良	Ac	内面に櫛状痕あり
62	C22 土器溜り03	皿	(15.8)	(11.8)	2.6	口:つまみ回しナデ、体:回しナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	1		浅黄橙	浅黄	1	良	Bc	二段ナデ
63	A25 SK33	皿	(9.8)	5.2	1.7	口:回しナデ	口:回しナデ、体~底:ナデ	4	4	にぶい 橙	浅黄橙	1	良	Aa3	
64	A25 SK33	皿	(9.0)	(5.6)	1.4	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	4	5	浅黄橙	浅黄橙	1	良	Ba1	良質
65	A25 SK33	皿	(9.2)	(5.8)	1.9	口:回しナデ、底:指押さえ	口:回しナデ、体~底:ナデ	5	4	淡黄	淡黄	1	良	Ba1	良質
66	A25 SK33	皿	(8.8)	(6.8)	1.6	口:つまみ回しナデ、体~底:ナデ	口:つまみ回しナデ、体~底:ナデ	5	5	にぶい 黄橙	灰黄褐	1	良	Bb	外面剥落顕著
67	A25 SK33	皿	(9.0)	3.0	1.6	口~体:回しナデ、底:ナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	5	6	浅黄橙	浅黄橙	1	良	Ba2	口縁部薄い
68	A25 SK33	皿	(9.4)	(4.4)	1.8	口:回しナデ	口:回しナデ、体~底:ナデ	4	5	灰白	灰白	1	良	Ba2	
69	A25 SK33	皿	(10.0)	(6.0)	1.8	口~体:つまみ回しナデ	口~体:つまみ回しナデ、底:ナデ	2	7	浅黄橙	浅黄橙	1	良	Ba2	
70	A25 SK33	皿	9.0	6.0	1.9	口:回しナデ	口:回しナデ、体~底:ナデ	11	12	にぶい 橙	浅黄橙	1	良	Ba2	内面に草織維状痕跡あり、良質
71	A25 SK33	皿	(15.0)	(11.4)	2.5	口~体:回しナデか、底:ナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	4		橙	橙	1	良	Bc	摩滅顕著
72	A25 SK33	皿	(16.8)	12.2	2.8	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	3	3	にぶい 黄橙	浅黄橙	1	良	Bc	底部内面色調:褐灰、二段ナデ
73	A25 SK33	皿	(16.0)	(10.6)	2.7	口~体:回しナデ、底:ナデか	口~体:回しナデ、底:ナデ	3		橙	橙	1	良	Bc	
74	A25 SK33	皿	(9.6)	(6.2)	1.6	口:回しナデ、底:ナデ	口:回しナデ、体~底:ナデ	6		にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1	良	Bc	二段ナデか
75	A25 SK33	皿	(9.6)	(8.0)	1.8	口:回しナデ、つまみナデ、体~底:指押さえ	口:回しナデ、体~底:ナデ	6	6	にぶい 黄橙	浅黄橙	1	良	Bc	二段ナデか、やや厚手
76	E8 SE02	皿	8.0	5.0	1.9	口:回しナデ	口:回しナデ、体~底:ナデ後回しナデ	8	8	にぶい 黄橙	灰白	1	良	Ab	良質、厚手、白かわらけ

第5章 遺物

番号	出土地	器種	口径	底径	器高	調整/施文		残存率/12		色調		胎土	焼成	分類	備考
						外面	内面	口縁部	底部	外面	内面				
77	E8 SE02	皿	8.5	7.0	1.8	口:回しナデ、体~底:指押さえ	口:回しナデ、体~底:回しナデ	6	6	にぶい 橙	にぶい 橙	1	良	Ba2	内面底部:ナデ後立上 がり回しナデ
78	B10 SR03	皿	(8.6)	(5.2)	1.6	口:回しナデ、底:指押さえ	口:回しナデ	2	4	浅黄橙	浅黄橙	1	良	Bb	
79	B10 SR03	皿	(12.1)	(9.9)	2.5	口:つまみ回しナデ・回しナ デ、底:ナデ	口:回しナデ、底:ナデ	3	3	浅黄橙	浅黄橙	1	良	Ab	口縁部薄い
80	D-E9 SE03	皿	(9.2)	(4.8)	1.6	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	3		橙	にぶい 黄橙	1	良	Aa3	良質
81	F23 SE12	皿	8.5	6.5	1.5	口:つまみ回しナデ、体~底: ナデ	口:回しナデ	11		橙	橙	1	良	Aa4	身込み浅い
82	E9 SR01	皿	8.6	6.4	1.4	口:回しナデ、底:指押さえ	口:回しナデ、底:ナデ	3	4	浅黄橙	浅黄橙	1	良	Bf	身込み浅い
83	B10 SR03	皿	(15.1)	(10.4)	3.2	口:回しナデ、底:指押さえ	口:回しナデ、底:ナデ	1	3	浅黄橙	にぶい 橙	1	良	Ba1	
84	B10 SR03	皿	(11.8)	(8.9)	2.5	口:回しナデ、底:ナデ	口:回しナデ、底:ナデ	2	4	浅黄橙	浅黄橙	1	良	Aa1	
85	C25 SE14	皿	(12.8)	(8.4)	(2.5)	口~体:回しナデ、底:指押 さえ	口~体:回しナデ、底:ナデ	3	3	浅黄橙	明赤褐	1	良	Bc	歪み大きい、身込み深 い
86	C11 SR01	皿	—	5.2	(1.7)	体:回転ナデ、底:回転糸切り			8	浅黄橙	浅黄橙	1	良	C	
87	C11 SR01	皿	—	4.7	(2.0)	体:回転ナデ、底:回転糸切り	体~底:回転ナデ		12	浅黄橙	浅黄橙	1	良	C	
88	D19 包含層	皿	7.0	4.4	1.6	口:回転ナデ、底:回転糸切り	口:回転ナデ、底:ナデ	12	12	灰白	灰白	1	良	C	良質、小型
89	E8 SP51	皿	(8.0)	(4.1)	1.9	口:回しナデ、底:指押さえ	口:回しナデ、底:ナデ	4	4	灰白	灰白	1	良	Ad	厚手、小型
90	E8 SP61	皿	8.5	5.0	1.8	口:つまみ回しナデ・回しナ デ、底:指押さえ	口:回しナデ、底:指押さえ	12	12	灰白	灰白	1	良	Ba2	
91	B26 SP43	皿	(9.4)	6.0	1.5	口:回しナデ	口:回しナデ、体~底:ナデ	5	5	灰	褐灰	1	良	Ba1	
92	E18 E列レ	皿	8.8	6.5	1.7	口:回しナデ、底:指押さえ	口:回しナデ、体~底:ナデ	10	3	褐灰	褐灰	1	良	Aa3	
93	B25 SP18	皿	(9.2)	4.4	1.8	口:回しナデ	口:回しナデ、体~底:ナデ	4	4	淡赤橙	淡赤橙	1	良	Ba1	
94	C26 SP29	皿	(9.4)	7.2	1.6	口:左回しナデ、体~底:指押 さえ	口:回しナデ、底:ナデ	5	5	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1	良	Bc	
95	C20 SR04	皿	9.3	6.0	1.6	口:回しナデ	口:回しナデ、底:ナデか	7	7	にぶい 橙	にぶい 橙	1	良	Aa2	剥落顕著
96	E8 表土	皿	(9.0)	(6.8)	1.7	口:回しナデ、底:指押さえ	口:左回しナデ、底:ナデ	3	6	灰白	灰白	1	良	Ba2	
97	B25 SP28	皿	(9.9)	5.8	1.9	口:はさみナデ	口:回しナデ、体~底:ナデ	4	4	にぶい 黄褐	にぶい 黄橙	1	良	Bc	二段ナデ、厚手
98	C26 SP29	皿	(9.4)	7.2	1.7	口:回しナデ、体~底:ナデ	口:回しナデ、体~底:ナデ	6	6	橙	橙	1	良	Ba1	厚手
99	D7 表土	皿	(8.2)	(5.0)	1.8	口:つまみ回しナデ・回しナ デ、底:指押さえ	口:回しナデ、	6	7	橙	にぶい 橙	1	良	Bb	
100	F19 包含層	皿	8.4	6.6	1.7	口:つまみナデ、体~底:回し ナデ	口:つまみナデ、体:回しナ デ、底:ナデ	11	12	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1	良	Bb	
101	E9 表土	皿	(9.0)	(7.5)	1.4	口:つまみ回しナデ・回しナ デ、底:指押さえ	口:回しナデ、底:ナデ	3	3	浅黄橙	浅黄橙	1	良	Aa4	
102	C21 SP435	皿	(9.0)	(7.0)	1.9	口:回しナデ	口:つまみ回しナデ、体~底: ナデ	4	12	淡黄	淡黄	1	良	Bb	
103	E8 SK07	皿	8.5	6.4	1.7	口:回しナデ、底:指押さえ	口:回しナデ、体~底:ナデ	11	12	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1	良	Ba2	内面口~体:黄灰色
104	E9 表土	皿	(8.8)	(6.4)	1.6	口:回しナデ、底:指押さえ	口:回しナデ、底:ナデ	5	4	浅黄橙	浅黄橙	1	良	Ba2	
105	F18 包含層	皿	8.7	6.0	1.7	口:回しナデ	口:回しナデ、底:回しナデの ちナデ	12	12	浅黄橙	にぶい 橙	1	良	Ba1	土器左回し
106	B25 SP16	皿	(9.5)	(5.8)	1.7	口:回しナデ	口:回しナデ、体~底:ナデ	7		橙	にぶい 黄橙	1	良	Bc	外面口縁部:二段ナデ
107	B25 SP28	皿	9.4	6.9	1.8	口:回しナデ、体~底:指押 さえ	口:回しナデ、体~底:ナデ	11	12	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1	良	Bg2	
108	C26 SP29	皿	(9.4)	7.4	1.9	口:回しナデ、体~底:ナデ	口:回しナデ、体~底:ナデ	6	6	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	1	良	Ba2	底部:6条沈線あり
109	C22 包含層	皿	(8.8)	(5.0)	1.6	口:回しナデ	口:回しナデ、体~底:ナデ	4		黄橙	黄橙	1	良	Ba2	摩滅剥落、薄手、小型

第1節 小矢戸地区の遺物

番号	出土地	器種	口径	底径	器高	調整/施文		残存率/12		色調		胎土	焼成	分類	備考
						外面	内面	口縁部	底部	外面	内面				
110	C11 C列ト	皿	(8.8)	(7.1)	1.7	口:回しナデ、底:指押さえ	口:回しナデ、底:指押さえ後ナデ	5	7	浅黄橙	灰黄	1	良	Bd	厚手
111	B25 SP25	皿	(9.4)	(4.9)	1.7	口:回しナデ	口:回しナデ、体~底:ナデ	4		灰白	浅黄橙	1	良	Ba2	
112	C10 SR03	皿	(9.6)	(7.2)	1.8	口:回しナデ、底:指押さえ	口:回しナデ、底:ナデ	2	2	灰白	灰白	1	良	Ba1	灯芯油痕あり
113	C26 SP29	皿	(9.6)	(3.4)	2.1	口:回しナデ	口:回しナデ、体~底:ナデ	4	4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1	良	Ba2	
114	C21 包含層	皿	(8.8)	(5.8)	3.0	口~体:つまみナデ	口~体:つまみナデ、底:ナデ	4	4	淡黄	浅黄	1	良	Bd	内面剥落顕著
115	C26 SP29	皿	9.9	4.4	2.3	口:回しナデ	口:回しナデ、体~底:ナデ	8	12	橙	橙	1	良	Bd	土器左回しナデ
116	E29 包含層	皿	(9.4)	—	(1.6)	口:回しナデ	口:回しナデ、体~底:ナデ	5		橙	橙	1	良	Bg2	口縁部:灯芯油痕あり、型押し
117	C21 SP799	皿	(11.0)	(8.4)	1.5	口:つまみ回しナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	4		黄灰	黄灰	1	良	Ba1	厚手
118	C11 SR01	皿	(13.8)	2.3	(10.9)	口:回しナデ、底:指押さえ	口:回しナデ、底:ナデ	1	2	橙	橙	1	良	Aa1	身込み押さえ顕著
119	C21 SP431	皿	(16.0)	(11.6)	2.4	口~体:回しナデ、底:ナデか	口~体:回しナデ、底:ナデ	3		浅黄橙	橙	1	良	Bc	摩滅顕著 二段ナデ
120	C20 SP445	皿	(15.0)	(9.6)	2.6	口~体:回しナデ、底:ナデか	口~体:回しナデ、底:ナデ	4		浅黄橙	にぶい橙	1	良	Be	
121	E9 表土	皿	(14.0)	(9.0)	2.4	口:回しナデ、底:指押さえ	口:回しナデ、底:ナデ	1	2	黄橙	黄橙	1	良	Bg1	
122	E9 表土	皿	(14.4)	(11.1)	3.2	口:回しナデ、底:ナデ	口:回しナデ、底:ナデ	2	3	灰白	灰白	1	良	Bg1	摩滅顕著
123	C20 SR04	皿	(14.8)	(10.0)	2.6	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	3		浅黄橙	灰黄	1	良	Ac	
124	B12 表土	皿	(16.0)	(11.8)	2.0	口~体:回しナデか	口~体:回しナデか	2		灰白	浅黄橙	1	良	Aa1	摩滅顕著
125	C22 包含層	皿	(14.8)	(12.4)	2.5	口~体:回しナデ、底:ナデか	口~体:回しナデ、底:ナデ	3		浅黄橙	橙	1	良	Aa1	摩滅顕著
126	E9 表土	皿	(12.0)	(6.5)	2.4	口:つまみ回しナデ・回しナデ、底:指押さえ	口:回しナデ、底:ナデ	2	3	浅黄橙	浅黄橙	1	良	Aa4	
127	C22 SP27	皿	(16.0)	(11.0)	2.8	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	4		浅黄橙	浅黄橙	3	良	Ac	摩滅顕著、薄手、身込み深い
128	E9 表土	皿	(15.0)		(2.2)	口:つまみナデ・回しナデ	口:回しナデ	2		橙	橙	1	良	Aa4	
129	C9 SP101	皿	(15.8)	(11.6)	2.9	口:回しナデ(二段ナデ)、底:指押さえ	口:回しナデ、底:ナデ	5	5	橙	橙	1	良	Bc	
130	C11 表土	皿	(14.0)	(7.8)	2.4	口:回しナデ、底:ナデ	口:回しナデ、底:ナデ	2	3	黄橙	黄橙	1	良	Ba1	
131	B25 SP31	皿	(16.0)	(6.3)	3.0	口:回しナデ	口:回しナデ、体~底:ナデ	4	3	にぶい橙	にぶい橙	1	良	Ba1	底部:黒変
132	C26 SP29	皿	15.4	7.0	3.6	口:回しナデ、底:指押さえのちナデ	口:回しナデ、体~底:ナデ	9	8	にぶい黄橙	にぶい橙	1	良	Ba1	
133	C22 包含層	皿	(14.0)	(6.4)	2.7	口~体:回しナデ、体:ナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	2	2	浅黄橙	浅黄橙	1	良	Aa2	
134	B21 包含層	皿	(13.8)	(7.8)	2.5	口~体:回しナデ、底:ナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	3	6	浅黄橙	浅黄橙	1	良	Bc	内面に草の繊維状の痕跡あり
135	B20 20列ト	皿	(16.0)	(14.0)	2.7	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	3		浅黄橙	浅黄橙	1	良	Ba1	表面剥落顕著
136	C26 SP29	皿	(15.0)	9.0	3.1	口:回しナデ、底:ナデ	口:回しナデ、底:ナデ	4	7	浅黄橙	浅黄橙	1	良	Bc	良質
137	C20 包含層	皿	(16.0)	(9.4)	(2.6)	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ、底:ナデ	3		浅黄橙	浅黄橙	1	良	Aa2	底部:剥落
138	B25 SP36	皿	(15.0)	(9.6)	2.4	口~体:回しナデ、底:ナデか	口~体:回しナデ、底:ナデ	3		灰白	灰白	1	良	Ba1	
139	C20 包含層	皿	(16.8)	(9.0)	2.5	口~体:回しナデ	口~体:回しナデ	2	4	浅黄橙	浅黄橙	1	良	Ba1	外面剥落顕著
140	B25 SP46	皿	(16.0)	(12.2)	2.1	口~体:回しナデ、底:ナデか	口~体:回しナデ、底:ナデ	3		浅黄橙	浅黄橙	1	良	Ba1	
141	C11 SR01	皿	(15.2)	2.1	(12.4)	口:回しナデ、底:指押さえのちナデ	口:回しナデ、底:ナデ	1	2	浅黄橙	浅黄橙	1	良	Bb	

(2) 陶器・陶磁器 (第 87～89 図、図版第 58～60)

1) 構成と分布

小矢戸地区から出土した陶磁器の内、図示した陶磁器は合計 56 点であり、器種の組成を第 5 表に示した。国産陶器では、古代に灰釉陶器、中世に常滑焼・瓷器系中世陶器 (山茶碗類)・古瀬戸製品・越前焼がある。舶来磁器は、白磁・青白磁・青磁・染付がある。

種別に分布状況を見ていくと、灰釉陶器は僅かながら点在している。中世陶磁器は、A～F 6～13 にかけて集中的に分布する傾向を示し、他では点在している。越前焼は全域に分布する傾向にあるが、他の中世陶器は出土域に限られる。常滑焼は B～F 7～9、山茶碗は B・C 9・10、古瀬戸製品は A～C 9～11 の狭い範囲で出土した。白磁・青磁は、上記の遺物が集中する範囲からの出土がほとんどだが、他でも僅かながら点在している。

出土した遺物の評価にあたり、灰釉陶器は城ヶ谷和広氏の編年研究 (城ヶ谷 2010)、常滑焼は中野晴久氏の編年研究 (中野 2012)、山茶碗は藤澤良祐氏の編年研究 (藤澤 1994)、古瀬戸製品は藤澤良祐氏の編年研究 (藤澤 2008) を用いた。また、白磁・青磁は、太宰府の分類 (横田・森田 1978) と上田秀夫氏の分類 (上田 1982) を参照した。越前焼は小野正敏氏の分類 (小野 1983) と木村孝一郎氏の分類 (木村 2012) を参照した。

第 5 表 組成表

種別	器種	点数
灰釉陶器	碗	2
	瓶類	1
常滑焼	広口壺	6
	三筋壺	2
瓷器系 中世陶器	壺類	1
	山茶碗	2
古瀬戸 製品	折縁深皿	1
	花瓶	1
	卸皿	1
白磁	碗	7
	皿	1
青白磁	合子・蓋	1
青磁	碗	4
染付	碗	1
越前焼	甕	10
	壺	5
	片口鉢	1
	播鉢	9
合計		56

2) 陶磁器

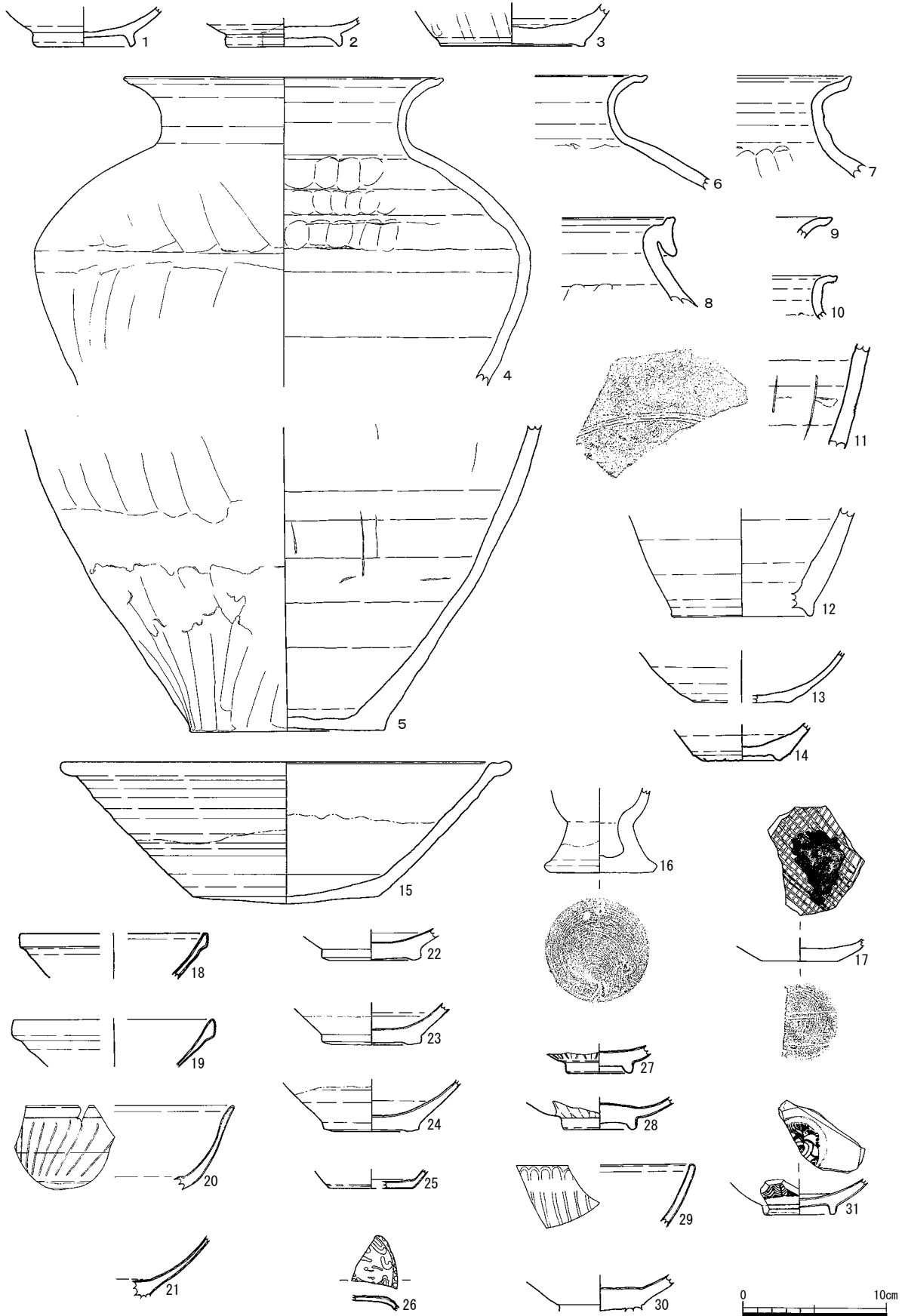
灰釉陶器 (1～3)

1・2 は碗である。共に付け高台で、断面形は三日月状である。底部外面にヘラ削り調整は認められない。2 は、底部外面中央に糸切痕が残り、1 は、指ナデにより糸切痕が消されている。釉薬は、1 には認められず、2 の外面にのみ認められる。施釉方法は、釉薬が外面のみに認められることから、ハケ塗りである。釉薬が垂れて高台まで達している。生産地は不明であるものの、猿投編年 O-53 号窯式併行期 (凡そ 10 世紀前半頃) に位置付けられる。

3 は、瓶類である。胎土に不純物がなく緻密であることから、灰釉陶器と判断した。高台は、高さの低い付け高台である。体部外面にはヘラ削り調整が施され、底部外面には糸切痕が認められる。体部外面には、自然釉の剥ぎ取りが認められる。

常滑焼 (4～11)

4～9 は広口壺である。4・5 は、接合しないが同一個体である。口縁部はヨコ方向の丁寧な指ナデ調整、肩部外面は斜め方向のヘラナデ調整、体部外面はタテ方向のヘラナデ調整と一部にヨコ方向のヘラナデ調整が施されている。4・6 は、頸部が直立気味に立ち上がり、口縁部にかけて緩やかに開く。4・6・9 は、口縁部内側に浅い窪みが認められる。7 は、頸部が内傾して立ち上がり、口縁部にかけて強く屈曲して開く。端部は、上方へやや摘み上げられている。8 は、頸部が内傾して立ち上がる。口縁部は、「N」字状を呈しており、縁帯を形成する。10・11 は、包含層ではあるものの C 19 から出土しており、同一個体である可能性が高い。11 は、複線三筋壺である。複線三筋壺は、越前窯の窯跡から出土していないことから、常滑焼と判断したが越前焼の可能性もある。10 は、頸部が直立して立ち上がり、口縁部にかけて水平に開く。端部に面が形成され、内側には浅い窪みが認められる。



第87図 陶器・陶磁器 (1) (縮尺1/4)

中野編年によれば、4～6・9は中野2型式、7は中野3型式、8は中野7～8型式の過渡期にそれぞれ位置付けられる。年代観は、4～7・9～11が12世紀後半、8が14世紀中葉である。

瓷器系中世陶器 (12～14)

12は、壺類である。胎土に礫などの不純物が混じり粗雑であることから、中世陶器と判断した。体部外面は、ヘラ削り調整が施されている。高台は付け高台で、端部に砂粒痕が認められる。

13・14は、山茶碗である。共に底部外面には、糸切痕が認められる。13は、底部が平底で、体部はやや丸みを帯びて開く。胎土は緻密で、器壁も薄い。東濃型山茶碗脇之島窯式(15世紀中葉)に位置付けられる。14は、体部が直線的に開く。底部内面と体部内面の境に浅い凹みがあり、重ね焼きの痕跡が認められる。底部内面に指頭圧痕は認められない。高台は、歪な形に雑に付けられており、端部には靱殻痕が認められる。底部内面に指頭圧痕が認められないものの、胎土は粗雑で器壁も厚いことから、尾張型山茶碗6～7型式の過渡期(13世紀前葉～中葉)に位置付けられる。

古瀬戸製品 (15～17)

15は、折縁深皿である。体部は直線的に開き、口縁部は外折する。端部は内側へ折り返さない。体部外面上方にロクロ目が残り、外面の体部下方から底部にかけて回転ヘラ削り調整が施されている。本来ならば三足が付されるが、僅かに足部の付け根の痕跡が残る。体部上方の内外面に灰釉が施されている。また、断面には漆継ぎの痕跡が認められる。16は、花瓶である。ロクロによって一気に成形されており、底部外面に糸切痕が残る。内面には施釉されず、脚部外面まで灰釉が施されている。17は、卸皿である。内面には卸目が認められ、炭化物も付着している。底部外面には、糸切痕と板状圧痕が認められる。

15・16は古瀬戸後期様式であり、15はIV期古段階(15世紀中葉)に位置付けられよう。16の年代観は15世紀代である。17は不明である。

白磁 (18～25)

18～24は、碗である。18・19は、玉縁碗である。外面は口縁部直下までヘラ削り調整が施されている。22～24は、高台が幅広で削り出しが浅く、底部内面と体部内面の境に段が認められる。高台周辺の外面のみ露胎である。18・19・22～24は、大宰府分類の白磁碗IV類に該当しよう。20は、体部外面に細い線刻で文様が施されている。外面の高台周辺にかけては露胎であり、ヘラ削り調整が施されている。底部内面と体部内面の境に段が認められる。21は、底部内面と体部内面の境に段が認められる。高台は削り込みによって成形されている。高台内面のみ露胎である。

25は、皿である。全面に施釉されている。大宰府分類の白磁皿IX類に該当しよう。

青白磁 (26)

26は、青白磁合子蓋である。外面には、型押しによる文様の浮き出しがみられる。外面は施釉されているものの、内面は露胎である。

また、細片のため図示していないが、青白磁梅瓶がE19のE列トレンチから出土した(図版第59-1)。

青磁 (27～30)

27～30は、青磁碗である。27・28は、鎬蓮弁文が施されている。高台内面は、ヘラによって削り込まれて成形されている。施釉の範囲は、高台端部に達しており、一部は高台内面にまで及んでいる。高台内面は露胎である。29は、やや不明瞭ながら幅の細い線描蓮弁文が施されている。断面には、漆継ぎの痕跡が認められる。30は、体部外面にヘラ削り調整が施され、削り出し高台である。内面のみ施釉されている。底部内面中央に指頭圧痕が認められる。

染付 (31)

31 は、染付碗である。暈付のみ露胎で、高台内面にも施釉されている。高台外面に二重圈線を配し、体部外面と底部内面に植物等の文様が描かれている。

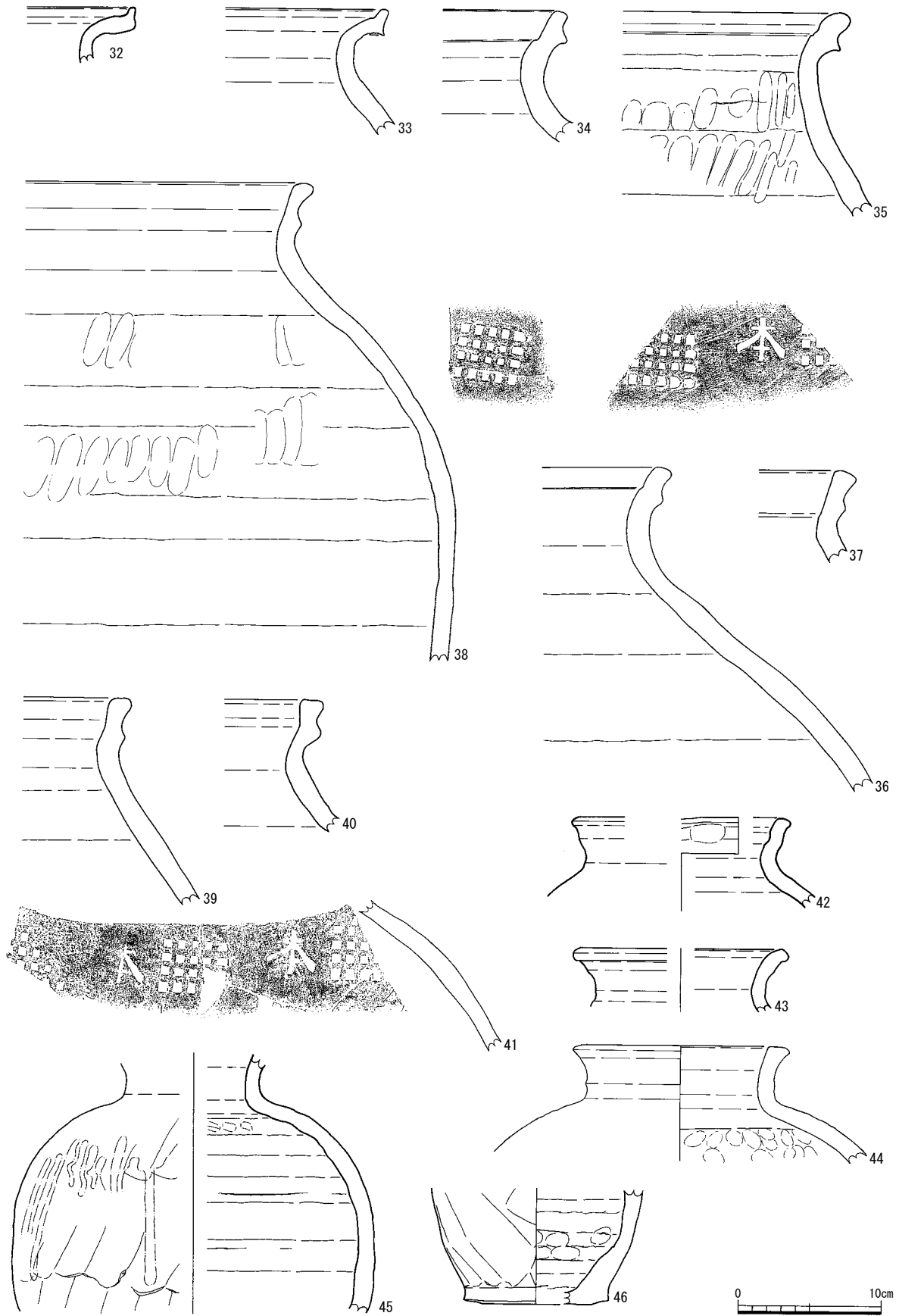
越前焼 (32～56)

32～41 は、甕である。32 は、頸部の器壁が最も薄く、口縁部にかけてやや肥厚する。頸部から口縁部にかけて強く屈曲して開く。口縁部の上端は、上方へ摘み上げられ、下端は垂れ下がらない。木村氏分類の甕Ⅰ群A類に該当しよう。やや新しい属性を有しており、年代観は13世紀第2四半期頃であろう。33 は、頸部が直立して立ち上がり、口縁部にかけて屈曲して開く。口縁部下端は僅かに垂れ下り、「N」字状口縁を意識している。口縁部は、縁帯を形成しており、内側には段が認められる。木村氏分類の甕Ⅰ群C類に該当し、年代観は13世紀第4四半期頃であろう。34・35 は、縁帯が退化しており、口縁部下方で僅かに鱗状の突起が認められる。口縁部内側に凹線が認められるが、やや下方に位置する。小野氏分類の甕Ⅱ群に該当しよう。鱗状の突起が僅かに下がっていることから、より古い属性を有していると思われ、14世紀後半から15世紀初頭頃であろうか。36～40 は、縁帯がなくなり、外面に稜線が認められる。小野氏分類の甕Ⅲ群に該当し、15世紀後半頃であろう。また、36～40 は口縁部の形態的な特徴から、さらに細分できる。36・37 は、口縁部内面に段や凹線が認められ、端部上面が丸くなり、やや外側へと開く。38～40 は、口縁部内面の段や凹線が不明瞭となり、端部上面が水平になる。口縁端部上面が水平という属性は、「明應九年(1500)」銘の木札を伴う福井市大安禅寺境内出土の甕にみられる。このことから、前者の方が古くて後者が新しいと考えられる。また38・41には、「粗い格子目+本」を原体とする押印文が施されている。

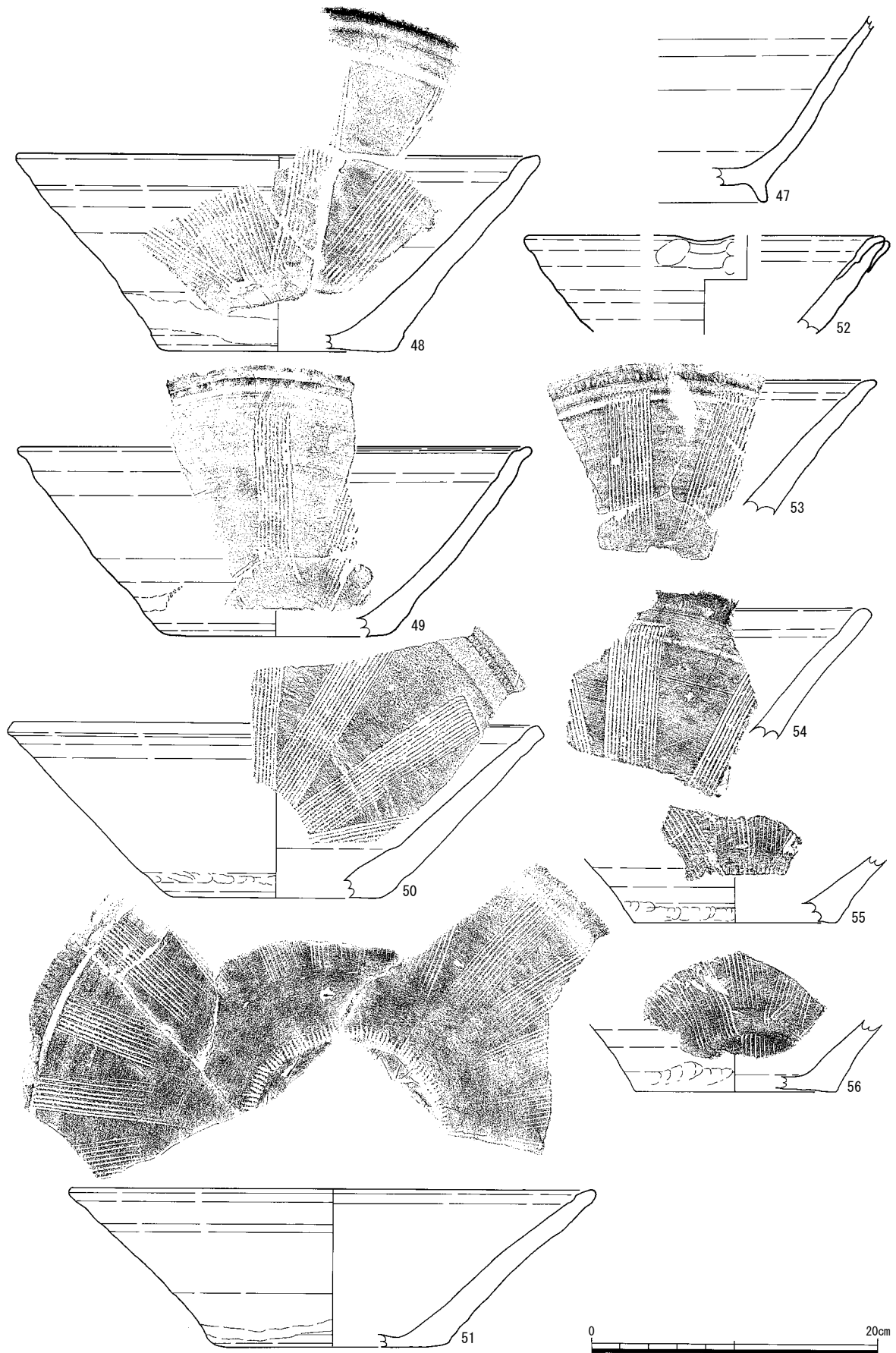
42～46 は、壺である。42 は、注口部が半分ほど欠損している。注口部は、外側に指押え、内側には円柱状の工具を押し当てて形成されている。口縁部内側のやや下方に窪みが認められることから、受け口状になっている。口縁部はやや外開きである。43 は、口縁部がやや外側へ開き、端部を折り返して肥厚している。断面には漆継ぎの痕跡が認められる。44 は、頸部が直立気味に立ち上がり、口縁部にかけて緩やかに外側へ開く。口縁端部はやや肥厚する。45・46 は、体部外面に斜め方向のヘラナデ調整が施されている。45 は、自然釉がかかる。壺の年代観は、15～16世紀頃であろう。

47 は、片口鉢である。底部から体部下方にかけてヘラ削り調整が施されている。高台は、付け高台でやや外開きに高く付けられている。高台高は1.2cmである。内面には、重ね焼きの痕跡が認められる。年代観は13世紀中葉頃と思われる。

48～56 は、播鉢である。48～51 は平底で、口縁部内側のやや下がった位置に段や凹線を有し、底部内面に播目が認められない。木村氏分類の鉢Ⅲ群に該当し、15世紀後半頃であろう。底部が残存していないが、52～54 も口縁部内側のやや下がった位置に段や凹線を有しており、同群に該当しよう。また、口縁部の形態的な特徴からさらに細分できる。48・52・53 は、口縁部の先端が尖る。播目は10～12条である。52 は、注口部が残る。注口部は、外側に指押え、内側には指2本を押し当てて形成されている。内面に播目が認められるが、僅かしか残存していないことから拓本は掲載しなかった。49 は、口縁部の上面に窪みが認められる。播目は9条である。50 は、口縁部が方形を呈し、外側下方へ傾く。播目は12条である。54 は、口縁部が丸みを帯びる。播目は14条である。なお51 は、口縁部内側の直下に凹線が認められ、口縁部の形態から木村氏分類の鉢Ⅳ群に該当しよう。しかし、底部内面に播目が認められず、木村氏分類の鉢Ⅲ群に該当しうる属性を有しており、過渡的様相を示す。55・56 は、平底



第88図 陶器・陶磁器 (2) (縮尺1/4)



第89図 陶器・陶磁器 (3) (縮尺1/4)

である。底部内面にも播目が認められる。播目は10条である。木村氏分類の鉢Ⅳ群に該当し、15世紀末葉から16世紀初頭頃であろう。

3) 小結

小矢戸地区では、12世紀後半から16世紀初頭にかけての中世陶磁器が出土している。舶来磁器は、年代をおさえることが困難であるから、中世陶器に限定して消長関係を第6表に示した。

年代別に遺物をみていくと、12世紀後半代に常滑焼広口壺、13世紀に、山茶碗と越前焼甕・片口鉢、14世紀に越前焼甕と常滑焼広口壺、15世紀から16世紀初頭の間は古瀬戸製品（折縁深皿・花瓶）と山茶碗と越前焼壺・甕・播鉢を確認することができる。

同一遺構から出土した遺物は、厳格には必ずしも共伴関係ではないが、以下に取り上げておく。

A11のSR03からは、16の古瀬戸花瓶、25の白磁皿、50の越前焼播鉢が出土した。古瀬戸花瓶は後期様式、越前焼播鉢は木村氏分類の鉢Ⅲ群である。

B9のSD01からは、15の古瀬戸折縁深皿、34・38～40の越前焼甕が出土した。古瀬戸折縁深皿は後Ⅳ期古段階である。越前焼甕は34のみ小野氏分類の甕Ⅱ群、38～40は小野氏分類の甕Ⅲ群である。

B10のSR03からは、29の青磁碗、36・37の越前焼甕、44の越前焼壺が出土した。36・37は小野氏分類の甕Ⅲ群である。

B20の土器溜り02からは、18の玉縁碗が出土した。

E22のSE13からは、31の染付碗、53の越前焼播鉢が出土した。53は木村氏分類の鉢Ⅲ群である。

また共伴遺物ではないが、B7のSP80からは、26の青白磁合子蓋が出土した。県道区では、F9・F19から包含層ではあるものの、青白磁合子身が2点出土している。したがって、どちらかの合子身が本資料と対になる可能性を指摘しておきたい。

小矢戸地区では、越前焼に加え、中世を通じて東海地方の中世陶器（常滑焼・山茶碗・古瀬戸製品）が認められる。舶来磁器は、12世紀から14世紀にかけての白磁・青磁が主体であり、15世紀から16世紀にかけては染付が僅かにあるだけで、中世後半になると舶来磁器は認められない。また、舶来磁器には希少性の高い青白磁（合子・梅瓶等）が出土した点も成果としておきたい。

第6表 陶器消長表

西暦	常滑焼	山茶碗	古瀬戸	越前焼
1150	■			
1200				■
1250		■		
1300				■
1350	■			■
1400				■
1450		■	■	■
1500				■

参考文献

上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究 No. 2』日本貿易陶磁研究会
 小野正敏 1983 『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』福井県立朝倉氏遺跡資料館
 木村孝一郎 2012 「第5章遺物 第2節越前焼」『諏訪間興行寺遺跡Ⅱ』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
 城ヶ谷和広 2010 「第1章総論 第3節編年及び編年表」『愛知県史 資料編4 考古4 飛鳥～平安』愛知県
 中野晴久ほか 2012 『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』愛知県
 藤澤良祐 1994 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要第3号』三重県埋蔵文化財センター
 藤澤良祐 2008 「古瀬戸後期様式の編年」『中世瀬戸窯の研究』高志書院
 横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『研究論集4』九州歴史資料館

4 石器（第90～96図、図版第61～65）

(1) 構成と分布

第8表 石器組成表

石質	有茎尖頭器	石鏃	玦状耳飾	石匙	石錐	削器	石核	剥片	打製石斧	磨製石斧	石庖丁	石錘	敲石	凹石	磨石	石刀	異形石器	計
安山岩	2	2				5		8	137	3		3	2	12	12		1	187
チャート		3		3				10										16
砂岩										3	1	1	4	7	7			23
黒耀石								1										1
蛇紋岩										1								1
蠟石			1															1
頁岩					1		1											2
珪質頁岩	1																	1
片岩																1		1
計	3	5	1	3	1	5	1	19	137	7	1	4	6	19	19	1	1	233

石器の構成を第8表に示す。狩猟具、漁撈具、農具、工具、土掘具、調理具、さらに装身具や祭祀具もあり、豊富で多様な道具類からなる。特に打製石斧が多量で全体の6割程を占め、剥片や凹石・磨石等もやや出土した。少量だが、有茎尖頭器や石匙、石庖丁、玦状耳飾、石刀等の特徴的な器種があり、他に玉作関係遺物で緑色凝灰岩製の荒割が2点出土している。

石質の構成は、安山岩が主体でチャートや砂岩も少量ある。また、僅かに遠隔地産の黒耀石や蛇紋岩、珪質頁岩もみられる。器種別では、有茎尖頭器や石鏃等の剥片石器は緻密な安山岩が中心だがチャートも多く用いられる。打製石斧は安山岩、磨製石斧や凹石・磨石等は安山岩の他に砂岩が用いられる。

石器は、微高地では散在するが、旧河道から多量に出土した。特にSR 01のD列以東、SR 02のO列以南、SR 04の19列以南、SR 05のB列以東、SR 06の18列以南で5箇所にとまる。器種別では、打製石斧は全体と同様な状況だが、石鏃や石匙及び剥片はSR 02と南側の微高地にとまる。

(2) 石器の形態

有茎尖頭器（1～3） いずれも茎部は明瞭に突出するが、基部の返しは作出されていない。また、両面中央まで平坦に調整されている。1と2は、長身である。1は、調整がやや粗く器体が緩く反る。2は、茎部が僅かに内湾し、両側縁が鋸歯状となる。3は、薄手だがやや幅広で、基部境が屈曲する。

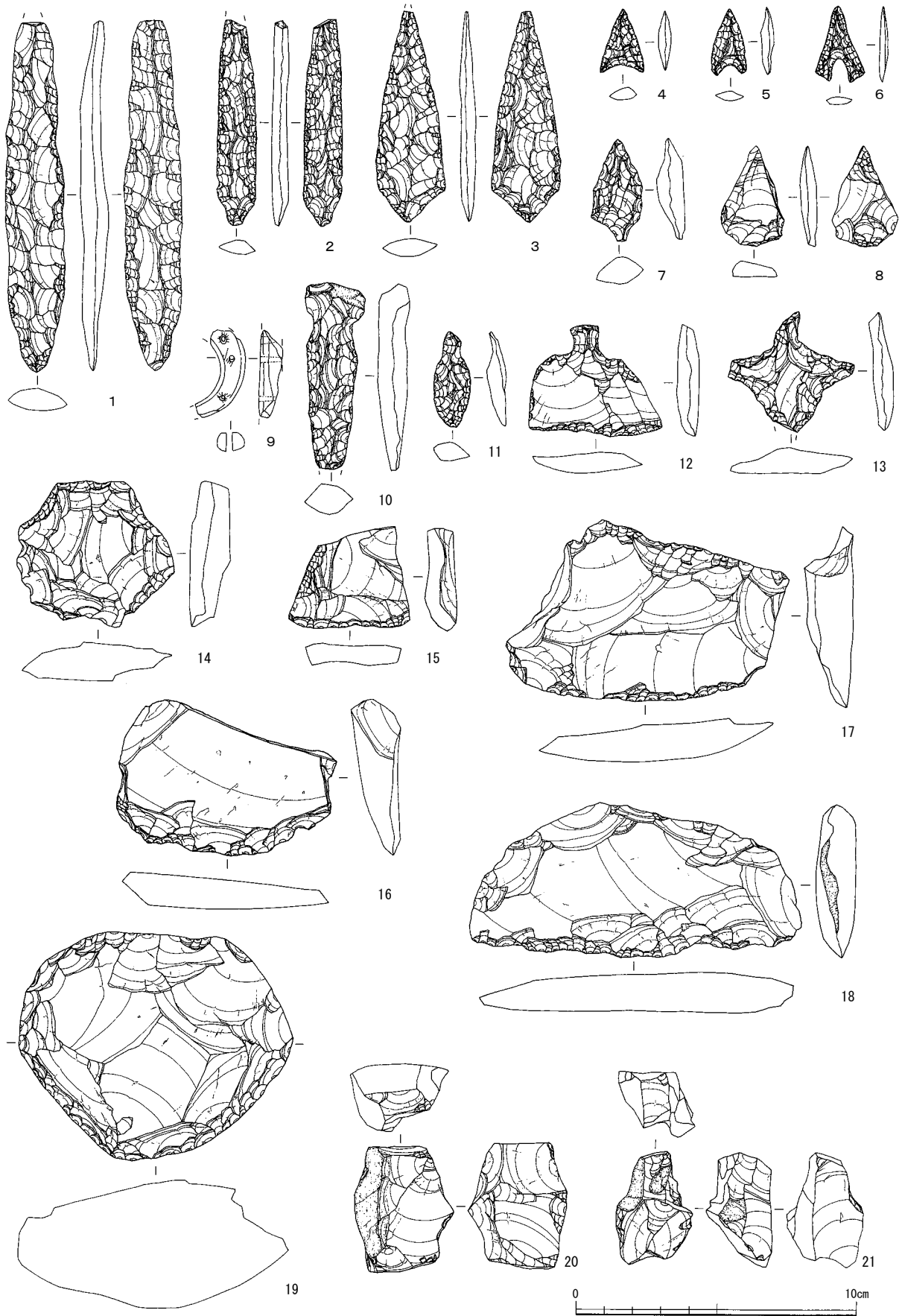
石鏃（4～8） 4～6は凹基無茎鏃で、基部に抉入が作出される。また、両面中心に調整され三角形形状を呈す。4と5は、基部が尖鋭に作出され、側縁は4が直線的で5は緩く湾曲する。6は、基部が鋏形を呈し、側縁中程で緩く内湾する。7は有茎鏃。両面に調整されるが、側縁は非対称で器体に厚みをもつ。未製品とも考えられる。8は、石鏃未製品である。下端の両面と左側縁上半の裏面側に調整されるが、器体に素材面を多く残す。

玦状耳飾（9） 中央に円孔、下端に先細りの切目が作出される。平面は円形を呈し、断面は丸みをもつ。また、補修用とも考えられる孔が3つ穿たれ、孔周辺に不定方向の擦痕がみられる。

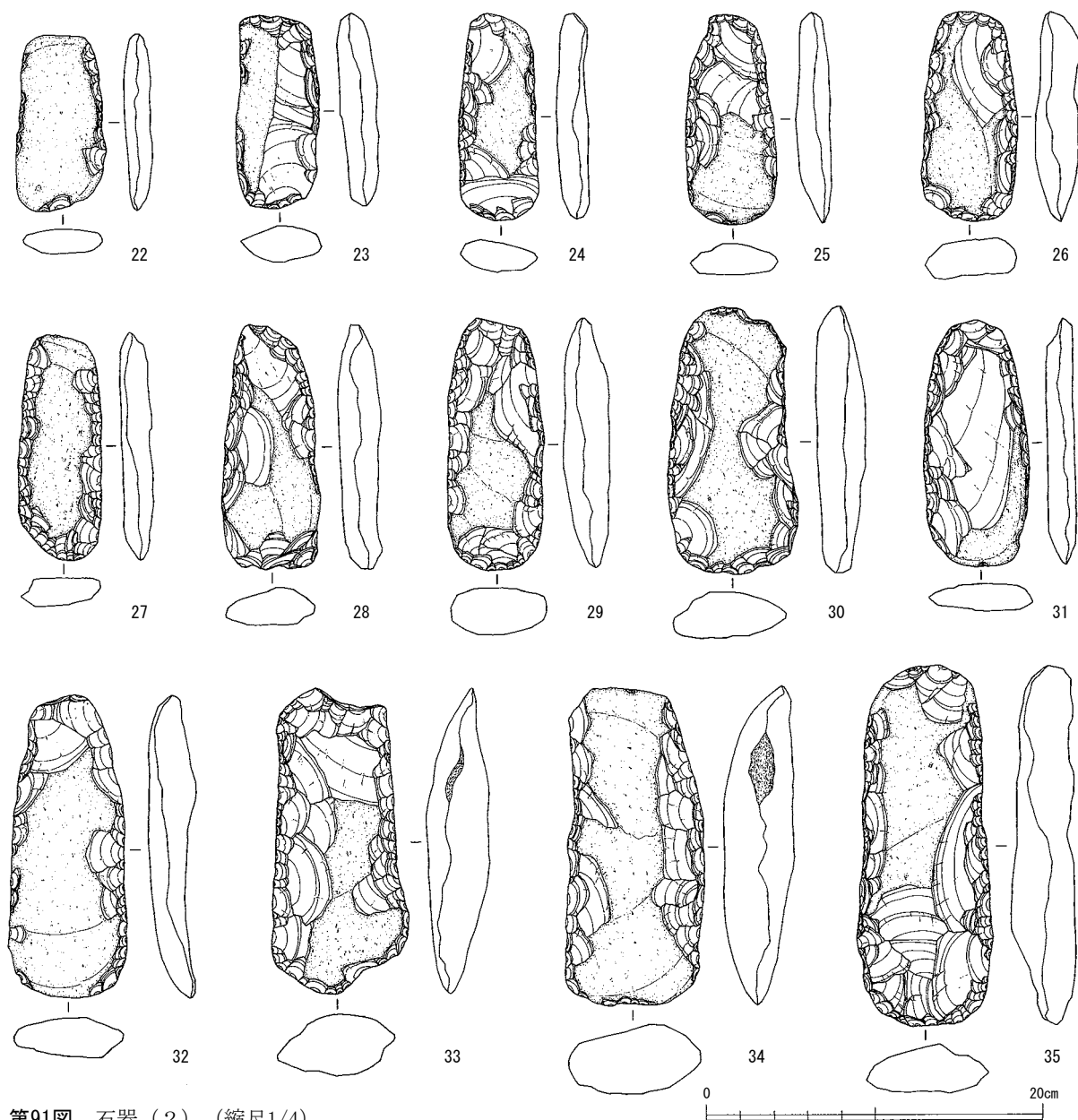
石匙（10～12） 10と11は縦形、12は横形で、いずれも上方につまみ状の基部が作出される。10と11は、両面中央まで平坦に調整される。10は、青緑色のチャート製であり、長身で厚みをもつ。11は、赤色のチャート製であり、やや小形で側縁が湾曲する。12は、基部が表裏の周縁、刃部が表面下端中心に調整される。また、刃部の裏面側に刃こぼれがみられる。

石錐（13） 表裏の周縁に調整され、側縁が大きく内湾する。上方に石匙と類似したつまみ状の基部、下方にやや幅広の刃部が作出される。両側縁の上位は、外方へ細長く突出して刃部状となる。

削器（14～18） 14～16は、寸詰まりな剥片が素材。14は、表裏の周辺にやや粗く調整される。15と16は、表面下端に調整される。17と18は、やや大形の横長剥片が素材で、形状が石庖丁と類似する。17は、表面下端と右側縁の裏面側に調整される。緩く外湾する刃部をもち、上端は屈曲して扇形を呈す。



第90図 石器 (1) (縮尺1/2)



第91図 石器(2) (縮尺1/4)

18は、表裏の周辺に調整される。直線的な刃部をもち、上端は緩く屈曲して半月形を呈す。

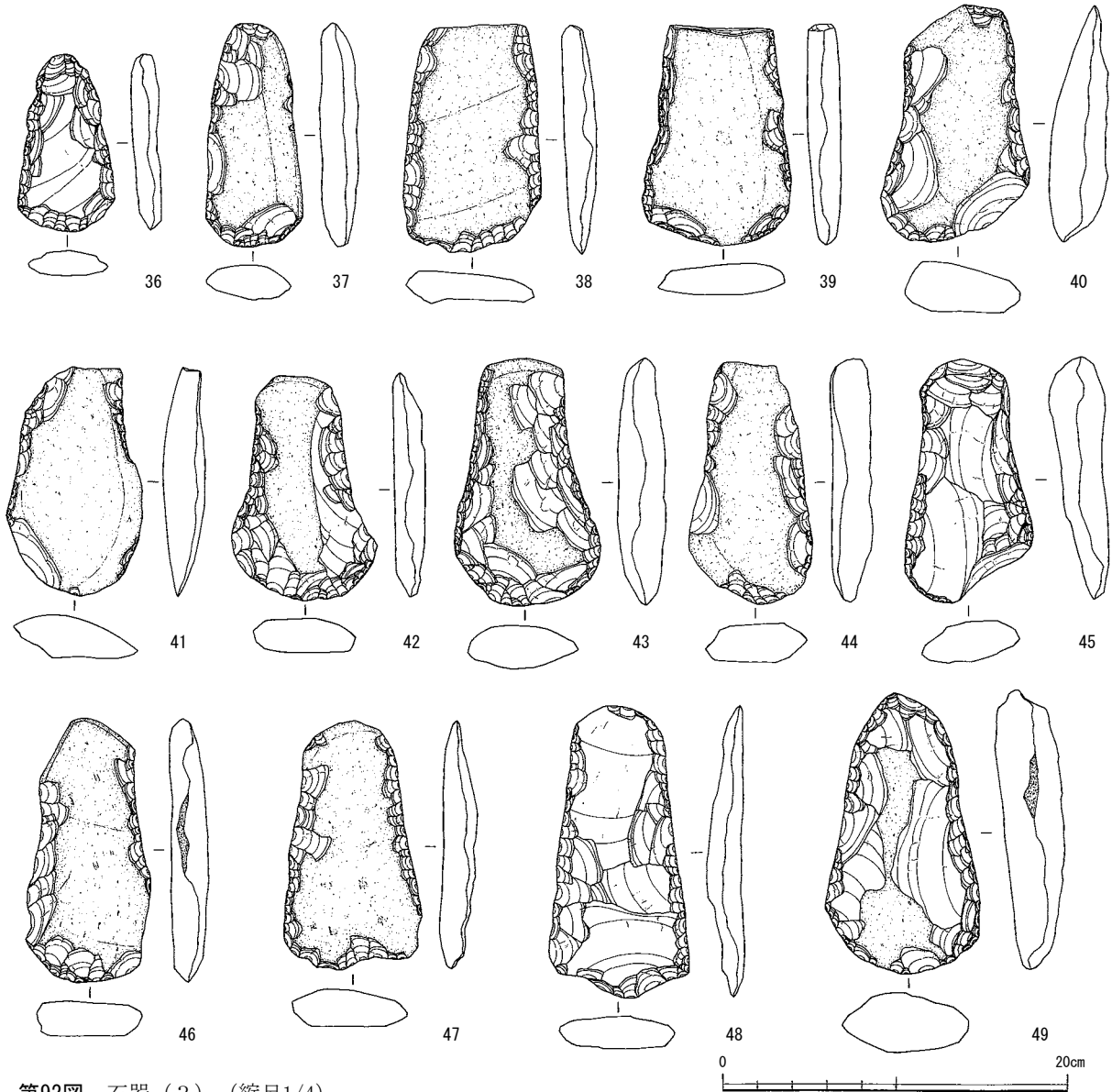
石核 (19) 握拳大の円礫が素材。表面を作業面とし、周辺から器体中央へ向け剥片剥離されている。

荒割 (20・21) 玉作関係遺物が僅かに出土しており、本節で記す。共に不整ながら表裏や上下左右に面が作出される段階であり、形割より大形の角形を呈す。上下面に表裏と直交する面をもつ。

打製石斧 (22～86) 多くは板状剥片が素材で、周辺中心に調整される。以下、形状から類別した。

1類 (22～35) 基部から刃部がほぼ同じ幅で、側辺は直線的にのび短冊形を呈す。22はやや小形で、刃部が偏る。30は右側辺が僅かに内湾し、31は両側辺が緩く湾曲する。32～35は、やや大形の一群。32は基部がすぼまり、器体が緩く反る。33は基端右半が内湾し、34は右側辺中程で緩く湾曲する。

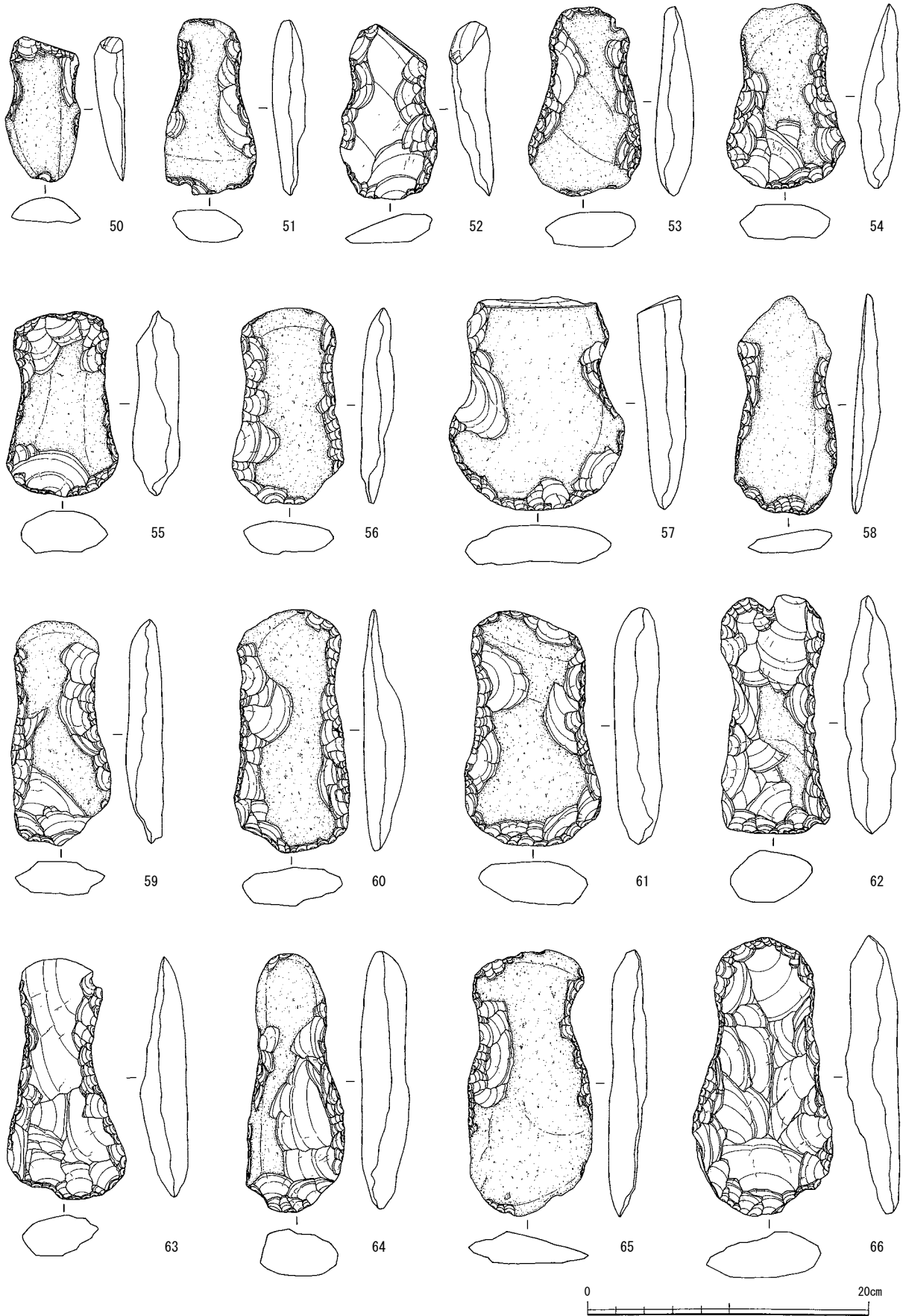
2類 (36～49) 基部から刃部へ側辺が開き、撥形を呈す。36～39は、両側辺が直線的にのびる。36と37は、細身で基部がすぼまり、36はやや小形である。38と39は幅広で、38は刃部が偏る。40～46は、側辺中程で僅かに内湾し、下半が湾曲して丸い刃部をもつ。40は、器体下半に厚みをもち、刃部が



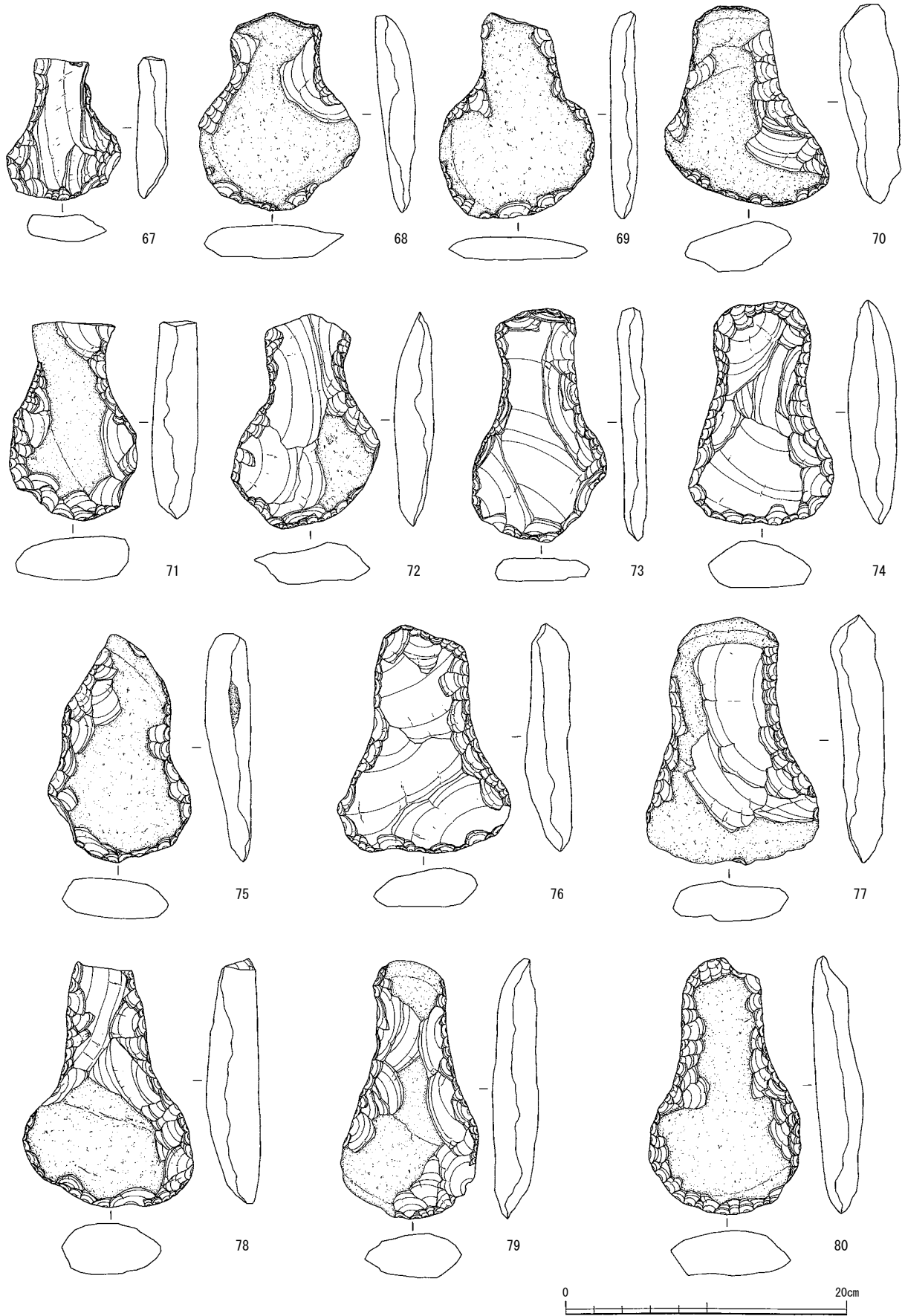
第92図 石器（3）（縮尺1/4）

偏る。41と42は、刃部境が屈曲する。44は、右側辺が直線的にのび、刃部が偏る。45は、器体上半に厚みをもつ。46は、板状礫が素材で、基部がすぼまる。47～49は、両側辺が直線的にのび、48と49はやや大形の一群である。48は薄手で、刃部境が屈曲する。49は厚手で、基部がすぼまる。

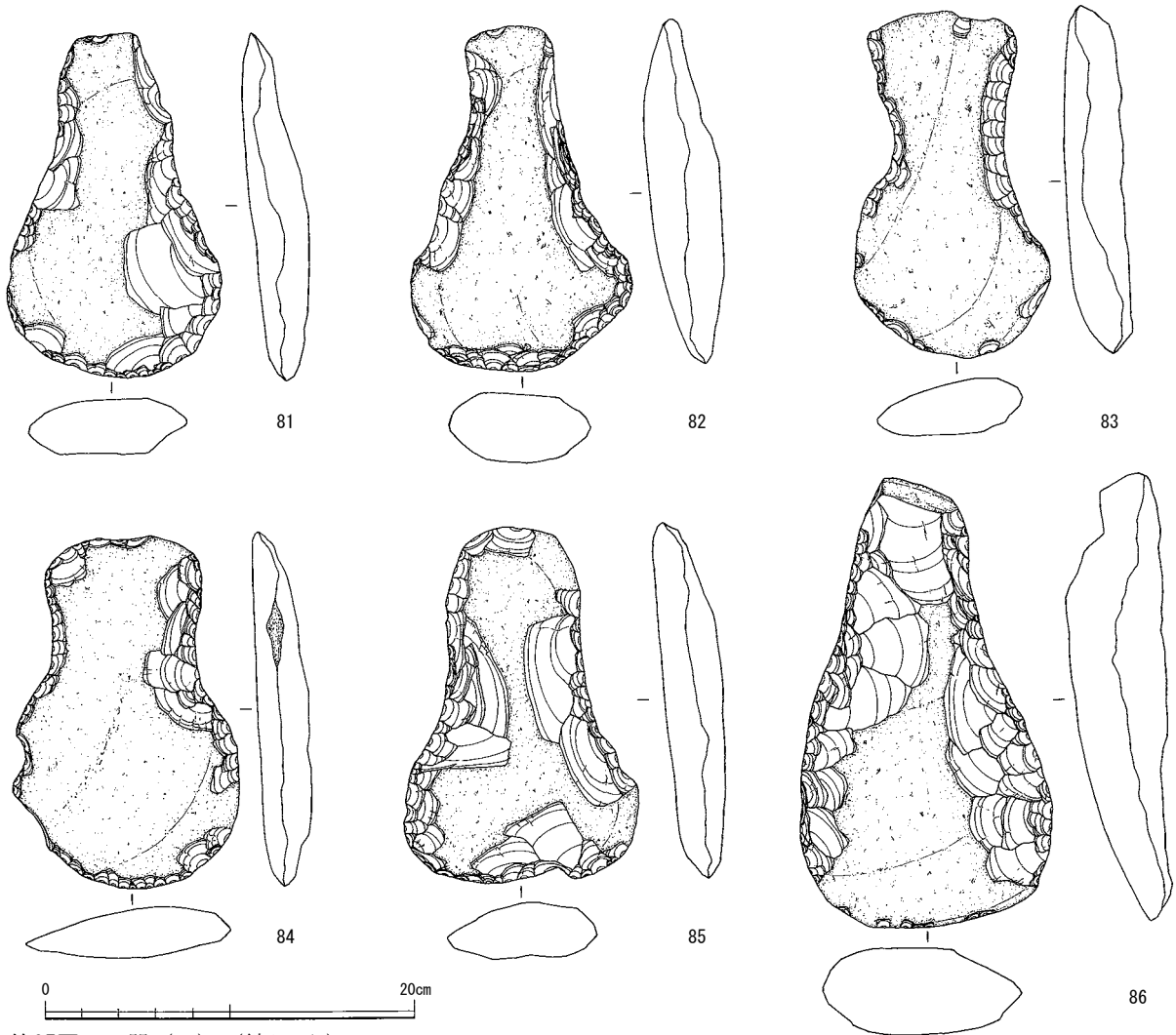
3類（50～86） 側辺中程のやや上位に挟入をもち、分銅形を呈す。多くは左右の側辺で湾曲の程度が異なり、挟入部位が若干ずれる。50～66は、基部から刃部へ側辺が緩く開く。50は、やや小形である。基部が平らで幅広く、刃部は先細りとなる。54と55は、刃部境が屈曲する。57は幅広で、側辺下半が湾曲して丸い刃部をもつ。58は薄手で、基部がすぼまる。59～66は、やや大形の一群。59は、刃部が偏る。62は、刃部境が屈曲し平らな刃部をもつ。63と64は、やや細身だが厚手で、64は扁平な棒状礫が素材である。65は薄手で、両側辺上位に挟入をもつ。66は、表面が器体中央まで平坦に調整される。67～86は、側辺下半が大きく湾曲して開き、幅広の刃部をもつ。67は、やや小形である。69は薄手で、基部が直線的にのびる。70は厚手で、刃部境が屈曲する。71は、板状礫が素材で、平らな基部をもつ。75～85は、やや大形の一群。75は、基部がすぼまる。76・77と85は、刃部境が屈曲して平らな刃部を



第93図 石器(4) (縮尺1/4)



第94図 石器（5）（縮尺1/4）



第95図 石器(6) (縮尺1/4)

もつ。78～82は、基部が細長くのびる。83と84は、幅広の基部をもつ。86は、大形の厚手である。

磨製石斧(87～89) 87は、側辺の面が不明瞭で、断面がやや丸みをもつ。88と89は、側辺や基端に面が作出される。88は、蛇紋岩製で所謂定角式の磨製石斧である。基部が細くすぼまり、刃部は偏る。89は、側辺がほぼ平行し、幅広の器体をもつ。

石庖丁(90) 薄手の板状剥片が素材で、相対する紐孔をもつ。背部と刃部が外湾し、平面は楕円形を呈す。表裏とも体部に斜行、刃部に横方向の擦痕がみられる。

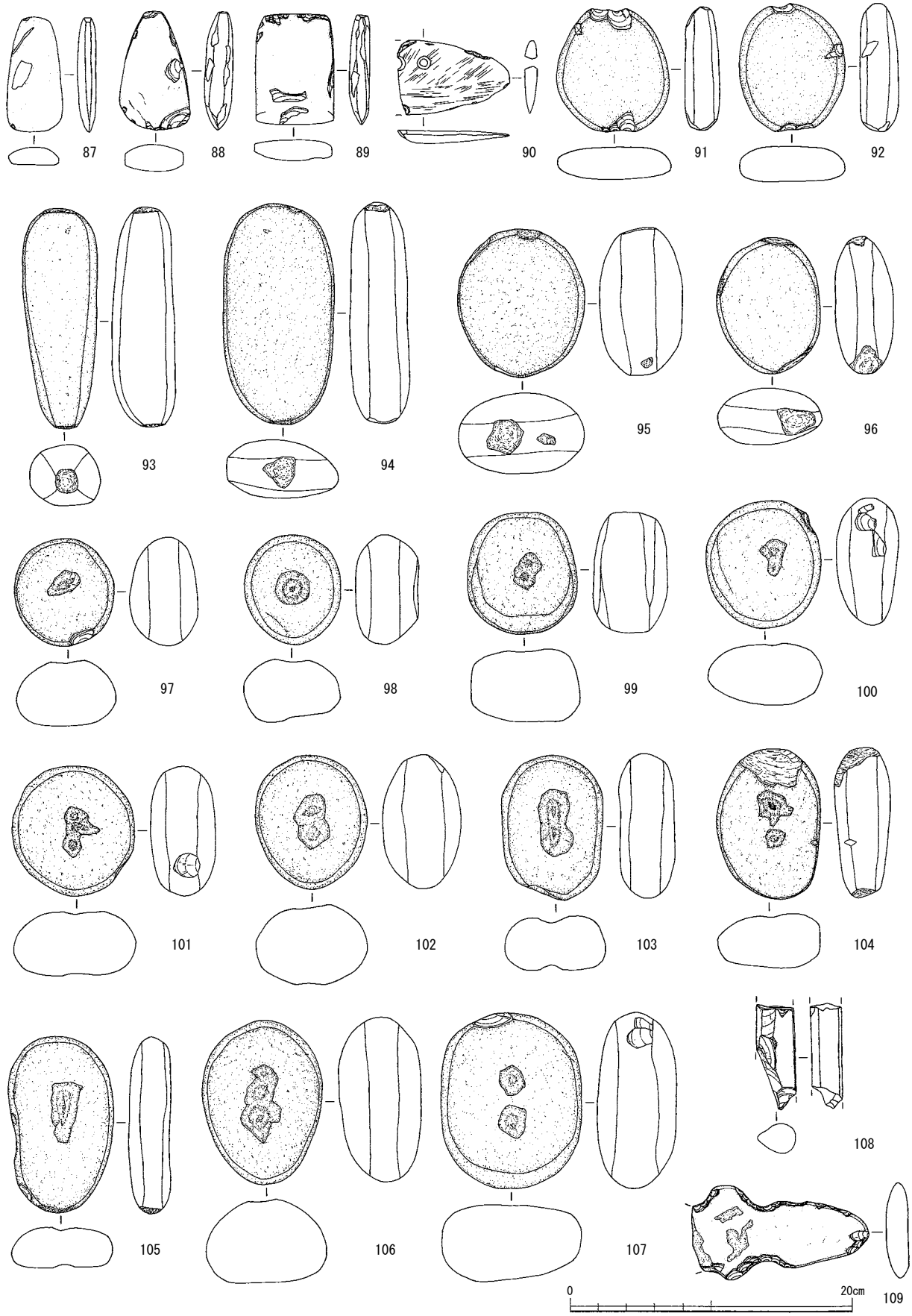
石錘(91・92) 共に打欠石錘で、扁平な楕円礫が素材。表裏の上下端に数回調整される。

敲石(93～96) 93は棒状礫、94～96は扁平な楕円礫が素材。93～95は上下端、96は上端から左側辺上半と下端右半に敲打痕をもつ。また、95は裏面中央に磨面をもつ。

凹石(97～107) 扁平な楕円礫が素材。表裏に磨面をもち、中央に敲打痕があつて凹む。99以外は裏面中央にも敲打痕をもつ。また、敲打により99は周辺、107は両側辺に面が作出される。

石刀(108) 左側縁に刃部、右側縁に平坦な背部が作出され、断面はやや厚手の楔形を呈す。

異形石器(109) 器体の上下に相対する抉入を2対もち、中央は節状を呈す。側端は湾曲して先細りとなり、断面は扁平な形状である。敲打後に研磨して仕上げられ、抉入は剥離調整により作出される。形態的に古い特徴をもつ独鈷石とも考えられるが不明確である。



第96図 石器（7）（縮尺1/4）

(3) 小結

小矢戸地区の石器群は、数時期の資料が混在しており、特徴的な器種以外は時期不詳である。限られた状況だが、時期別に遺跡の性格等について小結する。

縄文時代草創期では、有茎尖頭器がある。茎部は明瞭に突出するが、基部の返しは未作出であり、長身とやや幅広の形態がみられた。鳴鹿山鹿遺跡⁽¹⁾（永平寺町）の一群と形態的な特徴は類似している。奥越では、他に赤尾池遺跡⁽²⁾（勝山市）があり、今回2例目となった。

縄文時代早期から前期では、鍬形鏃や縦形石匙及び玦状耳飾がある。鍬形鏃と玦状耳飾は、志田神田遺跡⁽³⁾（勝山市）でも出土している。県内では、石匙は横形が多いが、縦形は類例が少なく特異である。

縄文時代中期から晩期では、磨製石斧と石刀がある。磨製石斧は、蛇紋岩製等の定角式が僅かにある。また奥越では、他に大野市木本や佐開遺跡（同市）で石刀が出土している⁽⁴⁾。

弥生時代中期では、紐孔をもつ形態の石庖丁がある。奥越では初例だが、福井・坂井平野等で近年発見例が増加しつつある。いずれの遺跡でも、石庖丁の製品が単独で出土している。

弥生時代後期では、打製石斧等がある。旧河道から土器と共に多量に出土したが、他時期も混在すると考えられる。志田神田遺跡に同様な事例があり、発坂山端遺跡⁽⁵⁾（勝山市）や上舌遺跡⁽⁶⁾（大野市）では、該期の包含層から多く出土している。器種の消長や生業に関する地域的な特徴とも考えられる。他に荒割が僅かにあり、右近次郎西川遺跡⁽⁷⁾（同市）で玉作関係遺物が多く出土している。

参考文献

- (1) 福井県教育委員会 1980 『六呂瀬山古墳群』 福井県埋蔵文化財調査報告第4集
- (2) 勝山市 1997 『図説 勝山市史』
- (3) 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 『志田神田遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第107集
- (4) 仁科 章 1998 『福井県における縄文時代の祭祀遺物資料集成（上）』 福井県立博物館紀要第7号
- (5) 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2004 『発坂山端遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第77集
- (6) 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2012 『上舌遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第131集
- (7) 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2002 『右近次郎西川遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第58集

第9表 石器観察表

※法量はcm

番号	器種	出土地	形態	石質	器長	器幅	器厚
1	有茎尖頭器	B0 SR02	磨減が著しい。先端欠。	安山岩	12.3	2.1	1.0
2	有茎尖頭器	D10 SR01	先端欠。	珪質頁岩	7.3	1.5	0.6
3	有茎尖頭器	C25 SE14	先端欠。	安山岩	7.5	2.3	0.6
4	石鏃	C2 表土	凹基無茎鏃。	チャート	2.2	1.6	0.5
5	石鏃	C2 SP37	凹基無茎鏃。表裏中央に素材面を残す。	安山岩	2.4	1.2	0.5
6	石鏃	C9 SD02	凹基無茎鏃。鍬形鏃。薄手。	安山岩	2.7	1.8	0.5
7	石鏃	E9 表土	有茎鏃。裏面中央に素材面を残す。	チャート	3.6	1.8	1.0
8	石鏃	C2 表土	石鏃未製品。左側面に礫面を残す。	チャート	3.6	2.3	0.6
9	玦状耳飾	E1 表採	裏面の多くは剥離面。左半欠。	燧石	3.1	1.8	0.8
10	石匙	B0 SR02	縦形。基部は幅広で礫面を残す。先端欠。	チャート	6.5	2.1	1.1
11	石匙	B0・1 SR02	縦形。裏面中央左半に素材面を残す。	チャート	3.5	1.3	0.7
12	石匙	E23 包含層	横形。基端と両側端に素材面を残す。	チャート	4.0	5.7	0.8
13	石鏃	B11 表土	表裏中央に素材面を残す。刃部欠。	頁岩	4.2	4.4	1.0
14	削器	B16 SR04	上端に素材の打面を残す。	安山岩	5.2	5.5	1.4
15	削器	B12 SR01	上端に素材の打面、左側面に礫面を残す。	安山岩	3.7	4.3	1.2
16	削器	B0 表土	裏面下端にも調整される。	安山岩	5.6	7.8	1.8
17	削器	B13 SR01	上端右半に素材の打面を残す。	安山岩	6.4	10.0	1.3
18	削器	D28 28列ㄴ	両側端に礫面を残す。	安山岩	5.5	11.8	1.4
19	石核	表採	裏面に礫面を残す。	頁岩	9.7	8.2	4.6
20	荒割	E22 包含層	両側辺下半に素材の縁辺、表面左半に礫面を残す。	緑色凝灰岩	4.5	3.6	2.4
21	荒割	E22 包含層	表面の左上半と右半一部に礫面を残す。	緑色凝灰岩	4.1	2.8	2.3
22	打製石斧	D10 SR01	1類。磨減が著しい。	安山岩	10.4	5.2	1.6
23	打製石斧	B16 表土	1類。磨減。	安山岩	11.4	4.9	2.4
24	打製石斧	C15 SR04	1類。左側辺中程に潰れ。磨減。	安山岩	12.2	4.6	2.0
25	打製石斧	D12 SE04	1類。左側辺中程に潰れ。磨減が著しい。	安山岩	12.4	5.4	2.1
26	打製石斧	C2 表土	1類。やや厚手。	安山岩	12.4	5.8	2.6
27	打製石斧	E24 包含層	1類。細身で刃部が偏る。	安山岩	13.4	4.9	1.9

第1節 小矢戸地区の遺物

28	打製石斧	C12 SR04	1類。基部がすぼまる。	安山岩	14.4	5.8	2.6
29	打製石斧	B15 SR04	1類。左側辺中程に潰れ。磨滅。	安山岩	14.7	5.8	2.8
30	打製石斧	D19 SR04	1類。やや厚手。	安山岩	15.6	7.7	2.9
31	打製石斧	B1 SR02	1類。薄手。磨滅が著しい。	安山岩	14.5	6.2	1.7
32	打製石斧	D10 SR01	1類。磨滅が著しい。	安山岩	17.9	7.0	2.9
33	打製石斧	B6 表土	1類。器体中央が厚手。右側辺上位に潰れ。	安山岩	18.0	8.1	3.8
34	打製石斧	C16 表土	1類。厚手。右側辺上位に潰れ。	安山岩	18.8	8.3	4.3
35	打製石斧	E14 包含層	1類。整った形状。	安山岩	21.2	8.1	3.8
36	打製石斧	E9 表採	2類。	安山岩	10.1	5.4	1.7
37	打製石斧	B14 SR04	2類。やや磨滅。	安山岩	12.9	5.6	2.2
38	打製石斧	B13 表土	2類。基端に素材面を残す。	安山岩	13.3	7.9	2.1
39	打製石斧	D20 SR04	2類。基端に素材面を残す。	安山岩	12.7	8.7	1.9
40	打製石斧	C20 C列Ⅱ	2類。刃部の裏面側が磨滅。	安山岩	13.7	8.6	3.3
41	打製石斧	C1 SR02	2類。基端に素材面を残す。	安山岩	13.2	7.8	2.5
42	打製石斧	C11 SR01	2類。板状礫が素材。	安山岩	13.0	8.2	1.9
43	打製石斧	C11 SR01	2類。やや磨滅。	安山岩	14.2	8.4	2.8
44	打製石斧	D5 表土	2類。やや磨滅。	安山岩	14.0	7.7	2.4
45	打製石斧	A21 SR04	2類。刃部右半欠。	安山岩	14.0	7.4	3.3
46	打製石斧	D3 表土	2類。基端に素材面を残す。右側辺中程に潰れ。	安山岩	15.2	7.1	2.3
47	打製石斧	C11 SR01	2類。やや磨滅。	安山岩	15.3	7.9	2.2
48	打製石斧	C2 表土	2類。磨滅が著しい。	安山岩	16.9	8.1	2.2
49	打製石斧	B13 表土	2類。両側辺中程に潰れ。	安山岩	16.1	8.9	3.5
50	打製石斧	C12 表土	3類。基端に素材面、両側辺下半に素材の縁辺を残す。	安山岩	10.2	5.2	2.1
51	打製石斧	C2 表土	3類。磨滅。	安山岩	12.4	6.4	2.4
52	打製石斧	B12 SR01	3類。基端に素材面を残す。磨滅。	安山岩	12.4	6.9	2.9
53	打製石斧	C2 表土	3類。やや磨滅。	安山岩	13.4	8.0	2.7
54	打製石斧	C28 表土	3類。刃部左半の裏面側がやや磨滅。	安山岩	13.1	8.4	2.9
55	打製石斧	B17 表採	3類。厚手。刃部の表面側が磨滅。	安山岩	13.1	7.8	3.4
56	打製石斧	E18 包含層	3類。左側辺中程に潰れ。刃部右半欠。	安山岩	14.8	7.9	3.4
57	打製石斧	F20 20列Ⅱ	3類。基端に素材面を残す。刃部がやや磨滅。	安山岩	15.1	12.4	3.4
58	打製石斧	C11 SR01	3類。	安山岩	15.5	7.2	2.2
59	打製石斧	B15 SR05	3類。左側辺下半に素材面を残す。磨滅が著しい。	安山岩	16.8	7.0	2.5
60	打製石斧	A21 SR04	3類。左側辺中程に潰れ。刃部の裏面側がやや磨滅。	安山岩	17.2	8.1	3.0
61	打製石斧	B1 SR02	3類。磨滅。	安山岩	16.8	9.6	3.3
62	打製石斧	C13 表土	3類。やや磨滅。	安山岩	16.9	7.6	3.7
63	打製石斧	C14 表土	3類。刃部がやや磨滅。	安山岩	17.1	8.4	3.3
64	打製石斧	B13 SR01	3類。刃部の裏面側がやや磨滅。	安山岩	18.4	7.1	3.6
65	打製石斧	C15 SR04	3類。両側辺下半に素材の縁辺を残す。	安山岩	18.4	8.8	2.7
66	打製石斧	E4 表土	3類。やや磨滅。	安山岩	19.8	9.9	3.8
67	打製石斧	C19 SR04	3類。基端に素材面を残す。磨滅が著しい。	安山岩	10.1	8.0	2.3
68	打製石斧	C0 SR02	3類。基端に素材面を残す。	安山岩	13.8	11.3	3.0
69	打製石斧	C1 SR02	3類。基端に素材面を残す。刃部の裏面側がやや磨滅。	安山岩	14.7	11.1	1.9
70	打製石斧	C0 SR02	3類。刃部が偏る。左側辺中程に潰れ。	安山岩	14.2	11.5	4.1
71	打製石斧	C0 SR02	3類。基端と左側辺上半に素材面を残す。	安山岩	14.1	9.0	2.8
72	打製石斧	D16 SR06	3類。刃部が磨滅。	安山岩	15.2	10.6	2.9
73	打製石斧	B0 SR02	3類。薄手。磨滅。	安山岩	16.6	9.6	1.9
74	打製石斧	C19 SR04	3類。磨滅が著しい。	安山岩	16.0	10.4	3.4
75	打製石斧	B13 SR04	3類。左側辺上位に素材面を残す。磨滅。	安山岩	16.2	10.1	3.3
76	打製石斧	C12 表土	3類。やや磨滅。	安山岩	16.2	12.3	3.3
77	打製石斧	D19 包含層	3類。左側辺上位に素材面を残す。やや磨滅。	安山岩	17.6	12.2	3.7
78	打製石斧	C10 10列Ⅱ	3類。基端に素材面を残す。刃部磨滅。	安山岩	17.4	12.0	3.8
79	打製石斧	A0 SR02	3類。	安山岩	18.4	9.8	3.3
80	打製石斧	E10 SR01	3類。磨滅。	安山岩	18.2	10.7	3.5
81	打製石斧	B15 15列Ⅱ	3類。刃部の裏面側が磨滅。	安山岩	18.7	11.6	3.1
82	打製石斧	D27 表土	3類。左側辺中程に潰れ。	安山岩	18.7	12.0	4.0
83	打製石斧	F18 包含層	3類。刃部磨滅。	安山岩	18.8	10.7	3.3
84	打製石斧	D14 表土	3類。右側辺上位に潰れ。刃部磨滅。	安山岩	19.1	12.1	2.9
85	打製石斧	D3 表土	3類。刃部の裏面側がやや磨滅。	安山岩	19.2	12.7	3.7
86	打製石斧	C20 SR04	3類。左側辺上半に素材面を残す。刃部がやや磨滅。	安山岩	24.4	13.6	5.3
87	磨製石斧	C4 表土	刃部に潰れ。やや磨滅。	砂岩	8.3	3.9	1.3
88	磨製石斧	表採	定角式磨製石斧。両側面に長軸方向の擦痕。	蛇紋岩	8.5	5.1	2.0
89	磨製石斧	C12 12列Ⅱ	裏面下半に短軸方向の擦痕。	砂岩	7.8	5.6	1.5
90	石庖丁	B13 表土	左半欠。	砂岩	5.3	8.0	0.9
91	石錘	B5 表土	打欠石錘。	安山岩	8.7	8.1	2.4
92	石錘	B0 表土	打欠石錘。	安山岩	9.2	7.6	2.6
93	敲石	B・C16 SR04		安山岩	15.7	5.3	4.5
94	敲石	B0 SR02	やや細長で扁平な楕円礫が素材。	安山岩	15.7	7.8	4.3
95	敲石	E16 包含層	やや厚手の楕円礫が素材。	砂岩	10.6	9.0	5.9
96	敲石	B18 包含層		砂岩	9.8	7.4	4.0
97	凹石	E9 表土	やや小形で扁平な円礫が素材。	砂岩	7.7	7.1	4.9
98	凹石	B1 1列Ⅱ	表裏中央が明瞭に凹む。	安山岩	7.9	6.9	4.5
99	凹石	A11 表土	厚手の円礫が素材。	安山岩	8.5	7.8	5.3
100	凹石	B0 SR02	やや磨滅。	砂岩	9.1	8.2	4.4
101	凹石	B18 包含層	磨滅が著しい。	安山岩	9.3	8.6	4.7
102	凹石	E18 SR06	やや厚手の楕円礫が素材。	砂岩	9.6	7.9	5.6
103	凹石	D10 SR01	表裏中央が明瞭に凹む。左下端欠。	砂岩	10.4	7.2	4.0
104	凹石	B0 SR02	上下端にも敲打痕をもつ。	安山岩	10.7	7.3	4.0
105	凹石	E9 SR01	表裏中央が明瞭に凹む。下端にも敲打痕をもつ。	安山岩	12.6	7.5	3.0
106	凹石	B16 表土	厚手の楕円礫が素材。	安山岩	11.7	8.6	6.0
107	凹石	C19 SR04	磨滅。	安山岩	12.6	10.1	5.7
108	石刀	D5 5列Ⅱ	背部に長軸方向の研磨痕。大半欠。	片岩	7.5	2.8	2.2
109	異形石器	B15 SR05	表裏中央に敲打痕を残す。左半欠。	安山岩	6.7	12.5	1.6

5 石製品 (第97・98図、図版第66)

(1) 構成と分布

第10表 石製品組成表

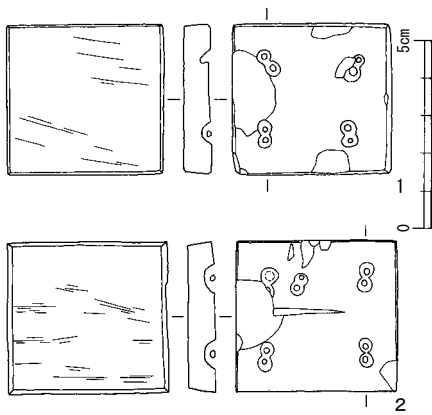
石質	硯	砥石		粉挽臼	茶臼		バンドコ	五輪塔	計
		中砥	仕上砥	下臼	身部	台部	横口形	空風輪	
凝灰岩	1	11							12
笏谷石							2	1	3
頁岩			8						8
粘板岩	3		1						4
砂岩		6		1					7
花崗質砂岩					1	1			2
計	4	17	9	1	1	1	2	1	36

石製品の構成を第10表に示す。文房具、研磨用工具、飲食用具、暖房具、信仰用具があり、砥石以外少量だが組合せは多様である。また、古代の巡方が2点あり本節で記す。

石質は在地産が多く、中砥に浄慶寺産や茶臼に小和清水産、バンドコに笏谷石が用いられる。遠隔地産は、硯に高嶋産、仕上砥に鳴滝産がある。

石製品は、A・B 9～11でSD 01・02とSR 03の周辺から多く出土し、B～D 20～22とE・F 24・25でSD 27周辺にもややまとまる。器種別で分布が偏り、中砥は散在するが、硯と仕上砥及び茶臼はA・B 9～11の範囲にまとまる。

(2) 石製品の形態



第97図 石製品 (1) (縮尺1/2)

巡方 (1・2) 共に平面は平滑に仕上げられ、裏面の稜は縁取りされる。裏面に2孔1対の潜り穴を1は4対、2は5対もつ。2は、左上方の潜り穴が未貫通であり、穿孔に失敗している。裏面の左端中程が剥離された後、内方へずらして潜り穴が作出されている。また、1はSB 09のP 10、2はSB 08のP 05と隣在する柱穴から出土し、石質や形状・法量等の形態的な特徴も共通することから、同一の石帯を構成していたと推察される。

硯 (3・4) 共に長方硯で細い縁帯をもち、裏面は平坦に作出される。3は、側面が垂直に立ち上がり、硯頭側の隅は入角となる。下端に海部が僅かに遺存し、墨痕がみられる。4は、側面が緩く傾斜して立ち上がり、硯尻は円弧状に作出される。また、陸部中央は使用により凹状となる。

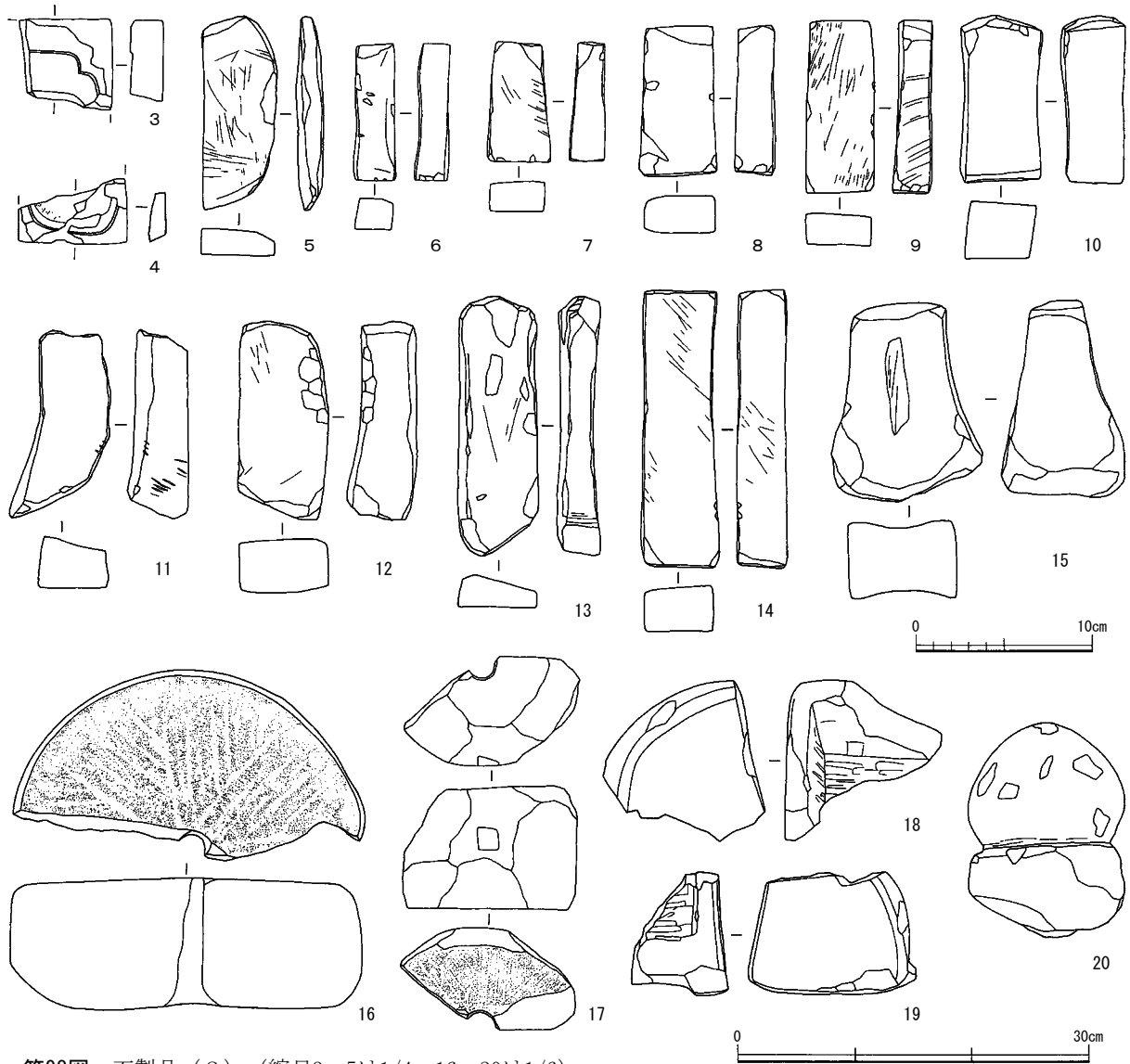
砥石 (5～15) 石質から5は仕上砥、6～15は中砥と考えられる。5は、板状の長方形を呈すが、右側辺が湾曲して反る。裏面以外が砥面である。6～14は、角柱形を呈す。6と7はやや小形で、上端以外が砥面である。8～10は上下端以外が砥面で、8と9は下端と側面に鋸による成形痕がみられる。11と12は、側辺が湾曲して反る。11は、左側面が砥面で他は剥離面である。12は、上下端と裏面以外が砥面である。13と14はやや大形で、上下端以外が砥面である。14は、上下端に斜行する鋸による成形痕がみられる。15は、厚手の角形を呈し、側辺が湾曲して反る。上下端以外が砥面で、表面中央に筋状の擦痕がみられる。

粉挽臼 (16) 下臼。臼目は8分画で、副溝を6～7条もつ。臼面は緩くふくみをもたせ、周辺は使用により磨滅し円滑になっている。また、下面は丸ノミで整形されて僅かにえぐりをもつ。

茶臼 (17) 身部で、小和清水産と考えられる。臼面は8分画で、副溝を6条もつ。また、側面に挽木取付孔をもつ。

バンドコ (18・19) 共に前面に上向きの横口が開き、内部は四角く削り抜かれる。奥壁は丸ノミで横方向、側壁内面は平ノミで口から奥壁へ向け整形される。

五輪塔 (20) 空風輪。空輪と風輪の区分が明瞭で、くびれに溝状の間隙がある。空輪頂部はすぼまり、柄が僅かに遺存している。

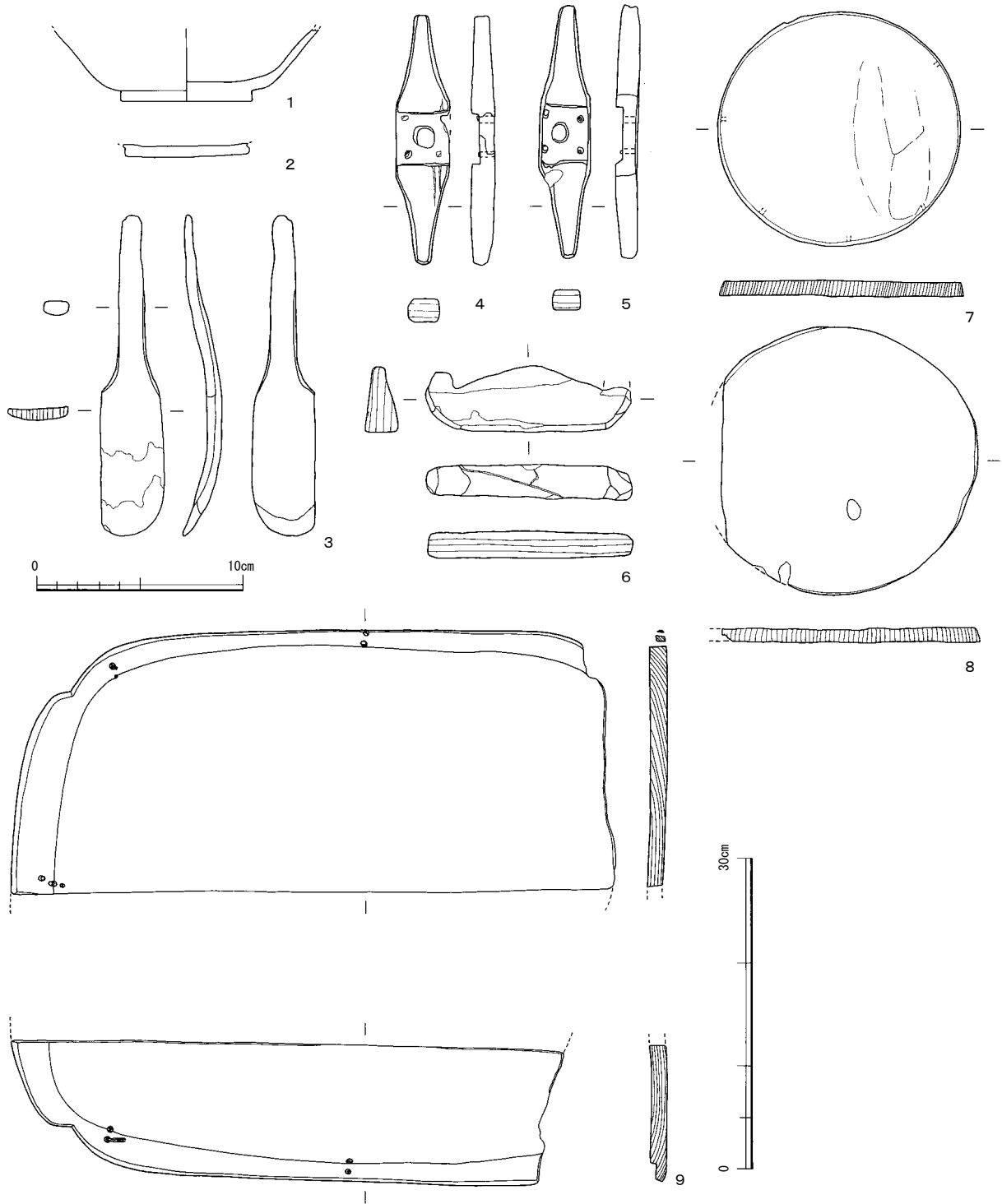


第98図 石製品(2) (縮尺3~5は1/4、16~20は1/6)

第11表 石製品観察表

※法量はcm

番号	器種	出土地	形態	石質	器長	器幅	器厚
1	巡方	E6 SB09 P10	表面に横方向、裏面に上下方向の擦痕。	粘板岩	4.1	4.2	0.7
2	巡方	E6 SB08 P05	表裏面に横方向の擦痕。	粘板岩	4.1	4.3	0.7
3	碗	B9 表土	裏面は縁取りされる。大半欠。	凝灰岩	5.3	5.3	1.9
4	碗	B10 表土	高嶋碗。陸部左半に斜行する擦痕。大半欠。	粘板岩	3.8	6.2	1.0
5	砥石	E9 表土	仕上砥。表面に不定方向の擦痕。磨滅。	頁岩	11.2	4.3	1.7
6	砥石	E8 表土	中砥。左側面下半に斜行する擦痕。	凝灰岩	7.8	2.5	2.0
7	砥石	B24 24 列トレ	中砥。表面に斜行する擦痕。	砂岩	6.9	3.7	2.0
8	砥石	D22 包含層	中砥。浄慶寺産。右側面下部に表裏方向の擦痕。	凝灰岩	8.6	4.5	2.2
9	砥石	C16 表土	中砥。表面と左側面に斜行する擦痕。	凝灰岩	10.0	3.8	2.2
10	砥石	F22 SK28	中砥。やや厚手。	凝灰岩	9.7	4.7	3.6
11	砥石	A11 SP15	中砥。浄慶寺産。両側面に斜行する擦痕。	凝灰岩	10.8	5.7	3.5
12	砥石	B11 表土	中砥。表面に不定方向の擦痕。	凝灰岩	11.4	5.1	4.0
13	砥石	D7 表土	中砥。浄慶寺産。薄手で表面に不定方向の擦痕。	凝灰岩	14.8	4.6	2.5
14	砥石	C25 表土	中砥。浄慶寺産。表面と右側面に斜行する擦痕。	凝灰岩	16.0	4.6	2.9
15	砥石	C13 土器溜り01	中砥。表裏面は凹む。磨滅。	砂岩	11.5	8.6	7.0
16	粉搥臼	D21 SD29	下臼。半欠。	砂岩	16.3	30.0	11.0
17	茶臼	A9 SD01	身部。芯棒孔上端に漆が僅かに付着。2/3 欠。	花崗質砂岩	9.3	15.1	10.8
18	バンドコ	E24 SD37	横口形。内面下部に煤。3/4 欠。	笏谷石	13.7	13.6	13.9
19	バンドコ	B10 SR03	横口形。外面に煤顕著。3/4 欠。	笏谷石	10.7	8.2	14.4
20	五輪塔	B11 SR03	空風輪。磨滅が著しい。1/3 欠。	笏谷石	18.4	13.5	13.5



第99図 木製品 (縮尺1~8は1/3、9は1/6)

第12表 木製品観察表

※法量は cm

番号	器種	出土地	形態	樹種	口径 / 器長	底径 / 器幅	器高 / 器厚
1	漆器碗	B12 SR01	口縁部欠損。	ケヤキ	(16.9)	8.4	(4.7)
2	漆器碗	B13 SR01	同一個体の体部片が数点あり。	ケヤキ	—	8.2	(0.9)
3	匙	E8 SK07	皿部の表面中央と裏面先端が円滑となっている。	ヒノキ属	15.6	3.2	1.9
4	糸巻	E9 SR01	釘孔の一部が欠損。	アスナロ属	12.1	2.6	1.2
5	糸巻	E9 SR01	軸孔が側方へやや偏る。	アスナロ属	12.3	2.6	1.2
6	異形木製品	E9 SR01	一部欠。	アスナロ属	3.2	10.0	1.8
7	容器	D12 SE04	底板。表面に削痕が数条みられる。	—	11.4	11.8	0.9
8	容器	B13 SR01	底板。左端欠損。	—	13.0	(12.4)	0.8
9	容器	D12 SE04	蓋板。SE04 井戸側下段の北側と東側の縦板に転用。	スギ	(53.4)	(58.2)	1.8

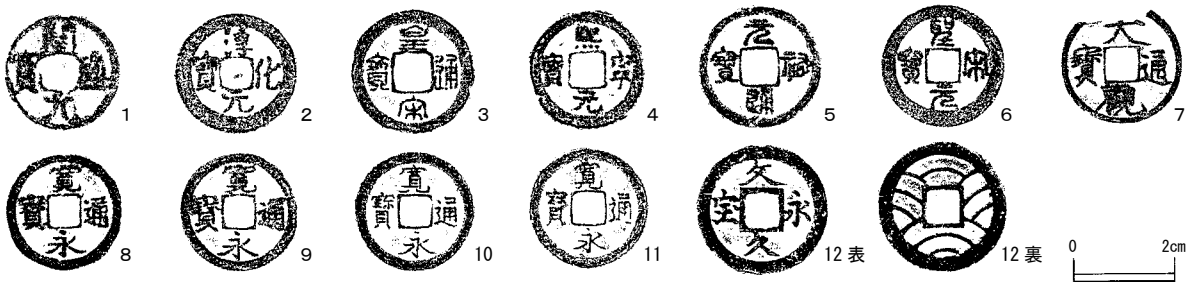
6 木製品 (第99図、図版第67)

木製品は、S B 29でP 05の柱根、S E 02～04で井戸側の木組部材、S E 14の曲物もあるが、9点を図示した。内訳は、漆器椀2点、匙1点、糸巻きの横木2点、異形木製品1点、容器の底板2点と蓋板1点である。E 8・9でS K 07とS R 01、B 12・13でS R 01、D 12でS E 04から出土した。

1と2は、漆器椀である。上塗りは内外面とも黒色だが、高台内に漆は塗布されず、漆絵は施されていない。顕微鏡による塗膜断面の観察では、柿渋に木炭粉を混和した炭粉渋下地が用いられ、上層に地色の漆が塗布されていた。また、1は2よりやや大形で、体部が緩く内湾して立ち上がる。3は、匙である。柄部はやや細くのび、皿部との境で内湾する。皿部は平面が篋状を呈すが、側面は湾曲している。また、裏面の先端に丸みをもつ。4と5は、糸巻きの横木である。ほぼ同形同大であり、中央の相欠きで十字に組み合わさる。側面は扁平な板状だが、上下両端は先細りで丸く作出されている。共に軸孔の周囲に釘孔が4箇所あり、断面が方形状の木釘が遺存している。また、裏面には未貫通の釘孔が数箇所みられる。6は、異形木製品である。左上端は鉤状に作出され、上方へ向け突出している。上端中程と下端の左右で緩く屈曲し、断面はやや厚手の三角形状を呈す。4や5と同じ樹種で近辺から出土しており、紡織具の類とも考えられる。7～9は容器で、7と8は底板である。7は、整った円形状に作出されている。側面に釘孔が5箇所程みられ、木釘が遺存している。8は、粗く作出されてやや不整な円形状を呈す。9は、蓋板である。大形の隅丸方形で、隅部は削り込まれて入角状を呈す。内面に段をもち、器体周辺は縁取りされている。端部中央と隅部には2孔1対で5箇所みられ、内3箇所には樞紐が遺存している。また、割れ面は平滑に再加工され、S E 04井戸側下段の縦板に転用されていた。

7 銭貨 (第100図、図版第67)

銭貨は12点あり、主にB～E 8～12の表土から出土して散在する。時代別では、中世の渡来銭は南唐銭で1の開元通寶、北宋銭で2の淳化元寶、3の皇宗通寶、4の熙寧元寶、5の元祐通寶、6の聖宗元寶、7の大観通寶が各1点ある。3と5、6は書体が篆書である。近世は、8～11の寛永通寶が4点、文久永寶が1点ある。8と9は古寛永、10と11は新寛永と考えられ、12は書体が略宝である。



第100図 銭貨 (縮尺2/3)

第13表 銭貨観察表

										※法量は cm と g									
番号	名称	出土地	時代	初铸年	外径	内径	銭厚	重さ	備考	番号	名称	出土地	時代	初铸年	外径	内径	銭厚	重さ	備考
1	開元通寶	D10 表土	南唐	960	2.3	2.1	0.1	1.6	磨減	7	大観通寶	C9 表土	北宋	1107	2.4	2.1	0.1	2.2	一部欠
2	淳化元寶	B16 表土	北宋	990	2.4	1.8	0.1	2.1		8	寛永通寶	B8 表土	江戸	1636	2.3	1.9	0.1	2.5	1期古寛永
3	皇宗通寶	E11 表土	北宋	1038	2.4	1.9	0.1	2.6	篆書	9	寛永通寶	E10 表土	江戸	1636	2.3	1.9	0.1	2.3	1期古寛永
4	熙寧元寶	B9 表土	北宋	1068	2.3	1.8	0.1	2.7		10	寛永通寶	B16 表土	江戸	1697	2.3	1.9	0.1	2.6	3期新寛永
5	元祐通寶	B11 SR01	北宋	1086	2.4	2.1	0.1	2.6	篆書	11	寛永通寶	C8 表土	江戸	1697	2.3	1.9	0.1	2.2	3期新寛永
6	聖宗元寶	E12 表土	北宋	1101	2.4	1.9	0.1	3.3	篆書	12	文久永寶	A-1 側溝	江戸	1863	2.6	2.1	0.1	2.3	略宝

第2節 太田地区の遺物

1 弥生土器・土師器他（第101～103図、図版第68～70）

太田地区出土の弥生土器・土師器は小矢戸地区とほぼ同じ時期と考えられ、その主体となる時期は弥生時代後期から古代のものである。ここでも多く図化できたのは小矢戸地区と同じく、旧河道であるSR 09・11から出土した弥生時代後期の土器で、これに古墳時代以降の土器を若干含む。古代の土器の多くは旧河道が埋没する過程で堆積した埋土からの出土が多い。弥生時代から古墳時代まで旧河道であった低地部が、それ以降に安定した地表面となり、古代に集落域が東側に広がったことが窺われる。

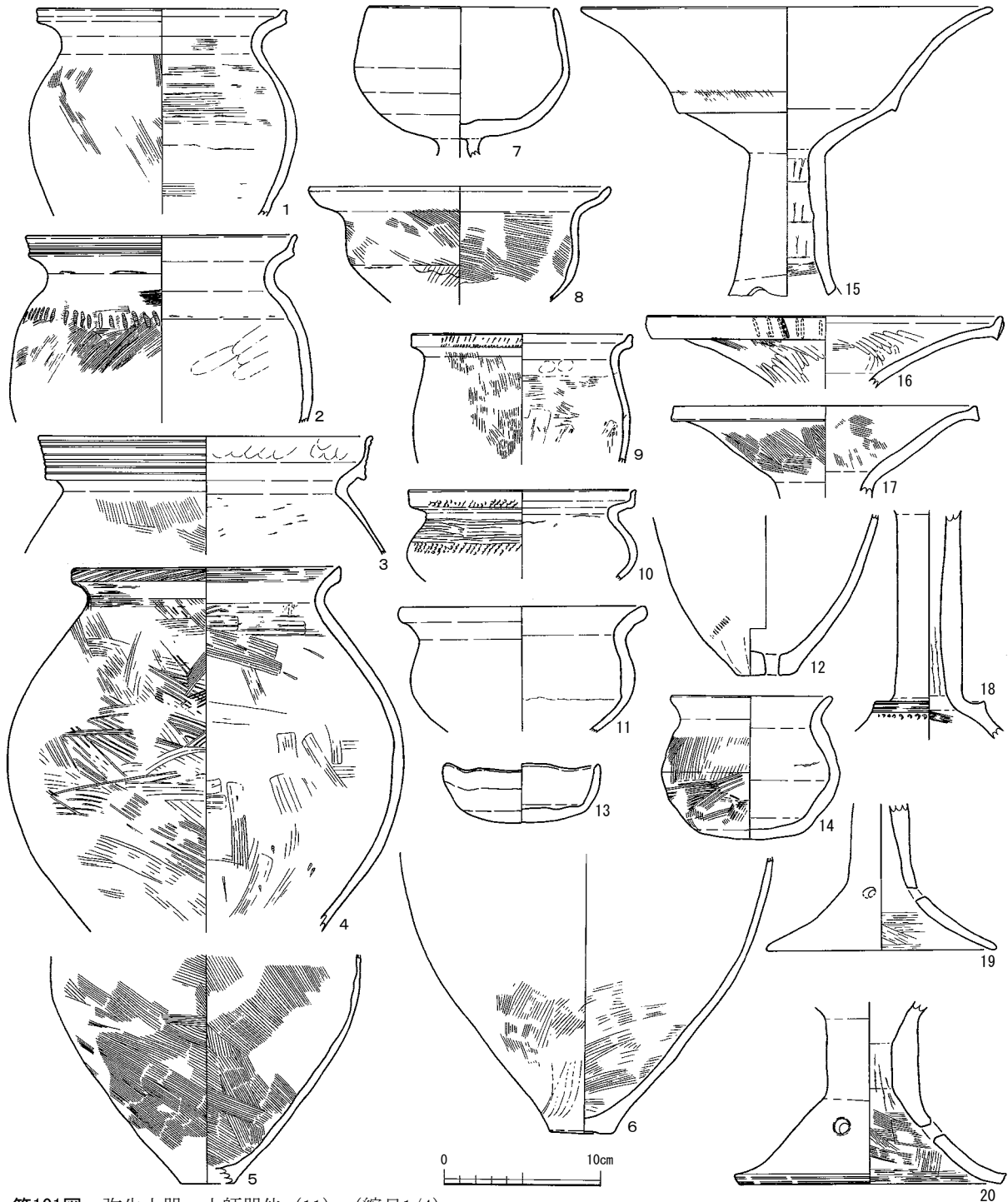
図化した土器で主体となる弥生時代後期に先行する時期と考えられるのは、弥生時代でも中期と判断した壺3点である。条痕系の壺の口縁部(21)は、残された部分が少なく、口径を明確にすることができないが、大型のものであろう。太頸壺の口縁部から胴部上半までのもの(32)は、櫛描文系の壺である。また大きく胴部が張る長胴のもの(22)は、さらに古い縄文時代晩期の壺棺の器形であるが、この土器は器高が30cmにも満たない類例が確認できないため、その大きさからここでは中期の範疇とした。

弥生時代後期の甕は、ここでは2点しか図化できていないが、有段口縁が主体になると思われる。肩部に刺突列点を巡らせるもの(2)と、有段口縁の内面に連続指頭圧痕を残すもの(3)で、いずれも口縁部外面に擬凹線を施文する。頸部がすばまらなく口径に近いことから甕としたもの(4)は、口縁に面を設けるが、擬凹線は施文されない。胴部下半のみ図化できた2点(5・6)は、甕か壺かどちらかが判断できないが、器壁がやや薄めなのでここでは甕である可能性が高いと判断した。

壺は、中期の3点を除き14点を図化した但个体差が大きい。小矢戸地区の基準に従って説明するが、同地区の壺の様相とも異なる。壺も口縁が立ち上がり有段となるか、面を設けるものが殆どである。いずれも頸部が伸びて長くなるものと、胴部から屈曲する頸部からすぐに口縁部となる2つのタイプがある。前者には口縁端部を上方に摘み上げるもの(23・24)と、端部に面を設けるもの(34・35)、有段口縁となるものがある。前者でも端部に面を設ける2点(34・35)は、東海から近江に多い壺である。有段口縁のものには擬凹線文はないものの、北陸によくあるもの(26)と、有段口縁ではあるが受口状口縁と呼ばれる近江系のもの(27)がある。また有段口縁の壺としたが、頸部がすばまらなく口縁部から頸部が間延びして胴部となる(25)、あまり類例のないものがある。口縁部から頸部までは甕で、頸部から胴部は壺の特徴を示す、甕と壺が折中されたような特殊な器形である。胴部から頸部がすぐに屈曲して短いものは、端部に面を設けるもの(29・30)と、有段が不明瞭なもの(31)である。これら3点とも肩部が張らないで、胴部の最大径が中位から下半にくるものと考えられる。有段口縁としたもの(31)も、胴部の最大径が中位付近で最も大きくなると考えられる。口縁部の有段は明瞭ではなく、口縁の中程で摘み上げるようにして薄くなる程度で、外面の有段も明瞭ではない。有段口縁ではあるが、有段となる口縁部の立ち上がりが僅かに突出し、口縁端部が丸くなるもの(28)は、布留式後半以降に出現する山陰系である。太い頸から立ち上がった口縁が有段となる。他に丸みのある胴部から「く」の字に頸部が屈曲して、そのまま開いた口縁がおわるもの(33)がある。大きさと比較すると器壁が厚く、弥生時代後期の壺としては明らかに異質で、古墳時代以降に降る時期のものである可能性が高い。やや小型の壺には丸い胴部から口縁が垂直に立ち上がり、端部が小さく外反するもの(37)がある。これと同様な器形だが、口径が器高よりも大きいので鉢としたもの(14)がある。口径が壺としたもの(36)よりも1.5倍と大きい、器高はほぼ変わらないので扁平な器形で鉢に分類するのにふさわしい。底部と胴部への立ち上がり、さらに口縁部への開き方などこの2点は非常に類似する。最も小さい小型の壺

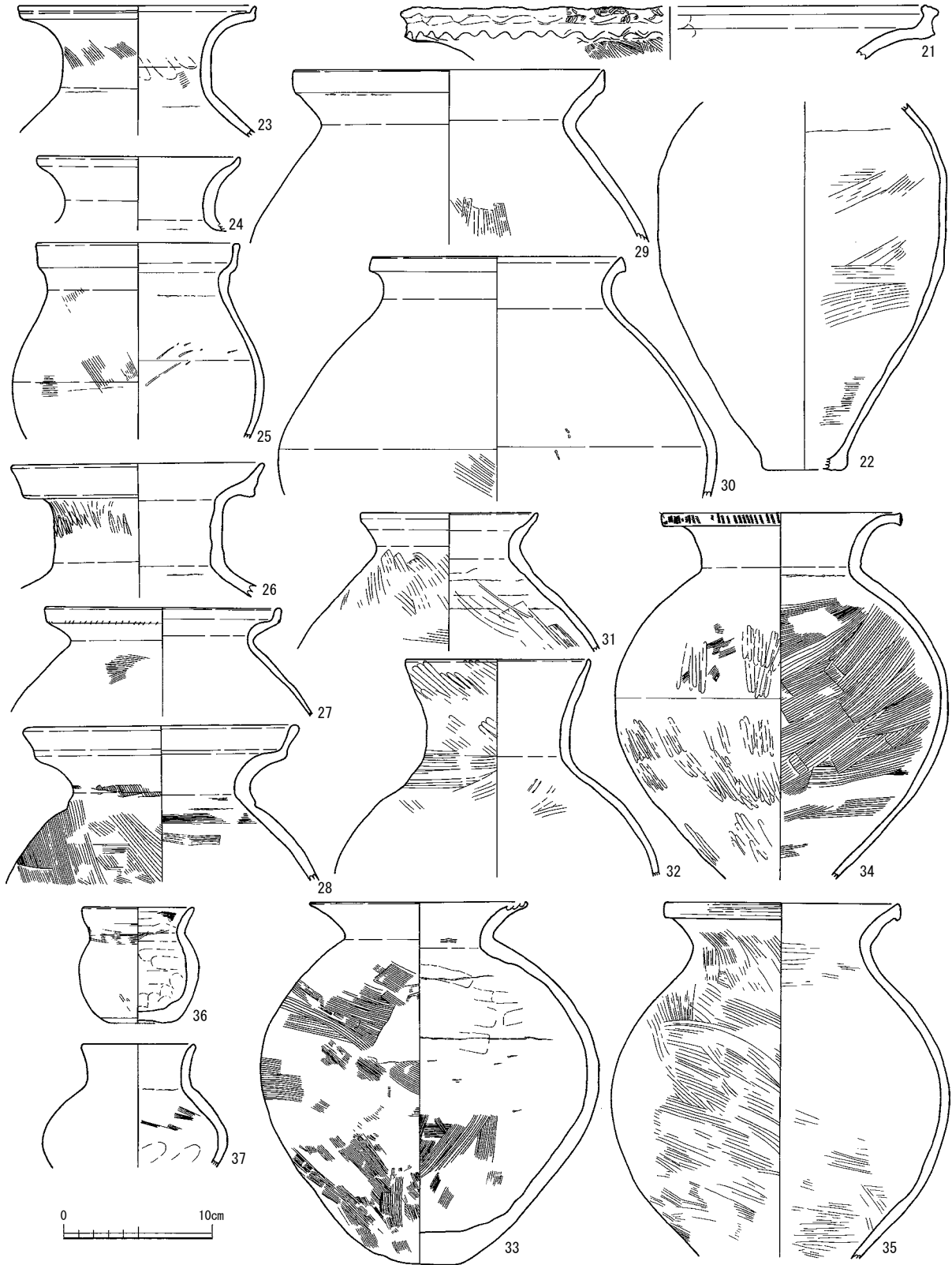
(36) は、平底とは呼べない扁平で平らな底から丸みのある立ち上がりの胴部で、殆どすぼまらない頸部から口縁部が小さく立ち上がる。壺の最後として小矢戸地区でも2点ほどあった本県では類例が見当たらないものがある。頸部が丸く屈曲し、小さく立ち上げた口縁端部に面を設けるもの(1)である。

鉢はすでに壺のところで述べたもの(14)を含めて6点図化した。うち4点は有段口縁を基本とするものである。有段口縁でもこの4点の内2点は明らかな受口状口縁の近江系である。典型的な近江系受口状口縁の鉢の器形である扁平な胴部のもの(10)には、楡描直線文の下と立ち上がる口縁下端に刺突列点文が巡る。胴部が長くなるもの(9)は近江系受口状口縁の鉢の典型でなく、口縁への刺突も下



第101図 弥生土器・土師器他 (11) (縮尺1/4)

端ではない口縁帯の中央に巡り、胴部の施文もない。さらに口縁が有段状に立ち上がるが、立ち上がりの屈曲に丸みのあるもの（8）や、胴部上半から口縁部が全体に厚い器壁で、有段口縁の形をしているが口縁が有段にならないもの（11）などは、有段口縁の規範から外れつつあるものとする。北陸に典



第102図 弥生土器・土師器他（12）（縮尺1/4）



第103図 弥生土器・土師器他 (13) (縮尺1/4)

典型的な有孔鉢は、口縁部を欠く1点(12)を図化した。小さいながらも底部が明確ではあるが、器形は典型的な砲弾型である。また丹後から北陸に多く見られる脚台付鉢も1点ある(7)が、本来は器壁がきれいに磨かれるなど精製された土器であるが、本遺跡のものは下半に輪積痕を残すなど典型的なものではない。また脚台は付かないが、輪積痕を残す坏(13)は、調整などから時期の判断に迷う。

高坏は脚部下半を欠く(15)が、有段の坏部からラップ状に口縁が大きく外反して開く。この他に高坏の脚と考えられるものが2点ある。棒状筒部の下が有段となるもの(18)、脚部上半から屈曲して「ハ」の字に端部が開くもの(19)である。

器台は受部を2点、脚部を1点図化した。受部は端面を上下に拡張して面を作るが、やや外傾するもの(16)と、内傾するもの(17)で、前者には棒状浮文が数条貼り付けられている。脚部(20)は脚の径に比して、太く器壁の厚い筒部で弥生時代後期の脚部としてはやや異質である。

明らかに弥生時代後期より後出する時期のものについては15点を図化した。15点のうち甕が10点、甌1点、坏3点、土製品1点である。

甕は大型と小型の2種類に分かれる。大型のうち2点は長胴で、頸部の屈曲ののち開いた口縁が立ち上がり有段となるもの(38・39)で、胴部上半をカキ目調整ののち、胴部下半の外面に併行タタキ痕、内面に青海波のタタキ痕を残す。大型のうち3点は前者ほどには長胴にならない丸みのある胴部だが、明らかに長胴を指向し、頸部が緩く屈曲して口縁が外反する。外面の調整はハケが基本だが、内面はハケ調整ののちケズリ(41)、またはケズリのみもの(44)がある。口縁端部を丸くするもの(41・42)が基本と考えられるが、口縁端部でも内面を平坦にするもの(44)は例外であろう。これらの甕の下半は内面がケズリ調整の胴部下半のみ図化できた土器(45)であろう。小型で口縁が残る甕は2点あるが、大型の甕より頸部の屈曲が弱い。2点とも周辺の他の遺跡でよく見られる小型の甕とは異なる。頸部の屈曲が弱く口縁もあまり大きく開かないもの(46)は、胴部が張らないで頸部からほぼ直線のままに下半へとなり、器壁も口径と比較するとかなり厚手である。口縁がやや伸びて開くもの(47)は、端部を摘み上げて大型のものにあるような有段とするが、胴部の最大径が下半となる下膨れの器形である。頸部より上の口縁部を欠く丸い小型の甕胴部のもの(48)も、内外面ともに丁寧なハケ調整である。

ほぼ全体が復元できた甌(40)は、平底ではないがほぼ平坦な丸底で、胴部全体の器形が正方形に近い。頸部の屈曲も弱く、口縁部をあまり開かないで立ち上がりも小さい。把手は基部を残し中ほどから先端を欠くため形状が不明である。

坏は一般的な口径の10cm前後のもの2点(49・50)と、底部片の一部だけなので口径は推定できないが、その倍近い20cm前後の深い坏と考えられる破片(51)もある。

これら土器のほかに土馬の脚と考えられる土製品(52)を図化した。指による成形の痕跡を明瞭に残す円柱状を呈し、円柱中央芯の部分の縦方向に管状となる隙間を残す。これは粘土を円柱状にまとめる際の芯とした棒状の木の名残と考えられる。端部の一方向を面取りし、剥離痕が明瞭な突起状を呈する。この突起状の部分の部分を胴部に差し込むためのものと考えている。この土製品の性格を特定することについて様々な可能性を考えたが、古代の建物が整然と並ぶ「官衙的」状況であることなどから、土馬の脚とするのが妥当であると判断した。これについては本県でもまだ出土事例も少なく、出土している遺跡の性格も十分に検討されていない。奥越盆地では初例でもあり、本遺跡の建物群の性格を検討する上にも重要なものであると考えられる。

小結

今回の報告では弥生時代後期を主体とする土器を多く図化することができた。ここでは小矢戸地区と太田地区の両地区から出土した土器について、周辺の遺跡と比較しながら本遺跡の土器についてまとめておきたい。

本遺跡の位置する大野盆地西部を流れる赤根川は、真名川、そして九頭竜川と続く支流の小河川ながら、その流域ではここ20年ほどで多くの遺跡が発掘調査され、いずれの調査でも弥生時代後期の集落域が確認されている。それらから出土した土器を分類し報告する場合、北陸地方南西部に含まれる福井県では隣接する石川県加賀地方を中心に確立された「法仏・月影式」編年、またはそれ以降の古墳時代までを含む「漆町編年」を利用するのが基本である。今回の報告も、これまでと基本的に同じであるが、その様相は発掘調査の事例が多い福井平野とも大きく異なる。

発掘調査が少なかった約20年前までは、大野盆地の弥生時代を代表する土器として山ヶ鼻古墳群2号墓出土の彩文土器が注目されていた。平野部での集落域の事例として平成5年(1993)に調査された犬山遺跡では、北陸の有段口縁土器が主体ながらも、受口状口縁土器が多数存在し、隣接はしていないが近江(滋賀県)との関連が想定された。この報告に前後して、尾張を中心とする東海地方の土器様相を示すと思われていた美濃でも西部(大垣市周辺)から中濃(特に美濃市周辺)の平野部の山際と、山間部では甕や鉢の口縁が受口状口縁となるものが多いことが判明し、先の山ヶ鼻古墳群の土器と結びついた。今回の報告でも点数は多くはないが受口状口縁の土器は図化し、さらに典型的ではないが、尾張周辺の影響を受けた壺をいくつか指摘した。ただし本遺跡の東海系土器には赤彩などの加飾される傾向があまり顕著にみられない。北陸地方でも大野盆地は他の地域よりも東海地方との繋がりを強く認めることができるが、この状況が盆地または奥越すべてに指摘できるような単純な状況ではない。端的な例として、本遺跡の南約6.5kmにある下黒谷遺跡では、北陸的な様相がより明確であり、その東近くに位置する上舌遺跡でも同様である。ただし下黒谷遺跡では高坏にも北陸系が多く目立つのに対して、上舌遺跡では高坏のほとんどが東海系である。また北側の山地を挟んだ北東約7kmの勝山市鹿谷地区志田神田遺跡は、下黒谷遺跡の状況に近い。このように大野盆地を中心とする奥越では、少なくとも弥生時代後期の土器様相は福井平野などの北陸の主要部分とも異なるが、その違いは単純に距離の遠近の問題だけではない。大野盆地内の遺跡でも北陸的、東海的な両地域の様相が混じり合う遺跡もあり、また甕や高坏などの器種によってもその強弱が異なる。地域内部の違いは土器だけでは語れないが、現在残された普遍的な遺物の多くが土器である以上、まずは土器の分析から進めていく方法が現段階で最も可能である。

車社会の現代においては、交通を遮断する大きな要因である「山間地」であるが、現状では遺跡が「見えない」この山間部を介して、隣接地との関連をどのように考えていくか、今後も異なる視点や方法を用いて分析を進める必要がある。

2 須恵器（第104～106図、図版第71～73）

太田地区出土の須恵器について報告する。なお、古代に属する窯焼成と考えられる特殊な土製品、施釉陶器についても、ここに含めて報告する。

表土包含層出土の須恵器（第104・105図）

1・2は蓋である。1は、7世紀前半の蓋Gである。2は摘みを破損するが、口縁端部の処理は丁寧で8世紀後半に属する。3～18は無台坏である。3は坏・蓋が逆転した直後の製品で7世紀前半に属する。4～18までの坏Aはどの個体も口縁部の立ち上がりが緩やかである。14には「侍丁」、16にはW字状の記号墨書が確認できる。16は皿状の形態を呈しており、この中でも最も新しい。いずれも8世紀後半から9世紀に属する。

19～27は有台坏である。19～21の大型の坏Bは高台の成形、調整が粗雑化しており、8世紀後半以降に属する。22～25の小型坏Bについても口縁部の立ち上がりが緩やかで、同時期の製品と考えられる。26・27の碗はともに9世紀の製品と推定できる。28の盤についても、高台があまり踏ん張らず、口縁端部を丸く仕上げる。8世紀後半以降の製品と推定できる。

29～33は皿である。29～31は器高も高めで、口縁部も鋭く立ち上がる。8世紀中頃までの製品の様相を呈している。32・33は口縁部の立ち上がりも緩やかで、器高も低い。8世紀後半から9世紀に属する。

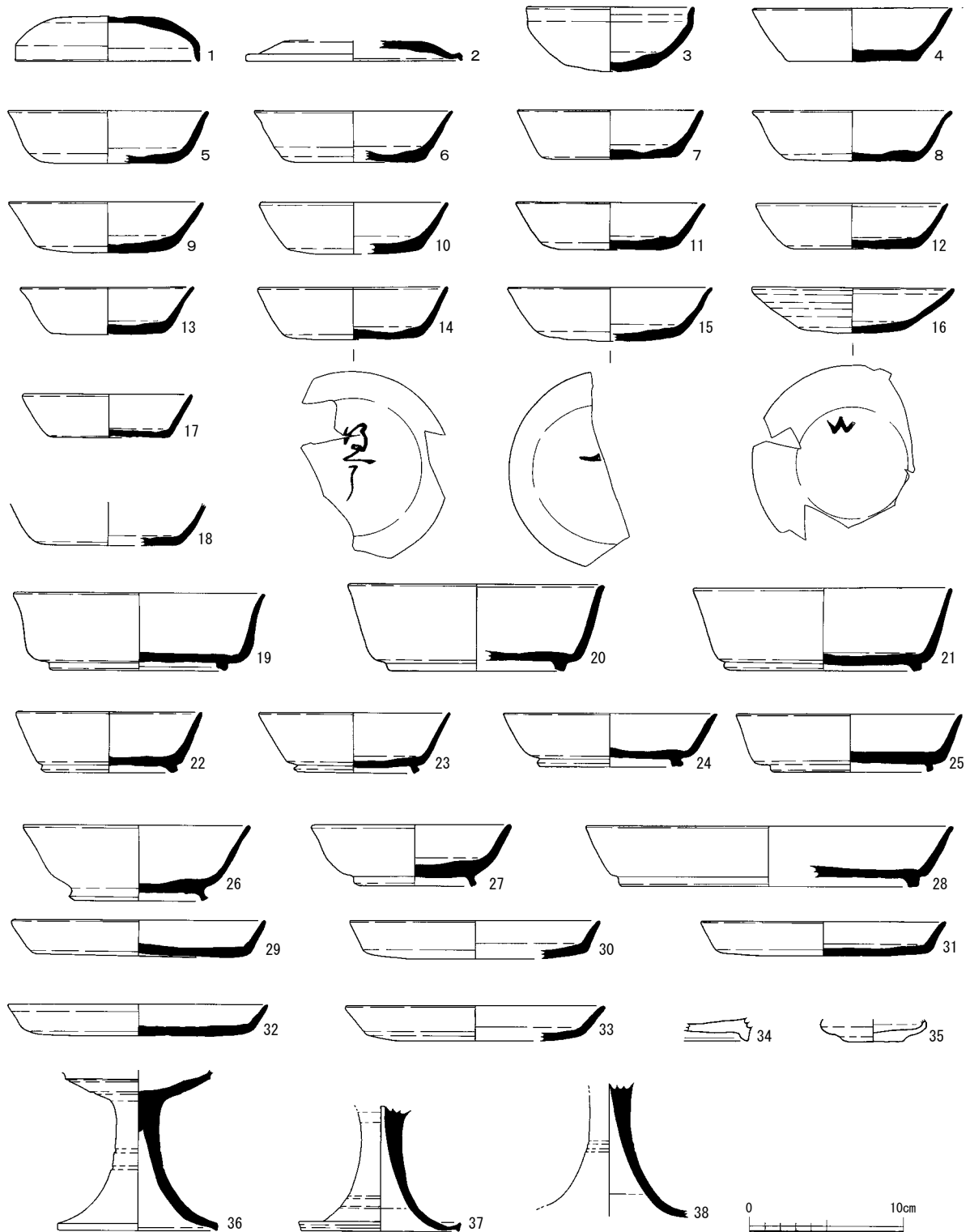
34は、緑釉陶器の碗である。高台は、削り出し高台である。断面は歪な台形を呈しており、高台外側の先端が接地する。全体に施釉されているが釉の厚さは薄く、所々釉が禿げて胎土が露出している。釉は薄緑色である。胎土は焼成が良くなく、やや生焼けであることから、低火度で一次焼成が行われていたものと推測される。残存状況が悪く断言できないが、トチン等の窯道具の痕跡は認められない。したがって、直接重ね焼きされていたものと推測される。生産地は東海地方とは想定し難く、近畿地方の緑釉陶器窯で生産された製品であると推察される。

35は、灰釉陶器の耳皿である。底部は平底で、糸切痕が認められる。口縁部を2方向折り曲げると思われるが、口縁部は残存していない。屈曲する腰部辺りまで1方向のみ残存している。内面のみ施釉されており、施釉方法はハケヌリと思われる。外面に自然釉が認められ、釉が垂れて底部まで達している。生産地は東海地方であるが、何処の灰釉陶器窯の製品かは不明である。施釉方法がハケヌリである点を考慮すれば、猿投編年K-14からK-90号窯式併行期までの期間であると考えられる⁽¹⁾。したがって、猿投編年K-90号窯式併行期に該当し、年代観は9世紀後半代と想定しておきたい。

36～38の高坏は、36のように碗状の坏部を有する形態で、いずれの個体も7世紀中の製品である可能性が高い。

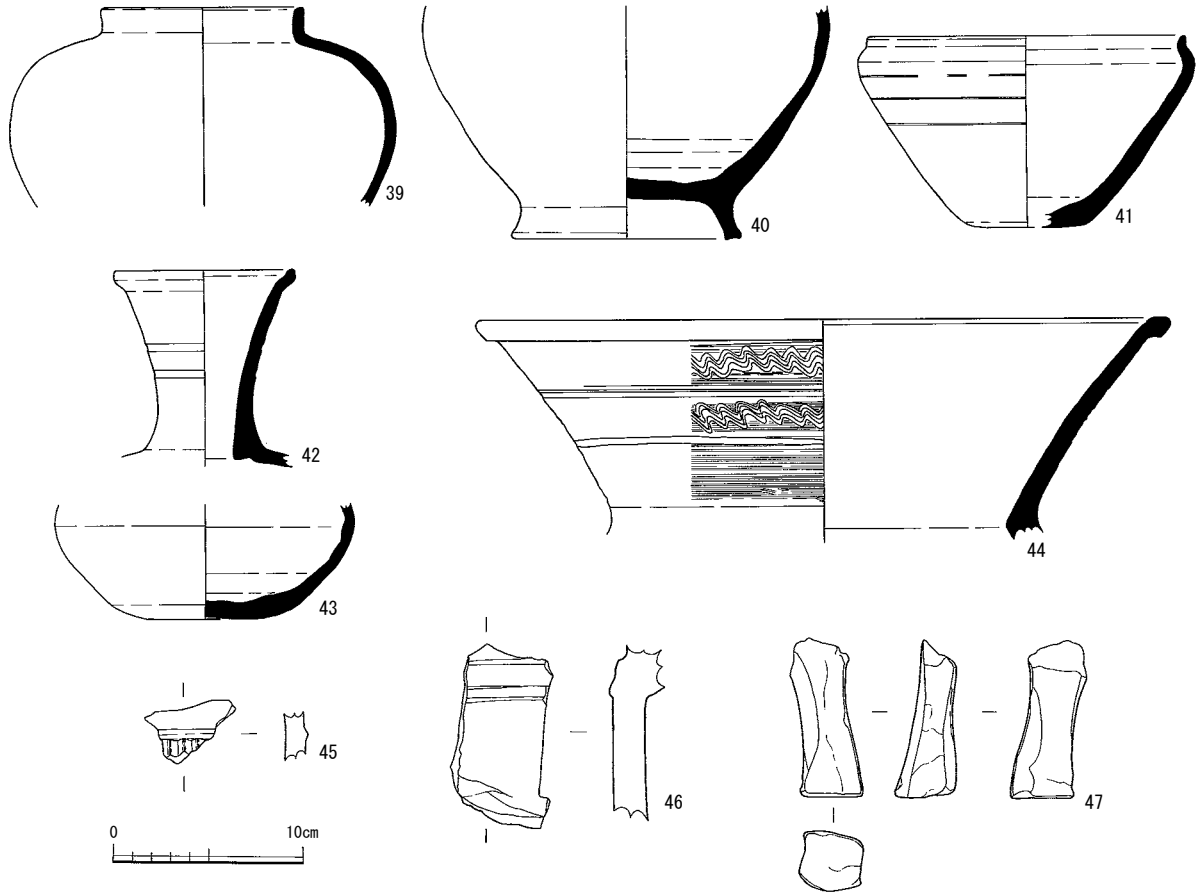
39・40は短頸壺である。39は直立する口縁部で肩が張り出す新相のもので、8世紀後半以降に属する。41は鉄鉢である。平底で、口縁部を短く外反する。胴部には2条の沈線がめぐる。8世紀後半以降の製品である。42は長頸瓶の頸部である。頸部に2条の太い凹線がめぐる。43は長頸壺の胴部から底部片である。平底で胴部が外側に強く張り出す。42・43ともに8世紀後半以降に属する。44は大甕である。口縁部は外方に引き伸ばされる形態で省略化が確認できる。太い凹線2条の上に粗い波状文が組み合わされて施される。8世紀後半以降でも9世紀に属する可能性が高い。

45～47は、瓦質土製品である。報告分以外にも破片が存在する。破損が激しいため、図化可能個体のみ掲載した。胎土、焼成ともに共通しており、すべて瓦塔であると推定できる。45は浮き彫りによる屋根の表現がある。椀状の横木表現とおもわれる凸線から、縦方向の屋根部材が表現されている。本来



第104図 須恵器 (15) (縮尺1/4)

46 のような部分から屋根として伸ばされていた様である。46 は塔の壁部分と推定できる。右側の直線部分は透孔状に成形されており、窓もしくは出入口の表現であろう。上部外面は外側に伸びるようであり、ここから先に45 のような表現があったと推定できる。上端は完全に欠損しており、塔の全容は復元することができなかった。47 は45・46 とは異なり、瓦塔周囲の柵部分、または支柱と推定できる。上部は欠損しているが、側面や、底面は部分的に欠損しているものの、これで本来の形態をとどめてい



第105図 須恵器 (16) (縮尺1/4)

る。瓦塔本体と比較すると、表面の成形や調整はやや粗雑である。

瓦塔は生産数が少なく、類例も多くない。本遺跡出土品も破損が激しいため、全容は不明といわざると得ない。しかしながら、これまで発見されている類例と比較すると、壁の厚さも薄く、あまり高層ではない小型品である可能性があるのではないかと考える。

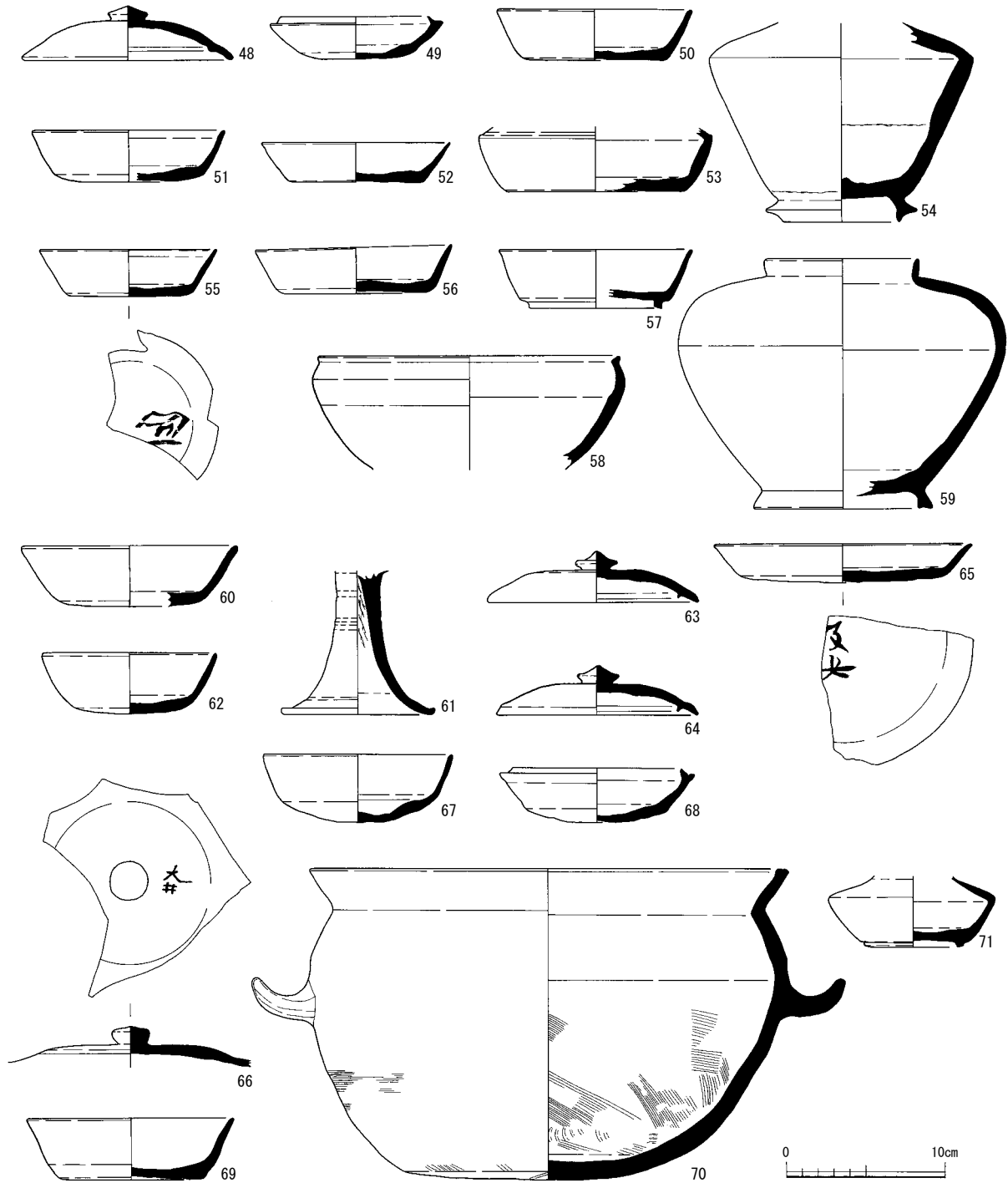
遺構出土の須恵器 (第 106 図)

S R 09 からは、48～54 が出土している。48 は蓋である。返りが消失する寸前の形態で、明瞭には作り出されない。7 世紀第 3 四半期に属すると推定できる。49 は小口径で、TK 209 型式併行期の坏身のようなものであるが、底部のヘラ削りは確認できない。返りが消失する寸前の 48 と同時期の坏と推定される。50～52 の坏 A は、52 の口縁の立ち上がりが緩やかであるものの、おおむね 8 世紀中頃から後半と推定できる。53 は平瓶である。上部を欠損しているため不明であるが、48・49 と同時期のものと推定できる。54 は台付瓶である。角張った肩の張り出しで古い様相が窺われる。50～52 と同時期であろう。

S R 10 からは、55～59 が出土している。55・56 の坏 A は口縁の立ち上がりも鋭く、古い様相がみられる。55 の墨書は判読不能である。57 の坏 B は方形高台で、口縁端部も丸く仕上げられる。59 の短頸壺は肩が張り出す新相を呈している。外反する口縁部の鉄鉢 (58) も尖底状と推定できる。おおむね 8 世紀中頃から後半に属するものと推定できる。

S R 11 からは 60・61 が出土している。60 の坏 A は器高も高く、古い様相が窺われる。61 の高坏は 7 世紀代のものと比較して沈線が明瞭ではない。ともに 8 世紀前半から中頃の製品と推定できる。

S R 12 からは坏 A (62) が出土している。深い器形で、7 世紀後半に属する可能性がある。



第106図 須恵器 (17) (縮尺1/4)

SD 42 からは、63・64 が出土している。返りは短いものの、鋭く作り出されており、摘みもしっかりと突出する。ともに7世紀前半から中頃に属する。

SD 45 からは65 が出土している。口縁の立ち上がりも緩やかで、器高も低い。底面に「口女」の墨書がある。

SD 46 からは66 が出土している。口縁部を欠損しているが、摘みはずんぐりとした、くびれない形態で、8世紀後半以降に属するものと推定できる。外面天井部に「大井」の墨書がある。

SK 37 からは67 が出土している。底面の成形は蓋そのものであり、7世紀前半に属する。

S K 40・41 からは、68 が出土している。ヘラ切り後の調整も粗雑で、S K 37 出土品と同時期と推定できる。

S K 43 からは 69～71 が出土している。69 の坏Aは口縁部が鋭くたちあがる。70 の鍋は扁平な取手がつく。タタキ目を消すように外面カキ目調整、内面は斜めハケ調整が行われる。完全に陶質化している。71 は小型の台付短頸壺である。肩が角張る古い形態を呈する。おおむね8世紀中頃までの製品と推定できる。

註

- 1 伊藤正人氏によると、耳皿が全国的に急増するのは、猿投編年K-90号窯式期に対応する段階であると指摘されている（伊藤 2000）。平底の耳皿も、灰釉陶器生産の初期段階から確認できるようである（伊藤 2001）。

参考文献

伊藤正人 2000 「耳皿ノート」『中近世土器の基礎研究XV』日本中世土器研究会
 2001 「愛知県の耳皿」『三河考古14号』三河考古学談話会

第15表 須恵器観察表（2）

※ 法量はcm

番号	出土地	器種	口径	底径	器高	調整/施文		残存率/12		色調		胎土	焼成	備考
						外面	内面	口縁部	底部	外面	内面			
1	B38-39 包含層	坏蓋	(11.8)		3.0	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ	口～底：回転ナデ、底：仕上げナデ	9	6	褐灰	灰	2	良	
2	D38 包含層	坏蓋	14.1		(1.4)	口～体：回転ナデ、天井：回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底：回転ナデ	9	9	灰	灰	2	良	
3	B38-39 包含層	坏身	(11.2)		4.2	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ	口～体：回転ナデ、底：ナデ	8	1	灰	灰	2	良	
4	D38 包含層	坏A	(13.0)	8.2	3.5	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ	口～底：回転ナデ	2	9	黄灰	黄灰	2	良	
5	E40 包含層	坏A	13.0	10.8	3.5	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ	口～底：回転ナデ	4	5	褐灰	褐灰	3	良	
6	D39 包含層	坏A	(13.0)	(8.7)	3.4	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ	口～底：回転ナデ	2	6	灰	灰	2	良	
7	D34 包含層	坏A	(12.1)	9.0	3.3	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ	口～底：回転ナデ	6	12	黄灰	黄灰	2	良	
8	E38 包含層	坏A	13.0	7.8	3.4	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底：回転ナデ	4	11	灰	灰	2	良	
9	D39 39 列ト	坏A	12.5	9.0	3.6	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ	口～底：回転ナデ	7	12	灰	灰	2	良	外面底部：墨痕あり
10	E39 39 列ト	坏A	(12.2)	(8.7)	3.4	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ	口～底：回転ナデ	3	6	灰	灰	2	良	
11	D38 包含層	坏A	(12.3)	9.0	3.1	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ		4	9	黄灰	黄灰	2	良	
12	B34 包含層	坏A	12.4	8.8	3.0	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ		2	6	灰	灰	2	良	
13	D38 包含層	坏A	(11.0)	(7.3)	3.1	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ	口～底：回転ナデ	4	8	灰	灰	2	良	
14	C39 包含層	坏A	(12.3)	(9.2)	3.5	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ	口～底：回転ナデ	5	6	灰	灰	2	良	墨書「侍丁」
15	D39 39 列ト	坏A	(13.2)	(9.8)	3.6	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ	口～底：回転ナデ	5	6	灰	灰	2	良	墨書 不明
16	C34 包含層	坏A	13.0	7.2	3.0	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ	口～底：回転ナデ	5	10	灰	褐灰	3	良	墨書 不明
17	E・F36 包含層	坏A	10.9	7.8	2.9	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ		2	10	灰	灰	2	良	
18	D38 包含層	坏A		(9.6)	(2.8)	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのち回転ナデ	体～底：回転ナデ		7	黄灰	黄灰	2	良	外面底部：スノコ圧痕あり
19	D38 包含層	坏B	(16.2)	(11.8)	5.0	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのち回転ナデ		1	8	灰	灰	3	良	
20	D38 包含層	坏B	(16.6)	(11.4)	5.7	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのち回転ナデ		1	6	灰	灰	2	良	
21	D39 D 列ト	坏B	16.7	11.8	5.5	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底：回転ナデ	8	8	褐灰	灰	2	良	
22	D38 包含層	坏B	(12.0)	(7.6)	4.0	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ	口～底：回転ナデ	4	6	灰	灰	2	良	
23	C33 包含層	坏B	12.4	7.6	4.0	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底：回転ナデ	6	11	褐灰	褐灰	3	良	
24	C38 包含層	坏B	(13.8)	9.2	3.5	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ	口～底：回転ナデ	1	6	灰	灰	2	良	
25	E38 包含層	坏B	(14.7)	10.0	3.8	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底：回転ナデ	3	12	褐灰	灰	4	良	内面底部：「×」印あり
26	E38 包含層	碗	(14.7)	8.5	5.0	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底：回転ナデ	1	12	褐灰	灰	2	良	

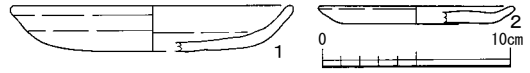
第5章 遺物

27	E39 包含層	碗	12.8	7.4	4.1	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底：回転ナデ	6	10	灰	灰	4	良	
28	D39 包含層	盤 (23.8)	(19.6)	4.0	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのち回転ナデ		1	2	褐灰	灰	2	良		
29	D39 D列レ	皿 (16.4)	14.5	2.4	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底：回転ナデ	8	10	灰	灰	2	良		
30	D38 包含層	皿 (16.4)	(14.8)	(2.5)	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底：回転ナデ	4	5	黄灰	黄灰	2	良		
31	C38 包含層	皿 (16.0)	(14.2)	2.4	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底：回転ナデ・仕上げナデ	3	3	黄灰	黄灰	2	良		
32	D38 包含層	皿 (16.9)	(14.4)	2.1	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底：回転ナデ	1	3	灰	灰	2	良		
33	D39 包含層	皿 (16.8)	(14.6)	(2.3)	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底：回転ナデ	2	3	黄灰	黄灰	2	良		
34	E37 37 列レ	碗		1.5	回転ナデ？・施釉、底：削り出し高台・施釉	回転ナデ？・施釉	1		オリーブ灰	オリーブ灰	1	不良	緑釉陶器 胎土：軟質、全面施釉	
35	E34 包含層	耳皿	4.0	1.5	回転ナデ・自然釉、底：糸切痕	回転ナデ？・施釉(ハケヌリ?)	12		灰白	灰白	1	良	灰釉陶器 口縁部：折り曲げ(1方向残)	
36	B38 包含層	高坏	(10.4)	(10.5)	脚：回転ナデ	底：ナデ、脚：回転ナデ	1		灰	灰	2	良		
37	A32 包含層	高坏	(10.4)	(8.2)	脚：回転ナデ	脚：回転ナデ	1		灰	灰	2	良		
38	A36 包含層	高坏		(8.8)	脚：回転ナデ、凹線(2)	脚：回転ナデ			褐灰	褐灰	2	良	外面：自然釉付着	
39	E・F36 包含層	短頸壺 (10.6)		(10.6)	口～体：回転ナデ	口～体：回転ナデ	4		褐灰	褐灰	2	良	外面：自然釉付着	
40	E・F36 包含層	短頸壺	(10.4)	(12.4)	体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ	体～底：回転ナデ		5	灰	灰	2	良		
41	E38 包含層	鉄鉢 (16.4)	(6.6)	10.2	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ	口～底：回転ナデ	1	4	灰白	灰白	2	良	外面：3条沈線あり	
42	B34-35 包含層	長頸瓶 (9.4)		(10.5)	口：回転ナデ	口：回転ナデ、頸：ナデ	2		褐灰	褐灰	2	良		
43	D39 包含層	長頸瓶	(9.8)	(6.2)	体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのち回転ナデ	体～底：回転ナデ			褐灰	灰	2	良		
44	D38 包含層	大甕 (36.4)		11.9	口：回転ナデ・櫛描波状文・カキメ	口：回転ナデ	2		灰	灰	3	良		
45	E37 包含層	土製品			ナデ	ケズリ			灰黄	灰黄	1	良	瓦質土製品、屋根	
46	E37 包含層	土製品			ナデ	ケズリ			浅黄橙	浅黄橙	1	良	瓦質土製品、塔の壁部分	
47	D37 包含層	土製品			ケズリ、底：ナデ				にぶい橙	にぶい橙	2	良	瓦質土製品	
48	B30 SR09	坏蓋 (12.9)		3.4	口～体：回転ナデ、天井：回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底：回転ナデ	8	1	灰	灰	2	良		
49	C31-32 SR09	坏H 9.3		2.7	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ	口～底：回転ナデ	11	12	灰	灰	2	良		
50	C31 SR09	坏A (12.2)	(9.2)	3.2	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ	口～底：回転ナデ	2	8	灰	灰	2	良	口縁部：炭化物付着	
51	C31 SR09	坏A (12.1)	(9.4)	3.3	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ	口～底：回転ナデ	4	6	灰	灰	2	良		
52	C31 SR09	坏A (15.9)	(8.7)	2.6	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ	口～底：回転ナデ	1	6	灰	灰	2	良		
53	D32 SR09	平瓶		11.4	(4.1)	体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ	体～底：回転ナデ	3		灰	灰	2	良	
54	A31 SR09	台付瓶 (7.4)	(12.7)		体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのち回転ナデ	体～底：回転ナデ	12		褐灰	褐灰	2	良	外面：自然釉付着、握ひずみあり 内面：底面陥凹あり	
55	E・F37 SR10	坏A (11.1)	(8.0)	3.1	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ	口～底：回転ナデ	3	4	灰	灰	3	良	墨書「富」	
56	F37 SR10	坏A 12.3	9.1	3.1	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ	口～底：回転ナデ	4	7	灰	灰	2	良		
57	F37 SR10	坏B (12.0)	(8.4)	3.8	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底：回転ナデ	3	5	褐灰	灰	2	良		
58	E・F37 SR10	鉄鉢 (19.0)		(7.2)	口～体：回転ナデ	口～体：回転ナデ	1		褐灰	灰	2	良		
59	E・F36 SR10	短頸壺 (9.5)	(11.1)	15.9	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底：回転ナデ	7		褐灰	褐灰	2	良	外面：自然釉付着	
60	C-D35 SR11	坏A (13.4)	(9.0)	3.9	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ		5	5	黄灰	黄灰	2	良		
61	D35 SR11	高坏	9.2	(9.2)	脚：回転ナデ	脚：回転ナデ・しぼり痕	11		灰	灰	2	良		
62	A・B39 SR12	坏A (10.9)	(6.8)	3.9	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ	口～底：回転ナデ	3	6	灰	灰	2	良		
63	A30 SD42	坏蓋 13.0		3.2	口～体：回転ナデ、天井：回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底：回転ナデ	12	11	灰	灰	2	良		
64	A30 SD42	坏蓋 (12.7)		3.2	口～体：回転ナデ、天井：回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底：回転ナデ、底：仕上げナデあり	12	12	灰	灰	2	良	焼ひずみあり	
65	D38 SD45	坏A (16.2)	(13.0)	2.5	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ・スノコ圧痕あり	口：回転ナデ、底：回転ナデのち仕上げナデ	2	3	黄灰	黄灰	2	良	墨書 不明	
66	D38 SD46	坏蓋		(2.6)	体～頭：回転ナデ・回転ヘラケズリ・回転ヘラ切りのち回転ナデ	体～頭：回転ナデ	7		灰	灰	3	良	墨書「大井」	
67	E39 SK37	坏A 12.0	9.4	4.3	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ	口～底：回転ナデ	2	8	灰	灰	2	良		
68	C38 SK40-41	坏H (10.6)		3.5	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのち回転ナデ	口～底：回転ナデ	6	6	灰	灰	2	良		
69	E39 SK43	坏A 13.0	9.2	3.9	口～体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのちナデ	口～底：回転ナデ	4	6	灰	灰	2	良		
70	E39 SK43	鍋 (30.0)	17.7	19.8	口～体：回転ナデ、体：カキメ・凹線、底：タタキ	口～体：回転ナデ、体：ハケメ、底：同心円文・ハケメ	4	12	浅黄	浅黄	2	不良	取手付	
71	E39 SK43	短頸壺	5.5	(4.5)	体：回転ナデ、底：回転ヘラ切りのち回転ナデ	体～底：回転ナデ	12		浅黄	浅黄	2	不良	台付	

3 中世の土器・陶磁器

(1) 土師質土器 (第107図)

図化できたのは2点である。1は丸みのある底部から緩やかに立ち上がる大皿で、口縁端部を再度ナデ回したことにより外面に狭い面を形成するもので、小矢戸地区分類の



第107図 土師質土器 (3) (縮尺1/4)

Bb類に相当する。2は、平らな底部から口縁を僅かに立ち上げた小皿で、小矢戸地区には存在しないが、諏訪間興行寺遺跡のII B b類に相当し、13世紀前半に位置づけられる。

第16表 土師質土器観察表 (2)

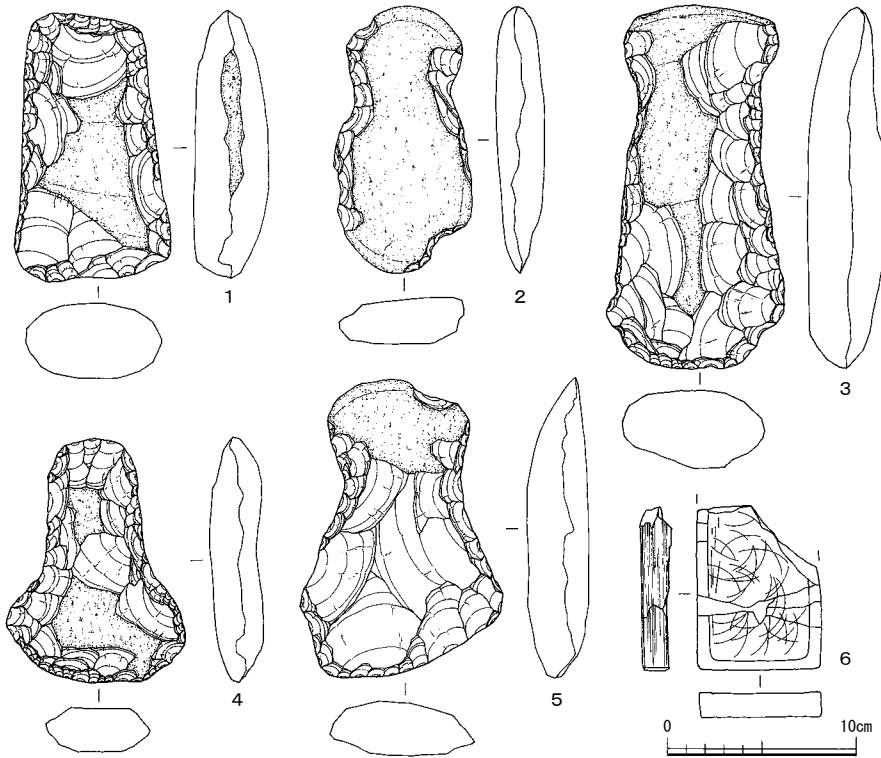
※法量はcm

番号	出土地	器種	口径	底径	器高	調整/施文		残存率/12		色調		胎土	焼成	分類	備考
						外面	内面	口縁部	底部	外面	内面				
1	B30 SR09	皿	(14.8)		2.4	口：つまみ回しナデ・回しナデ、 底：指押さえ	口：回しナデ	3		橙	橙	1	良	Bb	
2	B30 SR09	皿	(10.0)		0.9	口：回しナデ、底：指押さえ	口：回しナデ	5		にぶい黄橙	にぶい黄橙	1	良		

4 石器・石製品 (第108図)

石器は打製石斧が8点あり、石質は全て安山岩である。石製品は、硯と中砥や仕上砥、及び横口形のバンドコが各1点出土した。石質は、硯が粘板岩、中砥が凝灰岩、仕上砥が頁岩、バンドコが笏谷石である。大半は、調査区北西のD・E 32～35で包含層やSR 09から出土した。

1～5は、打製石斧である。多くは板状剥片が素材で周辺中心に調整される。1は、前述の1類で短



冊形を呈す。側辺は直線的にのび、刃部へ向け僅かに開く。2～5は、3類で分銅形を呈す。2と3は、基部から刃部へ側辺が緩く開く。3は、やや大形で両側辺上位に抉入をもつ。4と5は、側辺下半が大きく湾曲して開き、幅広の刃部をもつ。4は基部がやや細長くのび、5は刃部境が屈曲する。6は、高嶋産の長方硯で細い縁帯をもち、側面は垂直に立ち上がる。裏面は平坦に作出され、縁取りされている。陸部に円弧状の線状痕が多数みられる。

第108図 石器・石製品 (縮尺1/4)

第17表 石器・石製品観察表

※法量はcm

番号	器種	出土地	形態	石質	器長	器幅	器厚
1	打製石斧	E35 包含層	1類。板状礫が素材でやや厚手。右側辺に潰れ。	安山岩	14.2	8.3	4.1
2	打製石斧	表採	3類。扁平な板状礫が素材。	安山岩	14.2	7.2	2.6
3	打製石斧	E・F35 SR09	3類。左側辺中程に潰れ。刃部がやや磨滅。	安山岩	19.2	9.4	4.2
4	打製石斧	A32 包含層	3類。やや小形。	安山岩	13.0	9.5	2.9
5	打製石斧	表採	3類。刃部が偏る。磨滅。基端一部欠。	安山岩	15.9	10.9	3.3
6	硯	D32 包含層	陸部左端に長軸方向の擦痕。上半欠。	粘板岩	8.8	6.7	1.6

第6章 まとめ

古墳時代以前

縄文時代は、草創期の有茎尖頭器が出土した。大野市域では初例となり草創期まで遡る発見となった。早期から前期では、鍬形鎌や玦状耳飾が出土した。中期から後・晩期では、磨製石斧や石刀等があり、土器や土版がSR 02のB列以東、同04下層の18列以南、同06で僅かに出土した。各期とも遺構や遺物は僅かであり、短期的で小規模な集落であったと推察される。

弥生時代は、中期もあるが後期後半が中心である。中期では、甕や石庖丁が出土した。石庖丁は奥越地域では初例であり、稲作文化の波及を示す資料となった。後期後半は、大半が旧河道からなる。SR 02の0列以南、同04下層の18列以南、同05や同06の19列以南、同09・11のB列以東、同12の38列以南でまとめ、特にSR 04下層と同05・06・09に集中する。主に在地系の甕や壺、高坏・器台、鉢等があり、打製石斧も多量に出土した。調査地の北西に該期の集落が存在したと考えられる。

古墳時代は、前期と後期後半からなる。前期では、弥生時代後期後半と同様に大半が旧河道である。SR 02の0列以南、同04下層の20列以南、同05・06で出土し、SR 04下層でまとまる。土器は、甕や壺、高坏・器台等が出土した。後期後半は、SD 42、SK 37と同40・41、SR 02の0列以南、同09のB列以東から出土し、SR 02でまとまる。他にB 38・39やC 28の包含層でも出土した。須恵器の坏蓋や坏A・H、高坏、甕等があり、太田地区では旧河道の他に溝や土坑からも出土した。

古代

時期は、奈良時代の8世紀前半と平安時代前期の8世紀後半から9世紀前半を中心とし、9世紀後半も僅かに存在する。遺構は、主に5箇所範囲に分布する。遺物は、須恵器と土師器が多種あり、墨書土器も多く出土した。他に石製巡方や瓦質土製品、緑釉陶器、灰釉陶器等もある。

1群は、SB 01～16等があり、微高地01のほぼ全体に分布する。大半が南北方向に棟をもち、建て替え等はあるが整然と列状に群在する。SB 16と県道区の建物は、列状をなして区外へ続く。SB 01～14と対をなし、東西2列が平行して群在する構造であったと推察される。またSB 14は、桁行6間×梁間3間で本遺跡では最大の規模であり、集落の中心的な施設と考えられる。SB 08は、他と異なり東西方向に棟をもち、墨書土器の「酒富」や「南」、SB 09と同様に石製巡方が出土した。

2群は、SB 17～26、SA 01、SD 05～24、SE 04、SK 05・10、土器溜り01等があり、微高地02のほぼ全体に分布する。遺構群はSA 01とSD 05を境に南北に区分でき、集落内の区画と考えられる。SB 17～26は、1群同様に大半が南北方向に棟をもち、列状に群在する。SB 26は、東南2面に庇が付く桁行4間×梁間3間の側柱建物であり、2群では規模が大きく中心的な施設と考えられる。SE 04は、大形で井戸側下部に上下2段の木組をもつ構造であり、転用硯や墨書土器の「酒」や「口吉」等が出土した。SK 05や土器溜り01では、坏蓋や坏A等が一括して廃棄されていた。SK 10で墨書土器「公主」、土器溜り01では「但波」が出土した。他にD 15包含層から権状錘が出土した。

3群は、SB 28～30、SD 04・25等がある。微高地03に分布して調査区外へひろがる。SB 28～30は、総柱構造で北半にまとめ、他の群と場の性格が異なるとも考えられる。またSD 04は、2群のSA 01やSD 05と一連に集落内を区画すると考えられる。

また、SR 01～03・04上層は、1～3群の間で検出され、いずれも須恵器や土師器が多量に出土した。

特にSR 01のD・E 10付近では、墨書土器が約200点と多く出土しており、「酒富」・「酒」・「富」の他、「戌人」・「井口」等がある。9世紀後半の須恵器碗等も僅かに出土した。

4群は、SB 33～38、SD 39、SK 34等があり、微高地05の東半にまとまる。建物の規模は、1・2群と比べ小形だが南北方向に棟をもち群在する。SD 39の南東で須恵器等が一括して廃棄されていた。

5群は、SB 39～47、SD 45～93、SK 43等があり、太田地区の微高地06南半にまとまる。SB 43～47は、小矢戸地区の他群とは対照的にほぼ東西方向に棟をもち、側柱と総柱の構造で群在する。SD 45・46で8世紀後半から9世紀前半の墨書土器「大井」や「口女」、SK 43では坏Aや取手付甕等がまとまって出土した。また、包含層から瓦質土製品や緑釉陶器も出土した。周辺のSR 09～12も含め、5群の時期は8世紀前半が中心であり、8世紀後半から9世紀前半は少量となる。

古代における集落の変遷は、古墳時代後期後半に太田地区で形成され始める。奈良時代の8世紀前半では、引き続き太田地区の5群を中心に造営され、小矢戸地区の1・2群で形成され始める。平安時代前期の8世紀後半から9世紀前半では、5群は衰退するが1～4群に集落の中心が移動して最も隆盛する。掘立柱建物が整然と列状をなして群在し、集落が計画的に営まれたと考えられる。また、瓦質土製品や緑釉陶器は地方では稀少であり、多量の墨書土器や権状錘と石製巡方は役人や識字層の存在を示す。該期では、近在する横枕遺跡等の他集落と有機的な関係をもち、公的な機関や施設が存在する大野郡資母郷の中心的な集落であったと推察される。そして、9世紀後半に集落は廃絶されたと考えられる。

中世

時期は、鎌倉時代後期の13世紀後半から14世紀初頭と、室町時代後期の15世紀後半から16世紀初頭が中心である。遺構は、主に3箇所範囲に群在して分布していた。

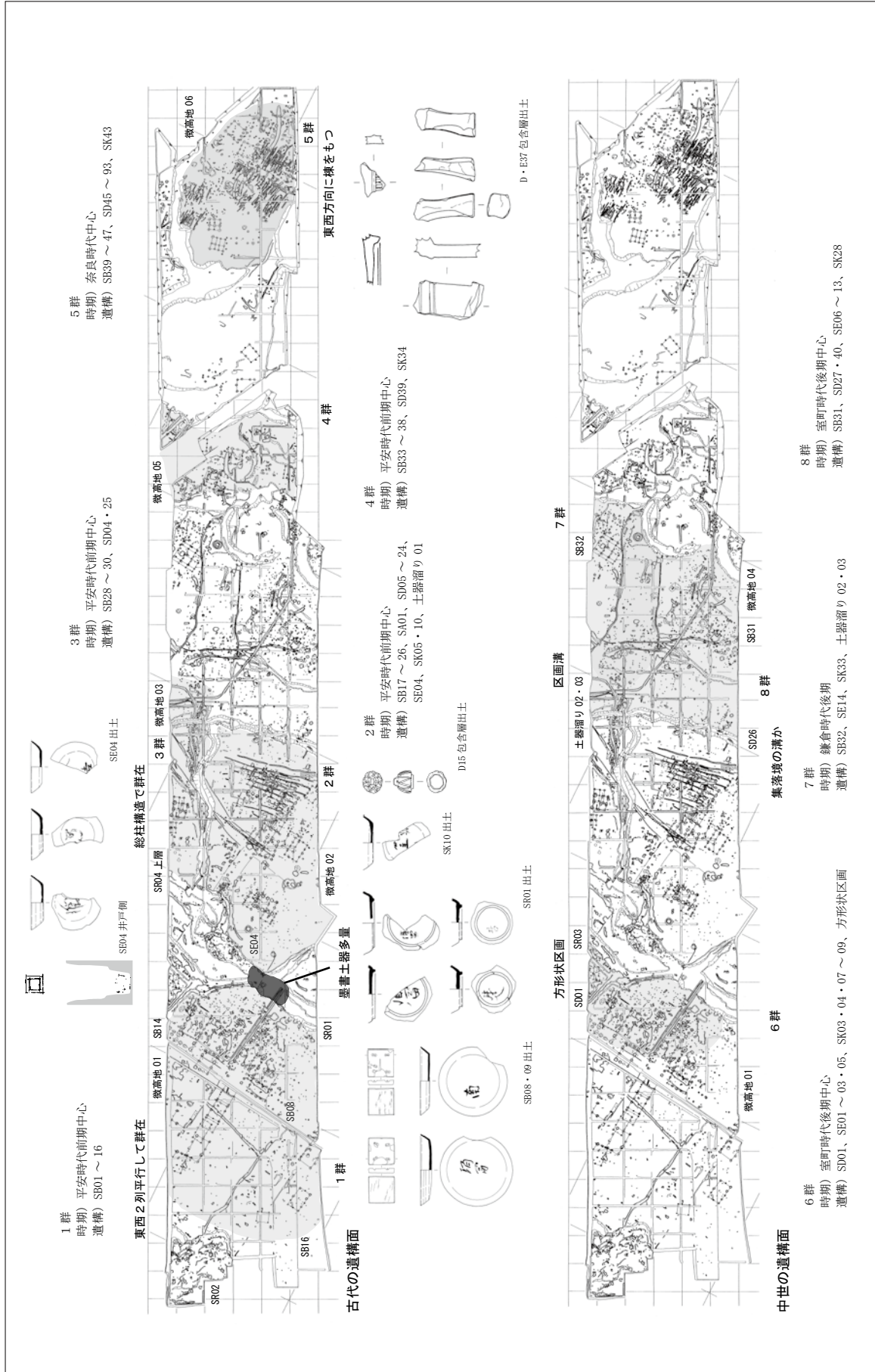
6群は、SD 01、SE 01～03・05、SK 03・04・07～09、SR 01・03と、SD 01とSR 03による方形状の区画等があり、微高地01の南半に分布する。方形状の区画は調査区外へひろがり、井戸や土坑は西半にやや離れてまとまる。遺物は、土師質土器皿がSE 02とSK 07やSR 01・03等、越前焼の甕・壺と片口鉢や播鉢、常滑焼、古瀬戸製品、青磁・白磁や石製品の茶臼と五輪塔等の多種の遺物が、SD 01やSR 03及び上位の表土から多く出土した。時期は重複するが、室町時代後期が中心である。

7群は、SB 32、SE 14、SK 33、土器溜り02・03等があり、微高地04の南東に分布する。SB 32は、南北2面に庇が付く桁行3間×梁間2間の総柱構造である。SK 33や土器溜り02・03では、土師質土器皿が多量に一括して廃棄され、白磁碗も僅かに共伴した。時期は鎌倉時代後期であり、屋敷地はSB 32を主体にSE 14等が付属し、周辺に土師質土器の廃棄場をもつ構造であったと考えられる。

8群は、SB 31、SD 27・40、SE 06～13、SK 28等があり、微高地04の南西に分布する。遺物は少量だが、SE 13で越前焼の播鉢、SK 28から越前焼の壺や播鉢等が出土し、上位の包含層から古瀬戸製品等も出土している。時期は室町時代後期が中心であり、屋敷地はSD 27・40等で区画され、SB 31を主体にSE 06～12の小形井戸が群在する構造であったと推察される。また、SD 30～33は、埋没後に同27・40が構築されており、重複関係から7群の区画溝とも考えられる。

他にSD 26は、微高地04の北端で検出され、越前焼の甕や播鉢等が少量出土している。室町時代後期に構築された集落境の溝と考えられる。

鎌倉時代後期は7群中心に6群、室町時代後期では6・8群に屋敷地が造営されている。一括廃棄された土師質土器皿、常滑焼等の東海系陶器、青白磁の合子蓋や梅瓶等の他、県道区で朱塗りの扇文をもつ漆器碗や将棋駒が出土しており、両時期とも有力者層が居住した集落であったと考えられる。



第109図 遺構配置変遷図 (縮尺不同)